182.8
Y154s

00685484

山邊習學著

釋尊と其弟子達

（上卷）

春秋社

182.8
Y154s

住友務氏寄贈書

國立圖書館
41.1.29
圖書館藏書

685484

凡例

一、本書は「釋尊研究叢書」七冊を二冊に合本したもので上卷は四冊（第一編「佛教概說」、第二編——第四編までの「教團の人々」）、下卷は三冊（第五編、第六編までの「教團の人々」第七編「救濟教主世尊」）を含む。

二、二卷に合本したことから書名を變更する必要が起つたので「釋尊と其弟子達」としたのである。

三、目次は一卷毎に大目次を附し、序文、索引、細目等は便宜上舊態を保留することにした。

上卷目次

第一編　「佛教概說」

序說——第一講、無常と苦(上)——第二講、無常と苦(下)——第三講、無我(上)——第四講、無我(下)——第五講、空(上)——第六講、空(下)

第二編　「教團の人々」

第一、緒言——第二、五比丘——第三、耶舍——第四、摩訶迦旃延——第五、三迦葉——第六、大目犍連

第三編　「教團の人々」
第一、舍利弗
第四編　「教團の人々」
第一、難陀——第二、羅睺羅——第三、優波離——第四、阿那律——第五、迦留陀夷
——第六、薄拘羅——第七、鳩摩羅迦葉——第八、須菩提——第九、聞二百億

佛教概說

釋尊研究叢書　第一編

序

十數年前から、私は釋尊研究に着手し、其間機會ある毎にその部分々々の結果を發表し來つたことであるが、今やそれ等の全部を取り纏めて玆に「釋尊研究叢書」の名の下に連續刊行することになつたことは私の喜びとする所である。

勿論是等全部は夫々既に刊行せられたものであるが、今や新しい形式を取るに當り嘗つて爲し得ざりし訂正增補の志願を滿すことの出來たのは私の第二の喜びである。

私は元、本書の全名を「釋尊及其教團」とするつもりであつたが、春秋社主人の切なる希望によりて此名を用ゐることゝなつた。但し退いて考へて見るに、私の釋尊に關する表現は、よしや精しい文獻研究や、又は教理の組織的研究ではない

にしても、一つの洞察と體讀とによりて、時代の錆を拂拭し去り、同じ人間の血の流れたる聖者の面目を表はすことに勘からぬ努力と苦心を要したことを思へば、矢張り或意味に於ける「研究」の發表というても強ち世を欺く譯ではあるまいと信じ、春秋社主人の言に聽いたことである。

茲に本書の新なる誕生の事緣を叙するに當り、懇ろに本書の刊行を勸請せられたる社の神田豐穗、木村毅兩氏に對して滿腔の感謝を表する次第である。

大正甲子春

洛東栗棘庵にて

著者

目次

序說……(一)

第一講　無常と苦（上）……(五)

無常の意義(四)——苦みは無常から(七)——佛教の現實的立場(八)——『佛說箭喩經』の梗概(一〇)——四苦八苦の說示(一二)——五蘊の意義(一五)——愛の別離の苦み(一八)——善導大師の人生觀(一九)

第二講　無常と苦（下）……(二六)

生活の素材としての苦(二二)——釋尊の比喩(二三)——トルストイの觀察(二八)——正見正思惟(三一)——愛情と慘酷性(三三)——眞實の愛(三五)——苦の轉換(三六)——鳩摩羅伽葉の修道(三七)——修道の意義(四一)

第三講　無我（上）……(五五)

金光明經の所說(四三)——惑業苦の三道(四四)——迷より自由へ(四九)——六大煩惱(五一)——貪慾の意義(五二)——瞋恚の意義(五四)——愚痴の意義(五六)——慢の意義(五八)——疑の意義(六〇)
——惡見の意義(六三)

第四講　無我（下）……(八六)

自我の定義(六八)——我と我所(六九)——我の本體(七〇)——楞迦經の所說(七四)——阿含經の所說(七六)——天親菩薩の說明(七七)——無我とは何か(八二)——蓮如上人の說明(八三)

第五講　空（上）……(一〇九)

苦と我との關係(八七)——我と空との關係(九一)——空は無に非ず(九四)——萬物の價値(九八)——萬物生成の要素(一〇二)——空と無我の境地(一〇三)——空と眞實(一〇六)

第六講　空（下）……(一三八)

龍樹の空觀(一一〇)——空の積極的意義(一一二)——眞空妙有(一一五)——親鸞の宗教と空(一一八)——四不の意義(一一九)——十四非の意義(一二〇)——空と信仰(一二三)——華嚴經と法華經の所說(一二五)——佛凡一體の心境(一二八)

佛教概說

山邊習學講述

序說

佛教の概說とい、非常な大きな問題を僅かの紙數に紹介する事は甚だ困難な事であるが、なるべく佛教の極く根本的な教義と、そしてそれを實際の上で味ひきしたことを披瀝したならば、何とか纏めることが出來るであらうと思ふ。

恐らく釋尊當時からであるだらうと思はれるが、佛教には大凡三つの旗幟があると謂はれて居る。それは

諸行無常印

佛教概說

序說

諸法無我印
涅槃寂靜印

で、どれにも印の字が附いて居る。印はしるしといふ字であるから、今日から申しまするしといふ意味である。この三つが佛教と外教との教理上の大いなる相違點である。この三つは佛教教理の特色の一といふことが出來るのである。

次に

無常
苦
空
無我

以上の二つが佛教の特色を代表して居る、謂はゞ概說になる譯であります。今はこの二つの範疇を組み合せて、以て佛教の概說を述べてみやうと思ふ。

諸行無常と諸法無我は無常と無我に當り、涅槃寂靜は空の方に當りますから前者の三つ（諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜）は後者（無常、苦、空、無我）に這入つてしまふ、前者の形式には苦といふものが無いのであるが、それは略したのである。

勿論、佛教概說は、非常に廣いものであるが併し丁度、松の實を播いて、百年二百年三百年と經つと非常に大きな大木になつて。枝葉を榮えて居ますが、さういふ大きな松は何處から出たのであるかと云へば小さな實から大きくなつたのであるやうに、佛教もやはりさうであつて、一つの松の實から、非常に大きな大木が出て、さうして枝が出て、枝の間から非常に澤山の葉が茂る、一本の松の木の葉を數へるさへ大變であるが、本へもどすといふと極めて簡單な一本の幹若しくは松の實といふ事になる。さういふ意味に於きまして、この釋尊の說かれた一代佛教も、無常、苦、空、無我といふこの四つの中からみんな凡てのものが出て來たといふことも云へるのであります。從つてその意味に於て題目を佛教概說と致しても無理でないと思ふのである。

第一講　無常と苦（上）

無常といふ事は日本の言葉としても、非常に一般に知れ亘つて居る言葉で、謡曲なぞにも「祇園精舎の鐘の音は、諸行無常の響あり」といふやうな風で、其他日本の文學書中にこの言葉は遍く行き亘つて居ります。

無常の意味

然るにその無常といふ言葉は、サンスクリツトで申しますると、アニツチヤー。ニツチヤーは「常」で、それに「ア」といふ打消しがついて、無常といふ。梵語の直譯としては正確な譯である。無常といふ事は常が無い即ち變轉常なくそして不變のものがないといふ事である。然るに世間ではたゞ無常といふ感傷的、感覺的の意味に丈け取つて居る様であるが、無常といふ事は必ずしもさういふ意味ばかりでは無い。常が無いといふ事は、例へば斯ういふコップであつても始終、變つて居る。變化をして居る證據には只今中は空であるが私が水をいれる、盆の上にあるのが、私の手に依つて上にあげられる、或はまた二百年三百年

經ちますと時代がついて一種の風味を添へて來る。又斯ういふ布（テーブル掛を指して）になりますと二十年三十年經つても、非常に變る。吾々が見て變らないといふものも非常に變つて居る。程度は多少違ひますけれども、萬物は凡て變つて居る、變化するといふと情けないといふ關係は第二に調べて行かねばならぬのでありますが、諸行は無常である。諸行は萬物といふ事です、萬物は變化をする。萬物が變化をして居るといふ意味が無常の意味であります。自然にものが變つて居るといふのである。常に變りつゝあるに對して吾々は變らないと思うて居る、そのものが變つて居るのに、變らないと思つて居りますと、あてが外れて來て困る。困るものだから世の中は無常である、情けないといふ事も自ら起つて來るのであります。

で、何故無常といふ事を一番先に出したかといふと、無常の次に苦といふものが來てゐる。苦しみといふものが來て居りますが、吾々が無常〳〵といつても苦しみといふ事を一つ本當に觀じないと、無常といふ意味も宗教的にはどうも味はれないと思はれる。併し、萬物は變化して居るといふ事も、たゞ今日の科學のやうに、客觀研究の意味で言つて居るのでは無いので、やはり佛教（宗教）の方では一度、主觀を通さなければならぬ。主觀を通さなくして、無常といふ事丈で

は本當の味はどうも解り難い。從つてこの苦しみといふものを吾々が感じますと、卽ち苦い經驗を嘗め來るときに、初めて世の中は變るものだ、無常であるわいといふことがはつきり分つて來る。道理から言ひますと、世の中は變りつゝあるといふ無常の方が先に分つて居れば苦しみといふものが非常に薄くなつて來る譯です。所が實際は、世の中は變つて居るといふ事を、概念の上では、吾々は考へて居るが、實際の上では、殆んど考へて居らないのであります。今日は大きい雷が鳴つたが、雷の鳴る事は少しも不思議は無い。當り前の事です。晴天であつたのが俄に曇つて雷が鳴つて來た。晴天であるといふ事は永久で無いから雷の鳴るといふ變化の起つて來るのは不合理でない。當り前であるけれども——今日の雷は私の居るぢき近處に落ちた相ですが——今にも落ちるのでは無いか知らと、強くきます時は非常に恐れる。苦痛を感じる。うちの子供なんかは、皆かたまつてビク〳〵して恐れて居た。それは何であるかといふとやはり本當の意味の無常といふ事が、分つて居らない。だから言ひ換へれば始終吾々は無常に對し「常」を考へて居る。凡てのものは動かないで居るといふ事を豫想して居る。それを豫想して居るものであるから、動いて來ると、一種の苦痛をそこに感じて來る。斯ういふ事であるからして道理から云ひますと無常といふ事が分つて、それからその次に苦痛といふ事が來るやうなものであるが、實障の方からいふと、苦しみを感じた時に初めて無常といふ事で順序で顚倒して來る譯です。

苦みは無常から

世尊は大　の中に、「物事が凡て豫想と違うて、さかさまになるのは無常が根本である」と說かれた。人生は思ふやうに行かない、みんな苦しんで居る。金を持つて居る人は金を持つて居るので困つて居る。金を無くして自殺したり、可愛い子が死んで母親が氣狂ひになつたり、色々世の中に悲慘な事が起る。何がもとであるかといへば、無常といふものがもとだ、無常が根本だ。自分の戀人を一生懸命に思つて居つたら、その戀人が心變りをした。その爲めに殘念がつたり、落膽したりする。といふ事は、人間の心といふものは、變らないものだといふ豫想がある。それが變つたから非常な苦痛を感じたのである。だから大體苦惱のもとは何であるかといふと無常である。理論からいふとさうなるのであるが、實際の場合はどうかといふと、苦痛を感じた時初めて無常であるといふことを思ふ。自分が捨てられると、戀人の心も、變り易い秋の空と知り、火事にでもやられると、一生懸命クヨ〳〵して家を

造つてもあてにならぬ、子供を育てゝ死なせてしまふと又苦痛を感じて來る。斯ういふ苦痛はどこから來た、世の中は無常であるから、斯ういふ事になつて始終逆に行く。事實に於ては無常は感じないで、苦といふものをさきに感じてそれからして、その苦はどこから來たかといふと變らないと思うたのが變つた、之は非常に面白い所であります。

それであるから、苦しみといふものは無常から出て來るのであるといふ事は、之は理論の上からいふので、現實の私共はこの反對で充づ苦痛を感じその苦痛から原因にさかのぼる。それであるから「苦」は結果で、「無常」は原因である。すべての苦しみは、無常が根本である。けれども事實は結果から原因にさかのぼる。以上は無常と苦との關係であります。

佛教の現實上の立場

そこで私は眞實の宗教といふものゝ立場を話したいのである。何故世尊が佛教の根本形式として、無常苦空といふもの、殊に苦しみといふ事を、何故出されたかといふ事は非常に大問題であります。

之は總ての宗教は理論から湧いて來たのでは無いので、實際、現實の苦しみといふものを、どう始末するかといふ要求から起つて來たことが知られる。如何に宗教が哲學的のかたちをつて

表現せられても、宗教の開祖の事蹟を考へますと、別に理論を考へ道理を考へた丈で宗教を興して來て居らぬ。それであるから詰り宗教といふ事は極めてプラクチカル（實踐的）なもので、現實の苦痛を取扱ふものであるといふことが知れる。

現實の苦痛を取扱ふものは例へば、齒が痛い、どういふ理窟で痛いといふ事は第二の問題で、齒が痛い、一晩眠れぬ、之を哲學的に考へて、どつちへ、何處の醫者へ行かう、心理學的に考へてどうするといふのでも何でも無い。齒が痛いから、痛いのをどうかして貰ふ。痛いのをとつて貰へばよろしい。弛んだ義齒をどうしたらよいかといふ事は向ふのする事であつて、こちの要求は、痛くて眠れない、飯も食ふ事が出來ぬ、仕事もする事が出來ないといふ、現前の苦痛を齒科醫からとり去つて貰ふ。その要求によつて、御醫者さんがある。それであるからもつと極端にいふと、苦痛は　り去られないかも知れない、あらゆる病氣が必ず御醫者さんによつて治るといふ事は出來ない。けれども、吾々が困つて來ると、御醫者によるより仕方がない。それと同樣に宗教といふものは精神上一つの苦痛があるとその苦痛をどうかしてとりたいといふ要求に基くものであります。精神上に苦痛を感じ無いならば、それはまだ宗教の圈内に這入らない。けれども精

神上に於て自分が不服を感じ、一つ苦しみを感じ、その苦しみを何等かのかたちで取り去らうとするところに、初めて宗教が現はれて來るのである。

ですから宗教といふものは極めて現實的なものであつて決して空想的なもので無い。夢でも幻でも勿論ない。現前に吾々は困つて居る、困つて居るものをどうしたらよいかといふこと、どこから苦痛が來て居るか、苦痛といふものはどれ程の種類があるものであるといふ事を、頭丈で考へることは宗教の所詮ではない。

佛說箭喩經の梗概

さういふやうな事について、釋尊は箭の喩といふ有名な『佛說箭喩經』を說いて居られる。短い御經であるが非常に感化を與へたもので、卽ち宗教といふものは、哲學的な理論研究を主とするものでは無い、實際の苦しみを始末するのが宗教であるといふ事を一つの喩を以て說いてある。それは毒箭が一本飛んで來て、それが自分の體に當つた。問題は、たゞこの毒箭を抜きとつて、あとに毒の殘らないやうにして貰へばよいのである。御醫者さんに連れて行つてその毒箭をぬいてやらうとすると、その射られた人が、この矢はどちらの方角から來たか、誰が一體射たのか、間違つて射たか、何か怨があつて射たのであるか、もう一つは箭先は鐵であるか木であるか銅で出來て居るか、箭の先に毒を塗つてあるか無いか、弓は木であるか、竹であるか、木ならば何の木であるか、羽は鷹の羽であるか、鶴の羽であるかといふやうな事を、御醫者さんに聞いて居るとすれば、それは決して賢い人間とはいはれ無いぢやないか。問題は弓の箭を研究することで無い。苦痛を除り去りさへすればよいのである。それを釋尊は非常に力說して居られる。「箭の體に入るが如し」といふ事は多くの大小乘經典に見出されるのである。

吾々が現にどこから來たといふ事無しに、一つの箭に射られて居る。箭に射られて居りながら、その箭をぬかずにもつて居る。もつて居るから非常に苦痛を感ずる感じて居りながら徒らに人生問題はどうであるとか宇宙はどうであるとか、いや何とか理窟を言つて居る。けれども、理窟は何にもなぬぢやないか、今現に苦しんで居る。それはどうしたらよいかといふ事を考へるのが急務では無いかといふ事を言つて居られる。之は釋尊が宗教といふものゝ現實の立場を明かにされたのである。

宗教といふものは、極めて現實的な——理論上にも、幾らか立場はありませうが——吾々の苦

痛といふものゝ上に立つて居ることが知られる。

所が世の中には、苦を感じないといふ人がありますが、併し、釋尊によれば、苦痛を感じないのは、必ずしも苦痛が無い。といふ事では無い。苦痛を感じないのは苦痛が無いのでは無く、ただ苦痛を感じない丈である。之は何を意味するかといふと、吾々が風邪なんぞ引いて熱が發る腹がへらぬ。それはへらぬので無い、へつて居るけれども空腹を感じない。それは熱が感じさせぬのだ。熱を除れば、腹が空つたといふことを感ずるに違ひない。又そこに痛みがあつても熱の爲めに正氣を失うてしまつて、痛みさへ感じない事は幾らもある。であるからして宗教の第一歩は吾々が苦をもつて居るといふ事である、もつて居つてそれを感ずるといふ事である。その苦をもつて居るといふ事を感じないならば、まだ宗教に這入つて居らぬ。

四苦八苦の說示

そこでその苦に就てよく經文の中に、四苦、五苦、八苦が出て來る。

四苦は生老病死で、生の苦は生まれる時の苦しみだと普通いふのであるが、生まれる時は、吾々は苦しかつたか、苦しくなかつた分らない。嘸苦しいに違ひないが、御母さんは苦しかつたか知らんが、生れるものは、苦しいかどうか知らない。理窟上苦しむべきもので

あるとして生の苦があるといはれるのであるが、それよりも私は寧ろ生存上の様々の苦しみと解する方が適切であると思ふ。即ち生きて居る間の有形無形様々の苦しみを生苦と見た方がよいと思ふ。

生の苦の中にも澤山のものがあるが、全體からいへば、生きて居るといふ所に一つの苦しみがある。生きて居るといふ事が既に存在の苦しみであるといふことの意味が生苦である。

老苦は年の寄つた苦しみ、之は講釋しないでも分つて居る。九州の方で若返法が宣傳せられて老人の御方が段々行かれる相であるが、之は老を如何にして、なくしやうかといふ事から起つたものであるは云ふ迄もない。もう一つ面白いのは一面の觀察であるけれども、人間の文化といふものは、老を如何に處分せうかといふことに多くの力を盡してゐると思ふ。美貌術はその一つである。私は前から感じて居るのであるが、釋尊當時、韋提希夫人といふ方が囚へられた夫に差入をする時に、麥紛を蜂蜜に交ぜて體に塗つたと書いてあるからあの時分から白紛があつたと考へられる。白粉といふものは老を征伐するものとして、六十幾つの雁治郎が十七八の娘になつて成功して居る。如何に白粉を塗つたからとて、皺を根本的に征伐する譯には行かないのである。

第三番目の病の苦は、御互ひに經驗がありますから講釋は要らぬ。

人生あらゆる惱みのうち生老病は誰も經驗しますが死は誰も經驗した事はない、けれども、病氣が極端になつて、死ぬる事は苦しいだらうと思ふ。御醫者さんの話を聞くと、苦しみは無い、頭がどうかして居るから、肉體的な苦しみを表現して居る丈で、本當は苦しみといふものは無いと相である。さうすれば餘程樂であるが、たゞおかしい事には、死に對する豫想の苦しみがある。アメリカで近代唯一の文學者と云はれるエドガアポーの書いた書物の中に斯ういふ苦痛がある。罪人を縛つて置いて、向ふの方から及渡り六尺位の斧が機械の仕掛で追々と頭の眞中に來るやうになつて居る。之が死の苦を最もよく象徴して居るものであらうと思ふ。斧が廻つて來る、刻々に近づいて來る、之が死の苦しみである。私は少年時代に、鐵棒からさかさまに落ちて、ものゝ五分間も氣絶して居つたが、痛くも痒くも無い。あれで生きかへつたから樣々に苦しむが、あれで死ぬのだと樂なものだと思つた。此頃は情死が流行りますが、非常に愉快なものだ相で、やつた人の話によると、世の中の人がみんな阿呆に見える相である。情死して助けられた人の話によると海の中へ入ることが絹の蒲團の中に踊り込むやうな、何ともいへぬよい氣持だといふ。死の苦は、常識のある場合は苦しいが、常識を少し外れて來ると死といふものはさまで苦しいもので無いらしい。吾々に常識ある間は、豫想の苦みに襲はれる。學校の先生に教はつた譯ではないが、みんな一樣に死を恐れて居る所がまたおかしい。併し兎に角常識に於ては死といふものは非常に大きな驚異であり苦みであるに違ひない。以上を四苦といふのです。

五苦といふのは、之に愛別離苦といふのが加はる。愛の別離の苦しみ。愛が別れて行く苦しみ。愛情の破綻である。愛情の破綻の苦しみといふものが非常に大きいので、八苦の中から一つ別けて、生老病死に加へて五苦といふ。

もう一つ多くして八苦といふのは、怨憎會苦、嫌なものに會ふの苦、五蘊盛苦。之が又わからない。わからないが暫く從來の通りに解釋してゆきませう。

五蘊の意義

五蘊は五つのあつまりで

色、受、想、行、識、

五蘊といふのは吾々の肉體と精神の事で、「色」は私共の肉體、受といふのは知覺、「想」は想像である。「行」は、本當に佛教の專門語でこの中に吾々の精神の活動として四十六通りを擇めてを

る。卽ち吾々には種々の精神活動がある。例へば、怨めしいとか、憎いとか、喜ばしいとか、悲しいとか、樂しいとか、つらいとか、さういふ樣々の精神活動を心理學的に分つて四十六としたのである、それを行の中に攝めてある。識は人間の自覺的意識である。人間といふのは何であるかといふと、受想行識の精神と、色の肉體である。極めてわかり易くいへば肉體と精神の二つで、初めの色は肉體、知覺想像も、四十六の中に這入つて居る、けれども吾々の生活では、知覺と想像は甚だ重大である。例へば、若い學生が、未來は大臣になるか、何になるか分らないが、それを若い人は想像で行くのである。金持になる、金がたまるだらうと思つて生きて行く。希望に生き想像に生きると其の人の生活は非常に大きくなる。現實は詰らない生活をして居つても、想像が豐かであれば、立派な精神生活が出來る。西行や芭蕉が財產も何にも持たずに云はゞこの想像によりて歌や俳句を作つて居る。そしてその生活は非常に豐かな、金があり學問があるよりも立派な生活である。知覺の鋭敏な人も知覺が鋭敏であるといふ事によつて豐富な生活が出來る。色々の精神活動があるが、知覺と想像は非常に大きな働きがあるので四十六の中から特に選び出して別に出して來たのであります。從つて五蘊といふ事はどういふ事かと申しますと五蘊といふ事は、吾々人間一人々々は五蘊假和合のものである、假りに五つがより集まつて居るものであるから、例へば竹を持ち藁を持つて芝の庵をつくつたやうなもので、假りにこしらへたもので、それを取り去れば無くなる。次に(一)五蘊盛苦、盛んなる苦といふのはどういふ意味かと申しますると肉體の健全な人の苦みのやうに解せられてある。不健全な肉體が健全になると別の苦しみが來るそれは病である。私共痩せて居ると、癰だの疔だのいふ腫物はやらぬ、けれどもよく體　肥つて居る人は背中に癰が出來たり、疔が出來たり、糖尿病にかゝつて苦しむ、御馳走を食つて居るからかも知らんが、體の大きいものは特別に腿がすれて困る、汗が出て困る、私の知つて居る人で、夏になると誰に會ふにも、裸で會ふ、褌も出來ない。御免蒙つてと裸でやる。さういふ人もある。夏になると四苦八苦だと言つて居る。之は人間もさうだ。體が弱いたつて心配するに當らない。體がよはければそれ丈の缺點があると覺悟して居ればよい。強いといらぬ事件に賴まれて却て平地に波瀾を起す。體が達者になると、肥つて大きいには大きいが、五蘊盛苦で、いらぬ苦しみに苦しんで來る。結局苦しみは免れぬわけです。

愛の別離の苦み

釋尊が特に八苦といふ所まで行かぬ前に五苦の中に愛別離苦を入れられた事は非常に面白い。愛別離苦といふものは何であるかといふと、今日の新しい言葉でいへば愛情の破綻である。之は人間の苦しみの中で、或場合に於ては、病氣になつて苦しむよりも年をとつて苦しむよりも何よりも苦しい。それから又年が行くといふ事で愛情が破綻することもある。若いので人に可愛がられたが年が寄つて可愛がられぬやうになつた。老といふ事で愛が別離して來る、病氣になつたために、達者な時は人にもてたが、みんなに捨てられた幾ら可愛いものでも二年三年床に就いて居つたらどんなに可愛がる人でも皆捨てる。それが愛別離苦。それからして天下を料理するやうな人でも、家へ歸つて奥さんの機嫌が悪いと、卽ち奥さんが魔を一つ儉約すると堂々たる大人物でも心を曇らせる。議會に立つてはピストルの一挺も物の數とせんものが、一寸醫を儉約せられると色々の破綻が起つて來る。金を損をしても困らぬものが、家庭の中の愛情の破綻が非常に大問題になつて、それが少しかうじて來ますと、よく新聞に、殺したり傷けたりして居るのであるが、あれは愛情の破綻の變形から多く起つて居る。吾々は何等かの形で皆々が斯ういふ經驗をして居ると思ふ。

善導大師の人生觀

此五濁五苦八苦等ハ通ジテ六道ニ受テ未ダ有ラ無者ハ常ニ逼惱ス之ニ若不レ受ケ此ノ苦ラ者ハ卽非ニ凡數ノ攝ニ也

之は善導大師の著『序分義』の終りに書いてある。五濁は五つの濁といふものであつて劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁。一番始めは時代が濁る、世の中が濁つて我儘になつていかぬ、見濁は、觀方や考が濁る。煩惱濁は、煩惱を儉約して出さなければよいがある煩惱を皆出すから濁る。衆生も濁る、人類全體が濁る、命濁は天死である、若死をする傾向がある。この五濁五苦八苦は六道に通じて（六道は地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上をいふ）受けて未だ無きものにあらず。まあ今日の言葉でいひますと如何なる階級の人でも、どのやうな人間でも五濁五苦八苦、斯ういふ苦しみを經驗して居らぬものは無い。常に之に逼り惱される。若しこの苦を受けざる者は凡數の攝にあらず。若しこの苦しみを受けないものは卽ち凡夫の仲間で無い。それは凡夫で無い聖者か、苦しくは、馬鹿か仙人か、人間としてならば必ず斯ういふ苦しみがあるのである。故に私は苦しみをもたぬといふならば、夫は馬鹿か若しくは仙人である。凡數の攝にあらずといふ鐵案を下された。卽ち今迄苦しみは感じませんといつて居ても駄目である。今迄感じない

人は此さき感じ得る。金を持たぬ人間は危い事は無い。金を持つと體を大事にしなければならぬ。昔富籤が當つて足二本で歩いて居ると轉んでは危い、金があると大事だといつて四足で歩いたといふ、皮肉な話ですがさうなる。高い所に居る人は落ちる恐がある。苦しみの無い人はまさに苦しまうとして居るのだ。苦しみのある者は苦しんで居るから議論は無い。結局の所この苦しみを受けないものは凡數の攝にあらざる也と、善導大師は鐵案を下された。

（一）五蘊盛苦は、よく調べた所が、五蘊に盛らるゝ苦み、卽ち存在に卽した苦みの意で、確實な經典では七苦となつて、五蘊盛苦はそれを全體總括した苦みとなつてゐる。こゝに訂正しておきます。

第二講　無常と苦（下）

生活の素材としての苦

それであるから、苦しみといふ事が宗教に這入る第一歩で、從つて之をどう始末するかといふ事が問題になるのである。私共はたゞ苦しみをとつてしまへばよいと思ふのであるが、たゞ苦しみをとつてしまふといふ事では所詮はない。勿論宗教へ這入るといふ事は、或る意味に於て苦しみはとれるが、それではまだ眞實の意味をなさないのである。換言すれば、如何に苦しみをとるか、どういふ風にして苦しみをとるかといふ事が大事なのである。苦しみをとり去つてしまふといふ事は實はあり得ない事で、死んでしまへばどうか知らないけれども、生きて居る間は、善導大師の云はれたやうにこの苦しみを受けないものは、凡夫の仲間に這入らぬ。聖者にならない限りは苦しみをとる事が出來ぬ。所が聖者でも、亦苦しみが別の形になつて出て來る。凡夫の苦しみとは違ふけれども、聖者でもやはり苦しみといふもの

は非常に必要な、必要なといふより苦しみはなくてはならぬことになる。確か逝くなられた森鷗外さんの文章か何かに「羅漢が虎に乘つて居る。虎を殺さずになづけて制御して居るといふ事によつて如何にも羅漢に力があるといふ事がわかる、虎が羅漢の言ふ事を猫のやうに聞いて居る所に、羅漢の威力が示されてゐる。それはどういふ事であるかといふと虎を殺さない所がよい、虎を殺さないで、猫のやうに順つけるといふ所に味がある」といふやうなとがあつたと記憶しますが、苦しみもやはりさうであつた、苦しみをなくしてしまふといふ事は一向趣が淺い。苦しみを生かして置いて、さうして苦しみをよいやうに使つて行く、苦しみをよい工合にこき使うて行く。今迄は宗教の信仰に這入らない前は、たゞ苦しみに使はれて居た。所が一つ信仰といふ體驗を得ると苦しみを勝手に使うて行く。そんなら苦しみが無いかといへば、ある。さういふ狀態に行くのが宗教の苦しみに對する態度である。それで苦しみといふ事を、宗教の立場では、どうするのかと云へば、云はゞ美化し創作するので、絹とか紙とか筆とか、繪具であるとかいふものがなければ、畫は出來ないと同樣吾々の生活といふものも苦しみといふものが素材になるのでその苦しみといふもので、本當に生活の畫が書けるのであるから、この苦しみといふ事を眞面目に考へて行かなければならぬ。

釋尊の比喩

それに就いて非常に面白い喩を釋尊が出して置かれました。この喩は彼の有名な露西亞の小說家トルストイを非常に驚かした喩であるが、それはやはり吾々が苦しい狀態にあつて而も苦しみを知らずに居るといふ一つの喩である。

或る人が野原を行くと、猛獸に出會つた。猛獸に追つかけられて走つて色々とかくれ場を見出した。けれども見つからない。丁度運よく、大きな空の井戸があつたので、その井戸へ這入らうと思うて、飛び込まうかと思ふと、幸にして、大きな藤蔓が下つて居る。之は都合のよいものが見つかつたと思うて藤蔓につかまつて、井戸の中へ這入つた。すると猛獸が蔓を噛まんばかりに若しも上つたら食つてやらうと待つて居る。それから下の方には亦非常に恐るべき大きな蛇が口をあけて待つて居る。大變だ、さう思つて藤蔓にぶら下つて居ると、運の悪い事には、鼠が二匹出て來まして藤蔓を噛り出した。白い鼠と黒い鼠が大事な命の綱を噛る。いつか自分は落ちるに違ひ無い、困つたと思うて居る時に、腹が空つて來たので、自分のまはりを見ると非常にうまい果物が澤山なつて居る。それを口にした時に何んとも云へぬうまい味がした。

そこで最後に釋尊が批評を與へて、この人は獸に追つかけられて井戸の外へ出る事は出來ない井戸の下には蛇が待つて居る。命とたのむ藤蔓は白い鼠と黒い鼠が噛つて居る。實に危い狀態にある。初めは非常に苦痛を感じたけれども腹が空つてわきを見てみると果物がなつて居る。そこでその果物を食べて苦痛を忘れ恐ろしい事を忘れて喜んでその井戸の中にぶら下つて居つた。之は抑も何を意味するかといふと、言ふ迄もなく藤蔓といふのは、吾々の命の綱であつて、白鼠と黒い鼠といふのは晝夜である、夜と晝と夜と交る〳〵毎日大事の命を噛つて居る、百二十五歳迄大隈さんは生きるといつて居つたが九十歳にもならずに死なれました。實に百年といつた所で僅か三萬六千五百日、實に情けないものである。三萬六千五百回、鼠が噛るとどうしてもやらなければならぬ。それからかたへにあつた果物は何かといふと五慾、五つの慾望を果物に喩へてある、五つの慾望に吾々は欺されて居る。第一財產慾、人間は財產の慾望が強い。第二番目は色慾、之れは學問的に考へて見ましても、吾々の種族を維持する爲めに色慾はなくてはならぬ。第三番目は食慾で、一個人を存續して行くのには食慾がなければならぬ、それから四番目は名譽の慾望、之も實に強大なもの。第五番目は睡眠の慾、眠たくなつて來ると何もかもいらないたゞ眠ればよい、睡眠が不足である眠れないといふ事は非常に人間生活に於て困つた事です。さういふ財慾、色慾、食慾、名譽慾、睡眠慾、といふ、この五慾のうまい果物のために、この人はさういふ恐ろしい間に居つても、平然として何等恐ろしさも苦痛も感ぜず、この果物を食べて喜んで居つたといふのである。

殊に最後の所は釋尊一流の辛辣を極めて居る。さういふ恐ろしい人間生活をして居りながら、苦痛も感ぜず、恐れも感じないといふ事は何であるか、其原因は此五慾の果物を食べて恐れを感じて居らない。自分といふものは全く未解決であつて重大な問題を解決しなければならぬ、解決しなければならぬ問題を解決しないで、さうしてわきにある眼の前のうまい食べ物に氣をとられて、平然として居つたといふ。

釋尊はその事は說いて居られないが、獸物に追つかけられたといふ事は、過去を意味するのだと私は思ふ。吾々は、過ぎ去つた過去といふものをどうする事も出來ない。もう一返子供のやうに、若い時代に歸つて見たいと思うても、之は皆んなが、まるで心太をつき出されるやうに突き出されてしまふ。ですから過去は現在になり現在は未來へ突き出される。吾々の生活といふもの

は段々過去に脅かされ、過去に歸る事が出來ない。人間といふものは慾望がみんなかなつて見るともう一返昔に歸りたいといふ心になる。傳說によると平清盛は、太陽の沈んで行くのを扇でよび返さうとしたといふ。確かに清盛位な人間になるとさういふ事は考へませう。金が欲しい名譽が欲しい、それが皆かなふと、今度は一返太陽を逆にして見ようと欲ふ。清盛にしても秀吉にしてもやつて見ようと思ふとは大抵やつてのけた。併しだん〳〵と月日は容赦なくたつてゆく。自分としては若い時のやうに生活の感味はなくなる。何んとかして昔の自分に返りたい。所がいかに偉い人でも過去といふものにはかなはない。どうするとも出來ない。それを象徴したのが井戸から出ようとすると獸物が牙を鳴らして居るから、出るとは出來ないというたのである。始終吾々は過去に歸らうと思ふが歸る事が出來ない、不可抗の勢を以て下に引かれる。さて下の方では大蛇が口を開けて待つて居るといふのは、吾々の前途を意味する、死ばかりで無い吾々の前途といふものは、實に考へて見ると危ないので何とも思はなければ何とも無いが、大事をとると實に危ない。皆さんが前途を何とも思はぬといはれるならば、それは皆さんが、自分の生活を非常に虐待して居られる、皆さんに生活がない事を意味する。自分に經驗がある。或る仕事を始めました時に、どうか命が欲しいと思うた。後にも先にも一返、二月ばかり、それは今迄研究しましたものを纏めた時に、それ丈の命が欲しいと思つた。欲しいとなると危ない。私が自分の命をどうする事も出來ない。たゞ生きて居たいと思ふ丈である。ですから人間が生命を重んじて來ると前途が危ない。といふ事は決してたゞ無常だから危ないといふ、さうした常識的なものでは無い。即ち自分の生命、自分の生活といふものが非常に重大になつて來ますと、誰が自分といふものを運んで居るかといふと自分そのものでないものがやつて居る。何となれば、私がどんなに一生懸命になつても私を殺し得る事件は私の力以外に澤山ある。今夜も私は安心して生きる事は斷言出來ない。雷は落ちるなと言つても、落ちて來る。その外私のからだにどゝいふ病氣が這入つて居るか知れない。地震といふものは今日東大の地震計でも一分間さきには分らない相である。それでは何にもならぬ、文明といふけれども何故せめて二日三日前にさうした危險の出來事の分かる機械を發明し得ないのであらう。大正何年の何月何日の何時頃には、何處どこに大地震が起るといふ事もいひ相なものでは無いでせうか。言はれようと思ふが、人類にはそれ程の欲望は無いと見える。愈々たより無い、可なり賢う見えても如何にも賢うない事が澤山ある。みんな生命をもた

ぬ。それを今世尊に從へば、藤蔓の下に大蛇が口を開けて待つて居るといふ事に喩へてある。之は實に當を得た象徴だと思ふ。

皆さんにはさういふ經驗があると思ひますが私、度々あります。死ぬかと思ふとどうも下へ落ちるやうな氣持がする。常識を失はない限りは下の暗い所へ落ちし行くやうな氣がする。それでありますから吾々の前途には、暗黒な深淵の中から大蛇が口を開けて待つて居るといふ事はまことに適切な象徴だと思ふ。

トルストイの觀察

こゝで皆さんに特に御話致したいのは、未來に對する非常な不安を吾々が持つて居るといふ事である、吾々の生命といふものが非常に脅かされて居るといふ事を篤と考へて頂きたいとである。未來の生活を運ぶものは自己の能力では無い。例へば五年十年生きて居ると、何が起つて來るか知れぬ。自分が一つの事業仕事をやる。列へば、愛情なら愛情といふ一つの問題が起る。卽ち人間の生活が充實して來れば來る程、前途といふものが非常に危險なものである。況んや死といふものは、吾々に動物的恐怖もありますが、肉體を殺すのみでない、精神上に非常な打撃である。

自分は十八の時に二三の友人に死なれて、心から死といふものを恐れ初めた。それは死が私の希望なり理想なりを微塵に壞はすからである。それでは死に對する何か防禦をもつて居るか、甚だ貧弱な防禦しかない、養生位なとで死に對する防禦は甚だ少ししかもたぬ。それであるから吾々は人生に眞面目であればある程、未來前途に對し、色々な不幸とか災難とかいふものゝ豫想に對して、非常な恐れをいだいて行かなければならぬのである。

それで只今の喩に歸るのであるが、この喩をトルストイはどこで見たか知らないが、多分パリー語からの英譯か佛譯か何かで見たのであらうが、彼はそれを見て、非常に敏感な人であるから苦しんだ。畢竟人生はこれだ、二千何百年前のこの喩の人生觀から、何人が免れ得るか。そして殆んど三年間苦しんだ。彼の先輩であるツルゲーネフはいうた。君は宗教家の眞似をせんでもよい、小説家として充分の天分があるからだまつて小説を書けばよい。トルストイ　小說なんか勝手きまゝに嘘ばかり書いて居る、その間に死が迫つて來て居ると、苦しんでこの世尊の適切なる教をトルストイは消化して、そして眞面目に道を求めて行つた。それを一つの喩で表はして居る。丁度、世尊の藤蔓のやうな喩で自分が味はつた事を更に別の方面から言つて居る。

それは丁度、川の流れを渡るやうなもので、自分はこちらの岸からあちらの岸へ渡れといふ命令を受けて、櫂を貰つてこぎ出した。中流へ行つた所で、川上から澤山の船が段々流れて來る、而も順風に帆を上げて、舩歌湧くやうな音樂とともに流れて來る。「君はどこへ行く」「この流れを横ぎつて岸へ行く」「馬鹿なことだ。下らうぢやないか、一緒になつて船を合せやう、君は歌が上手だから歌つたらよいぢやないか」そこで喜んで船ばたをたゝいて歡樂を盡して下つた。暫くして驚いた。川下に一つの恐ろしい底うなりを聞いた。段々氣を附けて見ると、川の下は千仞の絶壁になつて居る、その瀧壺に落ちる音を聞いた。この順風に帆を上げて川を下つて居ればやがて船は微塵に壞れなければならぬ。一體自分は何の爲めに船に乘つたか、向ふの岸に着く爲めで瀧の下に落ちる爲めで無いと考へて漕ぎ出した。所が仲間のものは、そんな事は無い、一緒に下らうぢやないか、といふけれども、たつた一人群を離れて向ふの岸に着いた。

川の流れは人生の流れで船と櫂は人間自由意志である。人間は下つて瀧に落ちようと、向ふの岸に着かうと自由意志をもつて居る櫂である。川上から人が澤山船に乘つて下つたといふのは、人生の流れを人間は皆な、樂しみを求めて生の要求にまかせて、人間の生れつきの欲望、本能傾向に驅られて、歡樂主義をとつて人生の流れを性能に從つて流れるばかりで少も努力しない。自分が歌が上手だとほめられるといふのは、小說で名聲が世界的になつて、人に讃美されながら行くと終に千仞の瀧の底へ落ちなければならぬ。對岸は宗教である。自由意志をもつて努力して生の死の流れを渡つて彼の岸に到るのである。これはトルストイの懺悔錄に書いてある。

正見
正思惟

之は如何にも佛教的な喩であつて、世尊の常に用ひて居られる人生の流れである。その流れを横ぎつて彼の岸に往く、彼の岸は何であるかといふと彼岸である。彼岸といふことは詳しく申しますると、到彼岸、パーラミター、パーラム岸、イターは往く卽、飜譯すると、到彼岸である。到彼岸は今も年中行事になつて、晝夜平均の時、彼の岸に到る道を求めるのに都合がよいので、聖德太子が初めて定められたといふ事を、聞いて居るが、教の船に乘つて向ふの岸に着くのである。之は實にトルストイが釋尊を中心に慕ひその喩をよく味はつて、それを自分が體驗してその教へに從つて、彼の岸へ着いた。卽ち井戸の中の藤蔓に下つて、恐ろしい苦しい中に、自分の傍に五慾の果物を食べて忘れて居つた。トルストイの喩によれば、中流にして舩歌の樂を聞いて下つたが目醒めて向ふの岸に着いたといふのである。

それであるから、吾々が現在のやうな狀態にあつて、若し皆さんが、玆に何等かの解決法を御持ちになるとするならば、どうしても一つこの喩を突破しなければならない。若しさうした態度に出なければ誤魔化しである。それであるから、釋尊はこの宗教に一番大事な所は、現實を正しく見正しく考へる（之は八正道といつてこの外に六つありますがそれは略します）。正見正思惟、この苦しみといふものなら苦しみを正しく見正しく考へる。無常といふ事を正しく見正しく考へる。無常といふものに就いて吾々はどれ丈の能力があるか。世界は始終變化して居る。變化して居るものその儘を許す事が出來るかどうか、無常だといふ事は事物が變化するといふ事ばかりで無い、吾々の愛情も破綻する。人間同志の友達夫婦親子兄弟、斯ういつたものと愛情生活をして居る。所がそれが變つて行く。それからしてお互ひの吾々の心といふものも始終はげしく變つて居る、吾々の愛情も破綻する、それが第五番の愛別離苦でありまして、愛が別離して行く苦しみがある。さういふ苦しみに對して一體どういふ態度をとつたらよいか、之は實際問題であつて、さうして吾々の先輩も隨分つまづきを見せて居つて吳れる。

愛情と慘酷性

この間伏見の公會堂で夜御話致して、最後に人間は愛情といふ名のもとに隨分慘酷なことをするといふ御話を致した。その例として母親が子を殺すといふ御話を致しました。色々の逆境に目がくらんで、さうして自分の胸中が苦しくなつて、もう絶對絶命になつて來る、生きて居れぬ、死なふ、生きて居るよりは死んだ方がましだ、苦痛にたへられないから死ぬといふ事は一つの問題である。死ぬといふ事が果して解決かどうか、死といふものは決して解決にならない。吾々が自殺したからといつて、解決にはなつて居らない。たゞ一つのものを誤魔化す、逃避するに過ぎない。生きて居るよりは死んだ方がましだ。自分が死ぬるだけならよいが、新聞を見て居ると、此頃も東京の御醫者さんの、奥さんが四人の子供を殺して自分も死んだ。この春から新聞を注意して居ると隨分ある。苦しみに目をまはして非常な間違ひを起してしまふ。何故殺すかといふと、自分さへ斯ういふ苦しい世の中には生きて居られぬのに可愛い子供をどうして後に殘して置けやうか、さすれば此苦しみを見させるに忍びぬ。それで殺すといふ。併し之は愛の名の下に自分の愛別の苦しみを脫れやうとするので、可愛いから殺すといふが、自分一人死ぬのは辛い、子供と自分との間の愛が破綻

するのを恐れてこゝに可愛い子供を殺すといふ恐ろしい結果を生んで來たのである。自分の愛が壞れるのを恐れる、情死する人は二人でよいが、この場合は情死して呉れ手が無いから、子供に無理強ひに情死を強いる、むしろ御母さんは淋しいから死んで呉れと賴んで死ぬ方がまだ殊勝らしい。それを正々堂々何等疚しい所なく殺して行く。どうも無情である。反對に斯ういふ事を考へるとよい、自分は死なゝいで子供をのこしてわきに居る、後添へが這入つて來た。その後添が子供を虐待するのを自分が見て居れば母は滿足だと思ふ。表面では氣の毒に思ふ、けれども子供の心と自分の心が一つであるから衷心は滿足である。之と反對に皆んなが仲よくして自分の存在を忘れる程、滿足に子供が育つて居れば、母は全く自分の愛が取られて別離するのであるからたまらぬ。子供は虐待されて居つても、虐待されて居る場合は子供と自分が一つでありますから愛が別離しない。何よりも愛の別離を恐れる。殘して置くとその子供が取れはしないか知れぬといふ。苦しんで居る間は自分を慕うて居るから滿足である。甚だこまやかな批評であるが吃度さうに違はないと思ふ。夫であるからして、若しも自分の殘した子供が、周圍に何等の破綻も感ぜず、自分を忘れる位完全に育つならば、喜ばなければならぬが、事實としては決して滿足しない。全く自分からとられてしまふのであるから。

眞實の愛

故に若しも母に本當の愛があるならば、彼女は自分の愛を犧牲にして子供を育てるであらう。天龍寺の峨山和尙の御母さんは、少い峨山が義堂和尙に貰はれてからは、うちへ歸つて來ると、二階に机と書物をやつて祿々御馳走もしてやらない、自分を可愛がつて呉れない。そこで御母さんの所へ歸つても面白くないから歸らぬ、それがあの大德をなして居る。眞宗の蓮如上人は七つか八つの時に、その母が自分の身を退かなければならぬやうになつて、愈々身を退く時に蓮如上人に遺言した。「どうか和子の一生の間に佛法を立派にして呉れ」。傳說には石山の觀音樣だといひますが私は觀音樣はそれより外には無いと思ふ。卽ち自分の愛情といふものを全く犧牲にして居る。蓮如上人は一生涯母をさがしたが一生涯見つからなかつた。蓮如師があの偉大なる人格者になつたといふことは全くあの母が自分の愛情をなくして身を退いた。そこに種がふくまれて居る。これこそ本當の觀音である、源信和尙にしてもさうだ、母の本當の愛があの偉大をなした。若し本當の愛といふものがあつたならば、自分の愛情といふものは犧牲にして卽ち享樂することをやめて本當に子の爲めにはかる我の無い愛でなければなら

ぬ。母が子を殺すのは可愛いから殺すので無い、自分と愛情の破綻を恐れるから子供を殺す、愛別の苦しみはのがれる事が出來ない。私はその話をした。時間がなかつたからこれ程詳しく話す事は出來なかつたが、あとで一人の婦人が見えて、今夜の御話に驚きましたといつて御話があつた。「私は實はさういふ場合に立ち至りまして、殺す迄に苦しんだ。殺すのがどうして惡いかもう一返話して呉れ」と申したので、上のやうなことを話しましたら大變得心して「斯ういふ事は私一人で無い、隨分天下には澤山あるから皆んなの人に聞かせてやりたい」、としみ〴〵言はれた。

苦の轉換

故に宗教を信ずるといふことは詰り四苦七苦にせめ立てられた時にどういふ態度をとるかといふ事である。それが隨分、立派な學問や修養をして居る人でもこの苦が襲うて來ると目がくらんでしまふ。側から色々批評して居りますが、苦しみが來ますと頭がボーツとほけてしまふ、頭がぼけてしまふと成さざる事は無い。强いやうでも人間といふものは實に弱い。强いやうなものが殊に弱い、柳に雪折れなしで、弱さうなものが案外ねばり强い。吾々は實に事實に於て弱い。

それであるから苦痛といふものを、どういふ方面に向けるかといふ事は、之は吾々の大問題である。その苦痛の原因の事に就きましては明日からずつと御話するのであるが、唯苦しみはどうせ苦しいのであるが其を轉換したらどうであらう。吾々は周圍といふものに對して苦痛を感じて居るのですから、周圍を何とかよいやうにしよう、側を立派にして自分を樂にしようといふのが常識の態度である。併し周圍は始終變化して居る。卽ち人生無常である、自分一人の力を以てお さへとめてしまふ事は決して出來ない。丁度、旋火輪の如く廻つて居る。廻つて居るものを停止して安心しようといふ。それが吾々常識の立場です。さういふ態度はどうしてもいかない。寧ろ自分の心といふものを一つ始末をつけるといふさういふ方面に向ふより道はないのであります。

鳩摩羅迦葉の修道

今朝色々な本をひねくり廻して居りましたら、こんなものを見つけた。精神を修養して行く上に於て、佛教の昔の修養者、鳩摩羅迦葉が一日道を修めて居る時に天の聲を聞いた。謎のやうな聲が耳に聞えた。斯ういふ事はよくある事でせう。どうしたらよいか、どうしたら苦痛を解脫する事が出來るかといふ事を本當に考へて居る時に、何か一つ耳の底にひゞく事がある。斯ういふ天の聲が聞こえた。

是に丘塚がある、丘塚に夜煙あり、晝火燃ゆ。婆羅門、智者に語る、刀劍をとつてそれを掘れ、

大いなる龜を見ん、その龜をすてよ、こゝに骸骨を見ん。それも捨てよ。墓と肉の塊がある。それも捨てよ。それから又掘つてゆくと、枷が出て來る、それも捨てよ、その次に二つの道がある、一つの道は捨てよ、そこを又掘つて行くと樹枝がある、其奴も捨てよ、最後に大龍が居るであらう。その龍を拜むがよい。

斯ういふ事で釋尊の所へ行きました所が、大凡下の意味であつた。

一つのふるい塚といふ事は何であるかといふと父母の產んだ所の吾々の肉體である。夜煙がある、といふ事は何を意味するかといふと人間の心、人間の心は夜の煙と同じ事で見えぬ、丁度人間の心は斯うやつて居りましても御互ひに色んな事を考へて居る。みんな公開してしまふと大變、大變だけれども夜の煙で見えぬから大丈夫。晝火燃ゆといふ事は、吾々の行爲である。吾々の行は晝火が燃えて居るのと同じ事で、誰でもよくわかる。婆羅門智者に語る、婆羅門は印度の聖者、羅漢を指すのである、道を體得した人を智者といふのは修道者のことで、これから道を修めて行く人、私も皆さんも修道者の一人である。刀をもつて塚穴を掘れとは何を意味するかといふと、道を修めるといふ事で、自分の身と心を眞面目に考へて行く。龜といふのは何であるか、惛沈、

掉擧。惛沈といふのは氣の沈むことよく氣の沈む人間がある、だん〳〵〳〵氣が沈んで行くこと、吾々だつて沈む時はあるが……、掉擧といふ事はとびあがる、そそつかしいこと。凡そ人間の性格には二つあつて內氣と外氣、はねくりかへるのと、つゞましやかのと、之を惛沈掉擧といふ。一人の人間でも或る時は掉擧になり、或る時は惛沈になる。いかにもメランコリーな悲觀的な人といかにも喜ばしい快樂主義者な人と多くの場合二種の型に分つことが出來る。悲觀家と樂觀家と人生觀の態度はいつも二つある。さういふ二つを捨てねばいかぬ、沈み込んで居つてもいかぬ。とびあがつて居てもいかぬ。何故それを龜といつたか、龜は頭を出したりひつこめたりするのをいふのか、もつさりして居るのをいふのか、之はどうかわからぬ。毳毳に就ては世尊は之を恨みであるというてをられる。どうして毛蓆が恨みを表はしてゐるかは判然わからない。まさか印度で幽靈が之を着て出るといふわけでもあるまいが、或はその色がさうしたものを表はしてゐるのかも知れない。墓は何であるか、墓は怒、墓は腹を立るものか知れぬ、つゝいたら忿る、墓でなくてもつゝいたら忿るか知らんが墓は忿りつぽい顏をして居ると見える。それから肉のかたまりといつたのは貪慾牛肉の腐つたかたまりなぞは貪慾のよい象徵です。畜生のやうに貪る、花柳病

なんかで腐つたのは貪慾の結果でよい象徴である。夫から枷といふのは何であるかといふと、先前說明した五慾、財產慾、色慾、生命慾といふやうなものは手枷、足枷をはめられたやうなもので仲々とれぬ。とれば人間を辭めてしまはなければならぬ。併し財產、名譽にくつついて居ると手枷足枷になる。之はどうしたらよいか、其奴もたゝき壞せ。人のいらぬ金は貰はんものだ。いらない金を貰ふ馬鹿者は無い。財產慾、名譽慾、之は皆手枷足枷で、取る事は出來ぬ。けれども、斯ういふものが人生の最大目的で無いといふ所に、正見正思惟が出來、人生の卒業が出來る。次の二道を見る、二道は疑ひ、吾々は二つの岐れ道に立つて——之は宗教上の疑でない——こつちに行かうか、あつちに行かうか、此方に行けば永久に彼方へ行けない、どつちへ行かうか、立つて居ればそのうちに日が暮れる。早くどつちかへ行かなければならぬ。お互に二道があつたら一道を捨よ一つの道は捨てなければならぬ。木の枝は何であるかといふと、無明、何故之を無明に喩へたかといふと小さい木なら兎も角もであるが、大木になつてくると木の枝葉が繁つてどれ程の數であるやら複雜で數へることも出來ぬ。それを云ふたのであらう。卽ち無明はさういふ狀態であるといふ。大龍は何であるかといふと、龍は天をかける、變現出沒、捕へる事が出來ない、孔子も老子を批評して言つて居る、魚は網で捕る事が出來る、獸は弓で捕る事が出來るが、龍に至つては捕へる事が出來ない。本當の生命といふものは、雲に乘り雨をおこし風を起し電光をひらめかせて、天をかける、龍の如くであるから、手を合せて拜めと言つたのはそれであります。

修道の意義

之は卽ち吾々の一つの修道生活を表はすもので、これ丈の批判が必要なのである。たゞ吾々は苦しみが起つて、この苦しみをどう處分するかといふ場合に、苦しみの源は皆斯ういふ所にあるのですから、斯ういふ處を段々〳〵吾々が掘つて掘りぬいて行かねばならぬ。段々掘つて行くと終に大龍にぶつつかる、こんな風な、龜や毛蓆や蟇にぶつかつては困りますが、本當によく掘れば又必ず大龍を發見するに相違ない。

之は確か漱石さんの『夢十夜』の中にあつたと思ふが、知恩院の前に來た、さうすると運慶が、鎌倉時代の風をして、鑿で以て木の上から、仁王を彫つて居る。書生や車夫なぞが澤山それを見て居る。運慶丈が鎌倉時代の服裝で鑿で彫つてゐると、ボコツと一鑿入れると額が出來る、又やると目が出來る、たてに彫ると鼻が出來る、流石に運慶だなと夢の中で感心した。すると傍の書生さんがいふには、あれは、刻むのぢやない掘り出すのだ、前から木の中にあるのを掘り出すの

だからあのやうに出て來る。それを聞いて、幸ひにうちには木の伐つたのがあると思うて、早速、歸つて彫つて見る、幾ら彫つても仁王が出て來ない。俺のうちの木には仁王が無いのか知らんと思ふたら夢が醒めた。

之は餘程面白い話で、よく刻むといふ事は、詰り掘り出すといふ事である、大理石の中に美人像が出來て居る後から掘り出せばよい。吾々も掘つて〳〵掘り出して行くと皆んな大きな龍を持つて居る。たゞこんな變なものにとざされて居るので働かない。働かないものであるからして、こんなえらいものがあることがわからぬ。夫を今掘り出して行くと、實に天地を吾がものにして、雲を起し風をはらんで飛んで歩くやうな大きな龍が居る、と言つて居られる。それをいつも眞面目に彫れば運慶でなくても一返に仁王なり天人なりを自由に彫り出す事が出來るのである。

第三講　無我（上）

これまで、宗教の第一の問題は苦しみといふ事を自覺する事である、つまり苦しみを正しく見、正しく考へて、さうして、苦しみといふものは一體どこから來たものであらうか、といふ事を考へることが第一であるといふことを申したのである。それで今はその苦惱といふことは、だん〳〵、詮索をして行くと、外から來るのでなくて、實は内から出て來るのである。吾々は始終自分の周圍を改造し夫によりて苦しみをなくしようと考へるのである。實は苦しみの根は外になくして、内から起つて來て居るといふので今は順序として無我に就て御話をするのである。

金光明經の所說

金光明經の中に（金光明經は日本のある時代即ち平安朝時代から鎌倉時代に亘りて國家聖典として用ひられた御經である）僅かの文句でありますけれども、大變面白い。

（一）說令雖レ患二狀殊一先當レ療二其本一（金光明經第廿四）

之はどういふ事かと申しますると、狀殊といふのは狀は有樣、殊は特殊でありますから、今日の言葉でいふならば、徵候といふ言葉にあたると思ふ。例へばどうも腹が痛くて困るといつてもその腹の痛いことはどういふ原因から來たのであらうか、先づその本を療治をしなければならぬといふのである。之は醫術の上の喩を以て精神上のことを言つたのでありまして、困る〳〵苦しい〳〵といつても其の苦しみの本はどこから來たかといふ事を冷靜に考へて、さうしてその本を退治しなければならぬ。

それならば、その本はどこにあるかと申しますると次の圖によりますと。

惑業苦の三道

圖A（順觀）

圖B（逆觀）

これは有名な、惑業苦の三道と申しまして、A圖の方は惑→業→苦と書いてあり、Bの方では、それが逆になつて居りまして苦→業→惑となつて居るのでAの方は順觀Bの方は逆觀としてある。

それは何を意味するかといふと、一番初めは惑、これは吾々のもつてゐる煩惱即ち悶えの本であつて心の中の間違ひといふものが本で、その間違ひから業といふ働きが起る、漢音で讀めばゲフといふ字であるが、サンスクリットのカルマの翻譯で即ち吾々の行爲である。吾々の心の一つの間違ひからして行爲になつて現れて來り、それから苦しみを感ずる。吾々が今感じて居るのは第三の苦しみといふ事を感じて居るのである。例へば御腹が痛い御腹が痛い、といふ苦痛を感ずる御腹が痛いといふ事は實は結果である。けれどもがその原因は暑いのにビールを飲み過ぎた。飲み過ぎたといふのは第二の業の働き、ビールを飲み過ぎたといふことから腹が痛いといふことが出來た。そのビールを飲み過ぎたといふ事は平生不用心でたゞ目前の慾を滿たす爲めに飲むといふ事に基くのであるから、一番初めは惑がもとである。けれども惑の時にはまだ氣がつかない。惑の時には氣が附かず苦しみとなつて初めてビールを飲んだ第二の業が惡かつたと分

る。もう一つ考へて來ると頭の中に平生不要心の考へがある、それがさうなつたといふ事になる。そこでB圖の說明はつく譯である。理窟からいへば間違ひ（惑）が本で業となり苦が來る譯であるが、吾々にはそれをいつも逆に考へるのでB圖の苦の所で氣がついてそれから矢の方向に逆に行くのである。つまり、苦しみを吾々は第一に感ずる、さうして、苦しみを感じて見ると第二の業が考へられる。それから平生の心得が惡いといふ惑といふものが最後に氣がつくといふ事になる。それは逆觀である。苦しみといふものを感じてだん〳〵逆に行きますといふと本が解つて來る。所が却々逆が六つかしい。いつもBで行けばよいけれども、いつもAで行く。例へば此頃新聞を見ると萬引が流行る。萬引の例を一つ考へて見ると、先づ萬引をしたらと考へる。或る良家の奥さんが萬引をした。さうして直ぐ取り押へられた。警察へ出された。玆に初めて苦痛を感じ、僅かに反物一反萬引したといふ事から、夫の顏に泥を塗り離緣沙汰までも起らうとして居る苦痛を感じた時に、斯ういふひどい苦痛を受けるのは何の爲めであるかといふと、自分がたつた一本の反物を萬引をしたといふことが苦痛の本である。もう一步進んで行くと、取るべからざるものをとるといふ惑、綺麗なものを見てフラ〳〵と常識を失つた。これは手を出す前の頭が惡い。平生の心懸が惡いからだ。斯ういふ風に逆觀して行くとよく解ります。所が逆觀して行けない。通常はそれを順觀する。第一苦痛を感じた場合に自分がとつたのが惡い、とる前に頭が間違てしまつたことが惡い。所が斯うは行けない。これ位のものをとるのをかれこれいふ番頭さんがいかぬ。お巡りさんがいかぬ。少し脫線すると、自分の夫が自分に小遣を呉れんからいかぬ、といふやうに、苦しみから又惑に行き、惑から業に來る。始終輪轉して車の輪の如く順觀して行く。その順觀するのは人間の本能の强い傾向である。吾々人間の本能の强い傾向といふものは常に斯ういふ順觀性をもつて居る。それを逆觀するのは道德若しくは宗教である。卽ち道德宗教といふものはさういふ人間の强い誘惑を退けて行くのである。トルストイの喩えでいへば、流れを橫切らずして流れに順つて下る。斯ういふ風に行く。それは吾々の强い本能的傾向であつて今の苦しみからして又惑を起して來る。人間といふものは一度、間違ひをして監獄へでも這入ると、其苦痛から社會をうらみ友人をうらみ人間をうらみ、益々惑が深くなる。惑が深くなつて居るから出て來ると又行爲が間違つて惡い事をする。又おさへられて苦しみを受けるのである。肉體などやはり同じ事で體が惡いから養生出來ない、出來ないからして病氣が惡くなる、病氣が惡くなるから

益々頭が鈍くなつて我儘をする、なまける。第二の業が出る、その結果、世の中が面白くない、又惑が出る。始終さういふ風に廻つて居る。さうして習慣といふものが出來る。第二の天性といはれる習慣といふものはさういふ所から出て來る。さうしてだん〳〵〳〵廻つて居るうちに、惑業苦の聯絡が強くなつて、加速度で以て一返よりは二返二返よりは三返と、だん〳〵強くなる。初めは小さいけれどもだん〳〵するうちに間違ひが非常に大きくなる、さうして之が進んで行けば行く程、速い速力でウント廻つて來る。此奴は逆觀すればよいが之はどうもうまくいかん。この苦しみの原因といふものは例へば今の萬引の例でいふと、店飾りが奇麗過るから萬引をした、番頭が氣が利かないから御巡りさんを呼び出したとか、夫が小遣を呉れないからといふやうに考へるのは全くの間違ひで自分がとるべからざるものをとらうと考へた、その考へが間違ひである。さうした間違ひが本となつて斯ういふ苦しみを受けねばならぬのである。之は第二Bの圖について云つたのであります。Bの圖は逆觀でありまして、その苦しみの原因は自分の惑ひであるといふ事になつて來る。

卽ち問題はだん〳〵轉化して來た。卽ち凡ての苦しみの本といふものは、皆吾々の一つの惑といふ間違ひが一つ起つて、間違ひが本になつてさうして苦しみが出て來る。之は平生吾々が他人からして虐待をされた、ひどい目にあはされた、嘲笑罵詈讒謗を受ける或は金をとられる、さういふ爲めに苦しみが出て來たやうな場合でも、こちらの心に若し非常によい心を持つて居るならば、其苦しみが苦しみにならずしてたやすう別のものにすることが出來る。之はごく偉い人になりますといぢめられゝばいぢめられる程、偉い人間になる又東西の歷史上の人を考へて見ましても、苟も偉い人間といふものは、皆樣々の苦痛や防害を與へられて居る。さういふものにして初めて偉いものになつて居る。それであるから殊に吾々の惑といふ一つの間違ひといふものがなければ、苦痛といふものは來ない筈である。吾々が苦痛を持つて居るといふ事は、その本は吾々が間違ひを持つて居るからである。

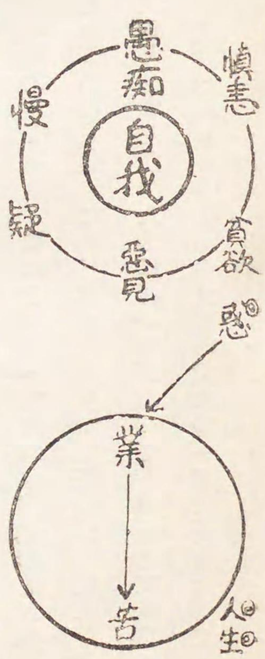
迷より自由へ

近い例は日本の老政治家で、河野廣中氏などが夫である。氏はもう七十幾歲ですが、板垣氏と共に初めて自由民權を稱へた人で、一昨年東京の敎育會で一緒に御話致しまして聞いたのでありますが、なんでも明治十二三年頃、國會開設を叫んで牢屋の中へ投げ込まれ七年間とやら牢屋に居つた。さうして自由といふ事は一體どういふ事であるか、自由が眞にあるならば、牢屋の中にも

なければならぬ。そして牢屋の中の自由は心を自由にする外は無いといふことを考へて、牢屋の中で一生懸命に座禪をして悟を開いた。座禪をした爲めに食慾は增す、よく眠れる、氣持がよい、牢屋に居つても非常に自由を感ずる、嬉しうて適はぬ。牢屋を出て、大いに天狗になつて出て來たがどこかで、博多の何とかいふ禪師の一喝で、急に謙遜になつて、今日でも頭を下げて道を求めて居られる。氏はもう餘程の年寄で政治家としては過去の人に屬してゐるのであらうが、あの人は人格者といはれて居るといふ事は新聞等で承知して居ましたが、さういふやうな深い精神修養をした人であるといふ事は一昨年始めて知つたとである。若し常識で言つたならば牢屋の中に投げ込まれた時に世を罵り政府の頑迷を罵り、煩悶懊惱して居らべきであるか、悠々寬々として座禪して牢屋の中からいふにいへない修養をつゞけたといふことによつて、吾々は心の持方一つで外界の打擊を轉化して來るといふ事がわかると思ふ。

それであるから、苦痛の本が惑であるとするならば、惑の研究に移つて行かなければならぬ、煩惱といふものはどういふものであらうかといふと、これ大きなものである、世尊は、色々に分類して居られる。今は其の中に特に六大煩惱に就て御話しすることが一番適切であると思ふ。

六大煩惱に就いて



圖の惑には二重圈點を附けて置きましたが、惑といふものは澤山あります。煩惱は非常に澤山ありまして、その澤山の中で、惑は八萬四千の煩惱、或は無量の煩惱といはれるのでありますが、中でも一番大きな代表的煩惱を六つ擧げて居られるのでそれを六大煩惱といふ。

第一　貪欲

第一には貪欲、貪るといふこと、この貪といふものは、前に五欲五つの貪りといふものを申しましたから、御存知である筈である。財產欲、色欲、名譽欲、食欲、睡眠欲、斯ういふ五欲を昨夜は出しましたが、貪欲はつまり五欲で、これは吾々は生れながらにして持つて居る。鳩摩羅迦葉の精神修養の場合にも貪欲は出て居る。それは手枷足枷のやうなものであつて、動きのとれないものとせられてある。吾々は貪欲から脫する事は出來ない。

之は決して後天的煩惱でない。學校で教育せられるので無い、生まれた時に既にもつて居る。子供が少し大きくなると、一つの乳房を口でくはへて一つの乳房は人にやるまいといふのか、手で抑へて居る。之は欲の始めの表れである。つまり自分の周圍のものを總て所有しようといふ考へである。それが貪欲といふ名でよばれる。さうして又貪欲といふものはみんな共通な煩惱でありますからして今日世間の吾々の生活を考へて見ますとやはり貪欲が其基礎となつて居る。即ち其基礎の上に今日の自由な競爭的な世界が出て來た。故に自在な社會は、欲望といふ根底の本から成り立ち、それがある約束のもとに許されて居る。その約束を守ることが出來なければ、泥棒とか、掏摸とかになる。あれは一つの貪欲から起つて來る行爲である。人間の世界では泥棒や掏摸は困るからして、法律で以て制裁してゐる。けれども考へて見れば、泥棒とか掏摸は實は罪が輕い。つまり弱者である。人をだまして掏つたり、コソ〳〵行つて盜つたり殊にひどい目に合せて盜るものもあるが、さういふ人間はどこか人格に弱い所があつて、さうして人間の仲間入が出來ない人であ　。一體人間の生活といふものは困つたもので大勢一所に居る爲めに辛い事が多い。今夜もこれ丈大勢の爲に暑い。切符を買ひます時にも何百人とあれば行列を外れて待つて居つては買へない。行列の中に這入つて居ればいつか番が廻つて來る。人間がさうでありまして、幾ら正義丈があつても役に立たぬ。欲しい〳〵といふ人間が多勢あるから一定の法則によりて制限せねばならぬ。即ち其法則を生かしてやつて行く所に社會が成立する。所が弱いものは法則の中に這入る事が出來ない。仕方が無いから非常手段に訴える。その手段が强盜掏摸といふことになる。そこで吾々は必ずしも道德に就いても正邪の一面の外に强弱の一面を見ねばならぬ。栽く見方はものゝ正不正をわけるのであるが、もう一つ彼は弱者であるといふ事を考へると、餘程人生の見方が違つて來る。故に吾々は他人に對しても自分に對しても、正邪の外に强弱判があるといふ事を考へなければならぬ。人倫道德を守つて世間を立派にやつて行ける人は强い人でその人は善人で立派な人であるが弱い人はさうはいけない。始終壓迫を感ずる。先天的若しくは後天的に人格に弱い所がある。その爲めに人間の仲間入が出來ない。つまり法則を守ることができない、その爲めに間違つた貪欲を發揮する。貪欲といふものは人間の根本的な煩惱であるから、之がなければ人生といふものは成り立たないのである。たゞ之をうまい工合に制御するといふ事で人生が成り立つて居る。併し斯ういふものは時に境遇によつてどんな風に爆發するか知れんといふ事

を考へなければならぬ。

第二瞋恚

それからして第二瞋恚、怒りである。瞋りといふものと貪欲といふものは、時として一致しない、私の知つて居る人で非常に欲の深い人がありまして、よく欲を起す、そして其次に喧嘩になる。喧嘩もはげしい人間で、今度は欲得を忘れてしまつて何處々々までも喧嘩をやり出す。初めは僅かな欲望のために喧嘩する。しばらく喧嘩すると喧嘩ばかりになる。もう欲も得もいらぬ。そんな事なら初め欲望を起さなければよい。大抵の人は欲の爲めに腹を立てる、腹を立てると欲は忘れてしまふ。さういふやうな、面白い事になる。中には腹を立てるといふ事によつて、とんでもない間違をし出かす事も幾らもある。毎日新聞を見て居ると季節の關係か知れんが、斬つたり叩いたりして居るものの無い日は殆んどない。あれは大抵慾のためよりは瞋のためにやつて居る。腹が立つて氣が立つて居れば暫くは何でも無いが、二日三日も腹の立つのが續けば、頭が痛くて氣が進まぬ、夜も眠れぬ、病氣を出すやうな事がある。腹を立てると人間の生活が全く壞れて、人間の心に美しく咲いて居る愛の花が全く消えて、又をふるつて血煙を立てゝ居る荒れはてた戰場のやうな心になる。皆さんは地獄や極樂は極めて緣遠いやうに思はれるかも知れんが、地獄といひ、極樂といふ事は遠い所を探すことは要らぬ。吾々が一日平和にして居ればそれが極樂、吾々が喧嘩して怒つて居るそれが地獄、地獄は怒りで一番よく現れる、人間の怒といふものは、一番強い地獄といふものを現はす。よく說教者等が地獄には青鬼と赤鬼が居るといふが、多血質は怒ると赤くなる、貧血性の人は青くなる。さうしますと吾々は一日に隨分青鬼や赤鬼を出す。中には赤鬼と青鬼を兩方使ひわけをして居る人もある。又人が腹を立てると非常に恐ろしく感ずる、卽ち腹を立てることは恐がらせる爲めである。これ位になつたら恐くないかと如何にも、自分といふものを最も強く宣言するのだ。腹を立てる時にはよく「人を馬鹿にして居る」といふ。成る程馬鹿にされて居る時もあるが、馬鹿にして居るだらうと思うて腹を立てることもある。つまり腹を立てるといふ事は誰だつて、腹を立てたいと思つて、腹を立てる者はない。尤も私の友人に腹の立たん人間がある。何百人のうちに一人しか無い、皆さんのうちにはありますか知らんが、どうも腹の立たん人間は面白く無い。大抵は友人が代つて腹を立てゝやらねばならぬ、さうでもしなければおさまらぬ。自分の友人が侮辱されたのを默つて見て居る譯に行かぬといふのである。こんなのは確かに變態心理の對象になると思ふです

が……所が修養して腹が立たんのならばよいですが、始めから腹が立たんさういふ人間は道に至るに非常に工合が悪い。それは變態の狀態でありますが、併し大體に於ては瞋りといふものゝ爲めにどれ程壞されるかも知れん。たゞその瞋りをうまい工合に制御すればよくなる。

第三　愚痴

第三は愚痴でありまする。之は哲學的に言ふと無明、愚かといふ事であるが、寧ろ愚痴といふ言葉に於てよく現れて居ると思ふ。過ぎたことや出來ないことを悔んだり願うたりしてくよ〳〵することである。故に愚痴をこぼすと動詞を添へるとその愚痴の働きがよく象徴せられる。日本人は愚痴をこぼすことが好だと云はれてゐる。吾々は愚痴をこぼすといふ日本語をもつてゐる。卽ちよく吾々には愚痴がたまる、たまつたのをこぼす、こぼすと氣持がよい。なるべくたまつた愚痴を適當にこぼすといふと胸の中がすつくりして來る。兼好法師は物をいはないと腹がふくれるというてをられるが、愚痴をこぼすとをしないとヒステリーや神經衰弱にもなり兼ねない。だから適當に愚痴をこぼすと詰らない煩悶は大抵よくなる。此頃はさういふ事は無いが、お嫁さんになると姑に頭をおさへられる。たまに家へ歸つて二日か三日つゞけさまに御母さんにこぼす、みんなこぼすと、胸の中がすつぱりして、ラムネを飲んだやうな心持になる。一體人間はディスチャーヂすることは氣持のよいものである。たまる時は工合が惡いが出す時は氣持がよい。併しながら此奴を始終やつて貰ふと困るが、適當に都合のよい所で出して置かんと周圍が非常に損害を受けるが、秘密結社を結んでこぼして置けば大變工合がよい。氣晴しといふ事があつてすべての鬱を散ずる。酒飲が酒を飲んで居ると、今度は愚痴をこぼす。それは管を卷くとよばれる、同じ事を繰り返し喋舌る。同じ事を何返もいふ。側から聞いて居ると頗る滑稽であるが、本人は何返も言はなければならぬ程澤山愚痴がたまつて居る、何返言つても果てしがない、あそこが餘程面白いと思ふ。子供も同じ事を何返もいふ、何返も言つては興奮して居るのである。情熱がある場合は何返言つても喜ぶ。親子男女、友達の間も、さういふ意味に於て愚痴をこぼす時は左まで熱情があるわけでないが、たまつて居るから漏る。こぼして喜ぶ、之は適當にやればよい、けれども、自分がこぼすのはよいが、人にこぼされると大變迷惑する。私の所へ、餘所へ女中奉公に行つて居る者が來て二時間位愚痴をこぼす、泣いてこぼすから仕樣がない、默つて聞いて居りましたが、すつかりこぼしてしまつてから何ぞ御話がありましたらと、いふから二口三口御話すると大變喜んで歸つた。詰り斯ういふ事を語つて居る人間は話を聞く時

に自分が言ふ事を皆言つてしまふとよく耳に這入る。斯ういふ狀態で多勢の御方へ御話しますと話が存外這入り難い。何故かといふとあるべきものが出ないで居る。皆さんの胸の中が様々の思想で一ぱいになつて居る。そこへ話を聞くと、愚痴なり不平なり何か話に對する反抗が起つて來る、起つた反抗をみんな言ひ出させてからだと本當に話が這入る。ですから多勢が集まつて話を聞くといふことは存外效果の無いものです。效果は無いのもですが一人々々になりますと時間がかゝるから會合といふ速成法を以てやる。出すべきものを持つて居ると丁度羊羹に水を懸けるやうに這入り難い、出すべきものを出すとカステラが水を吸ふやうによく這入る。

以上三つを釋尊は三毒、三つの毒藥であると云はれた、この毒を胸の中に三つ持つて居るから、牛が水を飲めば藥になるが蛇が飲めば毒になる如く外から這入つて來るものが皆毒になる。金が這入ると金に中毒する、愛情が這入る愛情に中毒する、何物でも這入つて來ると毒になる三毒である。他を毒するのみならず、自ら毒する自ら中毒する。

第四　慢

それから第四は慢、自慢するといふのは、お互ひに矢張りまがなすきがな自慢する。人の自慢は非常に嫌ですが、殊に酒を一杯飲みますと大變自慢が面白い、生理學者の話を聞きますと、御酒を飲むと、大腦の高等神經中樞が、痲痺をして來るから、脊髓神經が働き出す、これは下等なもので、大腦の高等神經中樞が痲痺して來る。さうすると何が出て來るかといふとこの慢が出て來る。吾々が平生遠慮して居る自慢が出る。餘り自慢して居ると人間は相手になつてくれぬ。酒を飲むと頻りに自慢するのは、平生の節制を失うて來る時に中にかくれて居る働きが出て來る。人の自慢といふものは實に聞き難いものである。けれども亦自分の自慢といふものは實に面白い。殊に年寄りは若い時分の自慢をする、吾々もよく承りますが、年寄りの若い時のことは誰も知らないから大變都合がよい。自慢をする時には氣持がよい氣持がよいと鼻が高くなる。之は生理學者が調べて見ると實際自慢して居る時には鼻の穴が大きくなつて居る相である。實に面白い。昔の人は自慢することを高慢の鼻高々といふから、天狗のやうに、鼻の孔が大きくなるので自然と上の方へ高まるわけである。如何にも氣持のよいものであるが、どうも人の自慢を聞いて居ると面白く無い。自慢をして居る人間は無邪氣ではあるが、尊敬の頭は下がらない。輕蔑の念が起る。私なぞ自慢しまいと思つて居るがいつの間にやら乘つて居る。之はいかんと思ふけれども、もう遲い。やはり凡人である。又吾々も人惡うさうい

ふ事をやる事がありますが人間を試すのにソロ〳〵讃め上げて御覽、大抵の人がのせられる。餘程皮肉な人間でも、その人の思ふ壺に入るとそろ〳〵自慢し出す、一時におすと怒るからしてソロ〳〵つゞくとよい氣持になつて自慢するものである。

第五　疑

第五は疑である。疑といふ事は實に面白い妙な煩惱で物がわかる場合は疑で無い。わからぬ場合に疑ひだす。疑といふものはすべてのものを破壞するもので疑が起つて來るといふと、人間は非常に悲慘です。疑ひ深い人は猜疑嫉妬も强く、ことゞくにすねて皮肉となる。象徵的に云へば青白い顏をして居る化物見たやうな格好になる。所がその疑といふものは合理的疑でなくして、卽ち學者のいふ疑問を提する、疑をはさむといふのは知識の前驅者であるが、こゝにいふ疑はさういふ疑で無い。何となく感情的に疑はしうなる。その疑がフラ〳〵と起る。こゝで一寸御話申したいのは、ちやうど此疑ひの正反對である信ずるといふ事がある。多くの人は、信ずるといふ事と、理解といふものゝ關係を考へる。それは間違である。佛を信ずるといふ事は、どういふ譯で信ずるか、わけの分らないものは信ずる事が出來ないといふ。殊に科學的の洗禮を受けて居るものは、昔の無知盲昧な時代には宗教でよかつたであらうが、教育が盛んになり科學が盛んになつてくれば、道理を認める事が出來なければ信ずることが出來ない、世間のとなら聞けば分る。分らないものを何故信ずるといふ。併しそれは一體見當違ひの質問であつて、分らないから信ずるのだ。どんな利口なものでも、人間の分る領野といふものはごく少ないものである。例へば極めて適當な例を出せば、夫婦の間にしても、妻と夫の生活が本當に朝から晩までわかるであらうか。どこへもかしこへも絕對的に一緒に歩けるもので無い。別れて居る間は兩方とも分らない。その分らないのは何で繋ぐか、たゞそれを信ずる、信ずるといふ事で繋げる。同じものから二つの結論が出て居る、分らないから信ずる、分らないから疑ふ。信ずる方が都合よいから信ずる。斯ういふ事は考へると幾らもある、水を飲むと云ふ事も私が信じて居るから平氣で飲むが、疑へばこの中に何があるかわからない。どんな黴菌が居るかもわからぬ。一々疑ふと皆さんがどんな毒氣を吐いて居られるか解らない。バチルスが盛んに飛び出して居るかも知れぬ。たゞさういふものは無いと信じて居る。さやうに私が疑へば、とても危ふて居れぬ、信じて居るからよい。人間はそこへ來ると人間の理解とか智識といふものは、實に僅かな程度に限られて居るものであつて、宗教の門に入る前に實際生活のそのものが信ずる

といふ事でどうやら斯うやら持つて居る。殊に商業で云へば、商業家が取引する得意先の事を一々調べなければかゝられんとなると商業に至らぬうちに日が暮れてしまふ。世界中の人間を一々調べて行く事は出來ない。損をする事もあるけれども、信じて取引して賣つたり買うたりして居る。それだから吾々の理解や智の世界で及ばない所はたゞ信ずるのである。理解からいへば誤魔化すのです、さうして行くと其の方が都合がよい。極めてプラクチカルな所である。どんな理智的人物でも、徹底的に理智を主張する人でもこまかな所まで理智でとりさばいてやつて居るといふ事は無い。觀念連合の法則で無意識でやつて居る方が多いのである。一々三段論法でやつて居るのでは無い、出さうと思ふのでない、出て來るのである。それですから道理や理窟によらずして色々の精神活動を起し居る。さういふ狀態であるから、吾々の精神活動の中の疑といふものを特に釋尊が六大煩惱の中に加へられたといふ事は非常に意味が深いもので、皆さんが若しあゆる方面に於て猜疑といふものを持つて來るならば、全く世の中といふものは青白い火が燃えて居るやうな事になる。面白い晴れた世界に出て來ない。さうかと云つ　矢鱈に輕々しく信じて酷い目に會うても困るが、君子は欺くべし陷るべからず欺かれる位に人を信じた方がよい。御互に

人を見て泥棒と思ふならばやり切れたものでない。誰が見てもその人の生活は貧弱で慘めなものであつても吾々は、欺されたり取られる生活は豊かである。ずつと前から澤山の人がこの道を歩いたのだ。斯ういふ世界がわかると、宗教の世界がわかる。人生といふものは單に利害關係ばかりで動いて居るもので無い。人を信用することの強い人は非常に幸福な豊富な生活して居るのであるが、疑を起す時は總てを破壞して行く。信ずるといふ事はすべての世界をつくり、疑ふといふ事はすべての世界を破壞する。卽ち中毒の最も大きなものである。この疑の念が起つてくると宇宙のものが皆仇になり鬼になる。人間に向つて疑を起すと人間が皆仇のやうな、恐ろしいものになる、さうして終には痩せ衰へて見るかげも無いやうになる。

第六　惡見

第六は惡見惡い見方。以上の五つを精神内容として、さういふもの、要求に應じて、惑を銘々が一つ〳〵持つて來るとそこに一つの見解を持つて來る。それが惡見で、この見解は一樣でありませんが、例へば欲の非常に深い人間は、欲といふものを根柢とした惡見に住する。瞋りに深いものは腹の立つといふ事を基調にして人生觀を立てる。つまらない所に腹を立てる人は貪などは大した事は無いが、瞋りといふものになつて來ると大變な

事になる。さうした人は夫相應の惡見を起す。又、愚痴のものは其の人の人格が愚痴で出來て居る。自慢もさうです、矢鱈に自慢する人間は、自慢するといふ事が大問題であつて。自慢といふものを中心として、惡見を起して來る。又もつと複雜な組み合せになつてゐる人となると、例へば貪欲が七、自慢が三、或は愚痴が四に瞋が六といつた種々複雜な見解が起つて來る。斯ういふものを六大煩惱、それが卽ち、惑業苦の惑の內容である。もだえの內容である。それから自我の話は次として、之が（第三圖）全體惑であり、斯ういふ一つの惑といふ間違ひから、業が起つて來る、働きが起つて來る、その働きといふものからして苦しみが起つて來る。それが卽ち人生である。

吾々は普通人生々々といつて居る、その本は惑である。人生卽ちこの社會といふものは、時代〳〵によつて違ひませう。勿論時代によつて違はん人間もある。恐らく釋尊やキリストの時代と同じやうな人間もある、神武天皇卽位一年といふやうな時代と同じやうな人間がどこかの山の中に這入るとその儘殘つてゐてそれ相應の所謂社會を形造つて居る。併し次の時代を形造る人間、所謂知識階級の人間は時代によつて餘程違ふ。違ふのは何であるかといふと、斯ういふ煩惱が色々に變化して來る。その變化して居る頭の工合によつて、業が違つて來る。例へば此明治大正になりましてからは、外國の思想が非常に入つて來て、商工業が發達し來り、物を造るのに當つて幾らでも造れる。昔は一つ〳〵手で造つて居つたが、今は機械を以てゴチヤ〳〵と作る。幾らでも出來て來る。少くとも機械といふものが非常に發達したために　第一便利である。便利であるその代り、物といふものに對する見方がすつかり變つてしまふ。私共さへ子供の時分には、よく勿體ないといふ事をいはれた。米の飯一つこぼしても、其米は八十返も手數がかゝつて居るから大事にせねばならぬ、飯をこぼすと目がつぶれる勿體ないといふ事をよくいはれた。勿體ないといふ事は事物に對する價値判斷である。一つの米の飯にでも絶對價値を置いて居る。けれどもが今日は昔と違つて周圍が非常に開發されて來たためにさういふ考へが自らすたつて來た。周圍の者が死んだものになつて符牒がついて居る。人間にまで符牒がついて之は五拾圓の月給取り之は百圓の月給取り……と繪の展覽會見たやうにあらゆる人間に正札がつけてある。正札つきは便利ではあるか知らんが面白くない。人間の生活は、澤山月給を取るから豐富だ、金を持たんから貧弱だといふなら、今日孔子さんの弟子顏回を連れて來たら、「一簞の食一瓢の飮、陋巷にあり人其

の憂に堪へず回や其の樂みを改めず賢なる哉回也、」と孔子が頭を下げて、偉い〳〵といつて譽める位な顏回だから餘程偉かつたのだらうが、符牒主義からいへば實につまらぬものである。かやうに考へが變化して來ると業が違ふ。働きが違つて來ると、苦しみが又違つて來る。此頃は昔とは別の苦しみが澤山起つて來て居る。世が文明になると、非常に樂しいやうですが一方では又苦しいものである。電話といふものがあれば、隨分便利なやうであるけれども、夜十二時一時になつてかゝつて來ると便利な爲に苦しみがある。之を吾々は人生と名づけて居る。

ですから人生の苦しみといふものを段々考へて來ると業があつて、業のもとに惑がある。斯ういふ事になつて來るのである。その惑が殆んど本能的にあれ丈ある。もつと澤山あるですが代表的のものを六つ擧げ斯ういふ風にこみ入つて居る。誰れでも生まれて居るものは皆此惑を持つて居る。言葉で現すからして一般的に貪欲、瞋恚、愚痴、と分けて居るけれども、之は一人々々みんな違ふ。さうして又一人でも今日の人と明日の人とは違ふ、若い時と三十四十の時とも違へば、三十四十の時と六十の時代とは甚だしく煩惱の作用と違つて來る。況んや生れつきの氣質、境遇の變化によつて皆違つて居る。それであるから之を統一する我なるものは變幻出沒はかるべからざる程こみ入つたものである。さういふものが寄り集まつて社會、人生といふものを作つて居るのである。惑から業を起し業から苦を起す、あちらでもグル〳〵、こちらでもグル〳〵、或は順觀し或は逆觀し、實に此世の中といふものは、どれ程千變不可思議なものであるか知れない。人間の思想は、鳩羅迦葉の話にありましたやう實に夜の煙である。そして晝の火は、行爲即ち業であるからこの苦しみのもとになつて居る。惑は夜の煙と同じやうに見えない、見えない化物が現實に現れて業となり苦しみとなつて來る。夜の見えぬ惑の煙が業の晝の火と燃えて來る。こゝまで考へてくると、如何に人生は複雜千萬なもので、さうして吾々は何物を產むか知れないといふやうな、恐るべき運命を荷うて居るといふ事を眞面目に考へて貰はなければならぬと思ふのである。

第四講　無我（下）

惑業苦の三道の中で根本に遡ると、惑ひといふものが本である。その惑を大凡に別けまして六つ御話しましたが、その眞中に圓い自我といふものを書いて置いた。今迄御話致しましたのは單に入口で、諸種の精神活動を一つ〳〵御話したのでありますが、それを統一して居るのが自我である。

自我の定義

自我に就ては昔から非常によい定義を下して居る。卽ち常一主宰といふ。常といふのはとこしなへに、一は只一つ、主宰といふのは主宰の權能である。丁度一國に專政君主がある如く吾々には樣々の精神活動がありますけれども、その精神活動を統一して居る自我の感じがあります。我といふ感じは、別に曩といふのでも無い、自慢するといふのでも無い、貪るといふのでも無い。心の何れに於ても支配する一つの活動者である。さうして我といふ感じは俗語にいふ「俺が〳〵」この感じである。俺といふ事から俺が物といふ事が起つて來る。それで特に之に圈點を打つたのであるが、（三の惑業苦）さうしてこゝに人生といふ言葉を出したのである。詰り世の中の總てのものは、我と我が物（我所）といふことになる。

我と我所

（四）凡夫は一切の法を執して、是を我所といふ。「隨相論」

凡夫は一切の法に執着して之を我が物といふ、それであるから人間の內容は、

我　と　我所　（我と我物）

の二つである。通常我の感じといふものは、說明するには非常に難しいのであつて普通吾々はぼんやり我と感じてゐる。我といふ感じよりは、我が物といふ感じの方が分り易い。之は私のものだ（我所）この時計を持つて居るものは誰だ俺だ、かくて人生極めて簡單となり、「我」と「我が物」の二つになつて來る。

で「凡夫一切の法を執して是を我所といふ」。『隨相論』といふ書物は印度の或る佛教學者が書

いた本である。

この「一法」といふ字の意味は様々に分れてゐる。法則（law）規範（norm）といつて物の標準となる意味と、教義（doctrine）（teaching）といふやうな意味と、もう一つは物、即ち萬物、物物、精神上の事も物質上の事もみんな總稱して物といふ。さういふ三つの意味がある。それで皆さんが佛教の書物を御覽になるとよくこの文字にぶつつかるから、この三通りあると知つて置いていたゞきたい。即ち眞理法則に用ひてあるか、教へとか、教義といふ方面に用ひてあるか、或は萬物に用ひてあるか、この三通りである。

我の本體

今の場今は一切の物柄である。家でも藏でも、何でも之は私の物だ、私の子供だ、私の夫だ、私の家内だ、私の着物だ、即ち俺といふことゝ俺の物といふ、斯ういふ二つの物になるのである。

それならば「俺が」といふものは一體どういふものであらうか、俺が〳〵といふ事は分るやうですが仲々解らない。俺がといふものはどういふものであらうか、それを一つ考へて見る。即々分らない。何故かと申しますと俺といふこと、私といふことを考へる。私は今日學校へ行つて學校の用事を濟ましてうちへ歸つて夕飯を食べて急いでこゝへ來た。それが俺だ、斯ういひます時にはそれは俺である、けれどもさういふことをした俺を今考へて居る私がある。今私の言つたやうな俺がありませう、けれどもその俺の後ろの方で俺を考へて居る。考へて居る俺がといふものは、それは又何物であるか、斯ういひますと其の考へて居る俺が又考へられて居る。つまりどこまでも考へる自分と考へられる自分がある。即ち私共が反省の世界へ來て、それを反省して私は斯ういふものだと考へる時には早既に考へるものが考へられるものになる。新たに考へるものが前に出て來るけれども、出て來たもの、後の方に又それを考へて居るものがある。考へて居るものは何だ斯ういふと俺だ俺だと考へられる、その又奥の方に又考へるものが居る。何時迄たつても考へるもの其者を出す譯にはいかない。刀刀を斬らず、自分の刀で自分の刀を斬る譯には行かぬ、自分は斯ういふものである、俺を考へて居るからその俺を考へて居るものを出して來い、どこ迄行つても考へるものがある。殺してしまへばどうか。停滯してしまふから活動の仕樣が無い。つかまへてしまつては面白くない。おさへてしまへば見えるが活動が出て來ない。人間の頭もさうなのでありまして、動いて居れば働きがあるが、どんなものだと握まふとすると握まれな

い。一體生きて居るものはつかまれない。自分の頭のみならず他人の頭でもさうである。親は子を俺のものといふ、子供はわきを向いて舌を出して居る、却つて手放す時について來る。おさへると逃げる。放す時について來る。すべて生きて居るものは仲々おさへ難い。煽風器は廻つて居りますが、廻つて活動して居ると何枚のプロペラがあるか一寸わからない。それが知りたいとおさへれば活動をやめてしまふ。活動して居る間はおさへる事が出來ない。俺か〳〵といふ我は決して停滯して居るもので無い。我々の我は念々刻々廻轉して居る。廻轉するからして人間の心といふものは國學者がいふには人間の心はコロ〳〵といつたのであつたが、それが促音で詰つて心になつた、と、實にコロ〳〵で始終ひつくりかへつて廻轉して居る。廻轉して居るから生きて居る。飛行機だつてプロペラが廻るから飛ぶ、じつとして居つては飛べない。人間の心も廻轉して居る。廻轉して居ると物の面目がある。煽風機を止て仕舞へば各々のプロペラの間に間隔があるが、廻轉して居ると見えない。立派に聯絡して居る〔之が動かないといふとプロペラがあつて空間がある、それが廻轉せられると一つのものになる。之が「我」である。

この「我」といふものは、斯ういふ風に貪欲、瞋恚、愚痴、自慢、疑ひ、惡見等の樣々のプロペラがあつてそのプロペラが廻轉すると自ら自我の働きが起つて來る。どう見たつて俺がといふ感じである。活動して居るから離れない。人間の自我もさうである。貪、瞋、痴、慢、疑、惡見等を矢鱈に廻して、自我の尊嚴を傷けたの人格の尊嚴をどうしたのといつて慰籍料や毀損料を請求し出す。やたらに人格にふれるとひどい目に會ふ。それが遲緩して居ると何ともない。どこか旅行でもして疲れてグッタリして居ると少し位惡口を言つても默つて聞いて居る。神經が興奮しますと貪か瞋か慢か何かゞ屹度やつて來る。それはどういふ感じから來るか、俺が自我といふ一つの感じから來る。貪とか瞋とか愚痴とかは特殊の一つでなくして聯續體、一つの活動作用をする力になつて出て來る。それが俺で、それを吾々は人格と呼んで居る。さういふものは吾々はおさへる事が出來ない。

そこで、無我といふ事はどういふ事かといふのが問題である。無我といふ事はどうか、この活動を停止しましたのが無我だ、無我の人間は頰面をなぐられても默つて居る。木佛金佛見たやうなものが無我であると大低の人が思ふ。之はプロペラに電氣のかゝるのをやめて停止したのと同じことで、停止されたら何にもならぬ。無我といふ事は決して無意識、無能力といふ事では無い。

無我といふことは、斯のやうに廻轉して居る、卽ち斯ういふ一つの連續體に一定のよい方面を與へて之を一つ淨化して行くことを意味するものである。之をこのまゝにして置いて、今迄間違つた方向に廻轉して居つたが、それをよい方向に廻轉するのが無我である。故に我が無いかといふと我はある。かまはんでもよいかといふと、かまはないではいかぬ。

（五）「我、無我を了らず、たゞ語言に著す。彼は二還に溺れ自ら壞り世間を壞る。」楞迦經第廿五」

楞迦經の所說

是は楞迦經の文であるが達磨大師が此御經よりよいものは無いといはれた。この經の梵本は今回南條博士に依て大谷大學から出版せられた。

「我」「無我」を了せずたゞ語言に著する、といふ事はどういふ事かといふと、吾々人間の生活は一面言葉の生活である。卽ち簡單に言へば人間の生活といふ事は言葉です。言葉で會話をやつて居る。會話したり目で喋舌つたりして居る。卽ち目で喋舌るは口と同じである。言葉といふものゝ躍動が吾々の生活である。譽めると喜ぶ、くさすと腹が立つ。すべて言葉が躍動する。要するに吾々の生活といふものは言葉です。言葉をいかにつけるかといふ事が人間の生活で、その人の人格によつて言葉の内容が違つて來て居る。實にみんな別な言葉を使つて居るものを別な言葉で無いと思うて居る。わかつたつもりでもわからない。嬉しいといつた所でこつちの嬉しいのと中味は違ふ。甘いといつても同じである。それをもうまいく〳〵と、互に同じ甘さだと思うてゐる。品物で無いから合はなくとも合うたと思うてをればよい、合ふやうにした方が都合がよいからである。比較的餘計合ひさうなものとさうでないものと、程度の相違はある。比較的似よつたものが氣が合ふと言つて居る丈で、銘々別な言葉を使つて居る。之が別であるから業が別。業は身業、口業、意業の三つに分れるのですが、卽ち口の働き身の働きが違つて來る、非常に違つた言葉をつかつて居る。人生の悲劇である。自分の氣持通りでなくては人の言葉がわからないならば悲劇も起らないが、悲劇の起るのは間違うて人の言葉を感心する、からである。人間は別の言葉を以て外交談判して居る。うまい工合に行けば和合、うまい工合に行かないと破綻。無、無我の味がわからず、たゞ言葉にひつかゝつて居る。さうしてかの兩極端（二邊）に溺れる我と無を本當に理解しない。一體吾々はいつも兩極端に行く强い傾向がある。可愛いといふと極端に可愛がる。憎いといふと極端に憎くがる。この中間を行けばよいの

だ。可愛いことと憎い事の眞中を行くのである。何れにしても一方に片よると脱線する。即ち自ら壞り世間を壞る。自分で中毒を起し、周圍を壞る。何故斯うするかといふと、つまり斯ういふ一つの煩惱を根柢として自我が出來て居る。自我の眞相がつかめないで、事にひつかゝつて自ら壞し人を壞す。それであるから要するに釋尊の努力はどこにあるかといふと、我、無我の問題に歸するといつてもよい。この外に八萬四千の法門といつて澤山あるが、今回の御話は特にこの方に力を入れて御話しようと思うて出したのである。犢子といふ人が、或時釋尊に問うた。

犢子の質問

（六）犢子、佛に自我の有無を問ふ。佛答へず有といはゞ慢となり、無といはゞ斷見となる故なり。

犢子が釋尊に、自我はあるか無いかといふ事を問うた。佛は默つて居られた。何故默つて居られたかといふと、自我があると決定するといふから自我の尊嚴といふ慢となる自我が無いといふと斷見で全く否定的になる。自我の否定は人生の否定となる。善だ惡だといふ人間の行爲に對する價値批判が全くなくなる。斷滅してしまふ。斷見程惡いものは無い。若し自我があるといふ事になると、吾々に自我の感じがあるから直ちに慢といふことになる。人格の尊嚴といふ事になる。妥協しないで誰にでも山犬のやうに噛みつく。自我が無いといふ事になると空々寂々、無意識と同じ事で斷見になつてしまふ。それであるから釋尊は犢子といふ人の問方か、或は其人格が不眞面目であつたから、有るといつても無いといつてもわからぬから默つて居られる。之は阿含經の言葉である。之は實に味が深い。かやうに自我が活動して居る。自我があるか無いか、あるといへば直ぐに自慢になつて來て、其でよいといつて肯定してしまふ。無いと云へば否定的になつてしまふ。斯ういふのであるから、釋尊は默つて居られた。殆んどいふ事が出來なかつたのである。

その次が面白い、之は天親菩薩が『俱舍論』の破我品の中に無我の理りを充分に說明せられたのである。

（七）見の爲めに傷けられると、及び諸の善業を壞るを觀はして、佛、正法を說きたまふ。

牝虎の子を銜むが如く、眞我を執して有となせば、見牙の爲めに傷けられ、俗我を撥して無となせば、便ち善業の子を壞る。

見の爲め卽ち見かたの爲めに傷けられる。之が一つの問題です。吾々の一つの見方肯定とか否

定とか何か一つの見解をつけると、直ぐに見解其ものの爲めに傷けられる。もう一つは「及び諸々の善業を壞る。」善い業、要するに吾々が宗教を求めるとか、道德を求めるとかいふ事は、本當の善といふものを求める善の行爲を壞すといふこの二つの問題をかゝげられた。見の爲めに傷けられるといふ事は、我がある俺がといふ我があると自我に執する、自我の獨尊を誇る。此頃の個性教育、社會の爲めに犧牲になるのは舊道德である、各自は自我の尊嚴をもつて居る。宜しく個性を完成しなければならぬ。之が現代文化の特色でせう。併しながら現代人が個性を完成する爲めと思つてさうして自らをそこなふて居ることが幾らあるか知れぬ。人の爲に犧牲になれないものに犧牲になれといつて自我を殺して居るものも幾らもある。それに反對して現代の考へ方は個性を完成する、教育は外から壓迫するのでない、中にあるものを開發するのである。個性を完成することが社會の爲めになり國家の爲めになるといふ。一個人を完成する、それは何であるかといふと自我の肯定である。併し夫丈では多くの場合、其見解の爲めに傷けられて仕舞ふに相違ない。それでは自我は無いか、無いので無い。自我は無いのだといふ事になると、さういふ善いことをやるといふのが意味をなさなくなつてしまふ。他の爲めに自らの爲めに善をなすといふことが意味をなさなくなる。善をなすといふ事は、やはり自我といふものゝ上に、何かそこに我といふものを假定して、さうしてそれをよい工合に廻轉してゆかねばならぬ。いつも此二つに間違ふ。徒らに個性の尊嚴を主張するのも間違であれば、又個性をなくしてしまふと善の行といふものを壞る。斯ういふ二つの間違がある。さういふ事であるから「佛正法を說き給ふ」どちらでもない中道を說かれた「牝虎の子を銜むが如し」猫も同じ事でありますが、母虎が子をこの谷から向ふの谷にくはへて渡る時に、グットかみつくと子を殺す、餘りやはらかくかむと落してしまふ。子を運ぶ場合にかみ殺しもせず落しもせぬ、グット思ひ切つてくはへる。私は虎の子をくはへるのは見ないが、猫のはよく見ます。餘り强くやると、見の爲にかみつかれる、弱いと善業を壞る。向ふへ渡るまでに落つてしまふ。それであるから佛正法を說きたまふ。眞我を執して、俺に本當の我があると執して有ると、則ち見牙の爲めに傷つく。俺は我がある。どこ迄も吾を押し立れば決して人に許さぬ。爭ひ事にも妥協は出來ぬ。どんな事があつても我をおし立てゝ相許さぬ。眞我を餘り執し過ぎるから爭ふのである。肯定すると肯定的見解の爲めに自我を傷つけられてしまふ。現代の人は個性の尊嚴、人格完成を餘りやり出すので、自分自らを壞

してしまふ。何をやつてもよいから何もやらぬ。さういふ反對の俗我を撥して無となせば、便ち善業の子を壞る。撫しは平生は撥無といふのであるが偈文であるから略した。撥無は無くすることである。俗我といふ事は、つまり本當の我に對し假りの我です。吾々が俺が〳〵といふものは常一主宰で永久の昔からたゞ一人我といふ王國に一人の君主が出來て居る。自我は何人にも頭を下げない、頭は下つても御尻が上つて居る、唐臼のやうである。諸君は他人に對して本當にあやまつた經驗がありますか、悪い事をすればする程これ位にしても勘辨しないならば相手になつてやらう、さういふ事は承知してあやまつて居る。そんな事で勘辨出來ぬ、それならやらうと諍ふ。人間といふものは徹底的に頭は下がらない俺が〳〵と我を執じて居ると自ら中毒を起す、さうかといつて俗我を撥無する吾々には哲學的眞我があるとしなくとも我といふつまり責任を負ふて生活してゆく所のもの即ち善をなし、道に進む丈の我といふものがある。それがなければ人間として生きて居つても意味をなさない。我といふ廻轉して居れば一本になつて居るが（煽風器を指し）電氣をやめてしまへば六本か七本のプロペラになつてしまふ。廻轉して居れば我を一つの力として認めなければならぬ、力が緩んで來れば別々になり、俗我もなくて無であるが、廻轉して居れば無だとはいへぬ、之を無とするは即ち善業の子を壞る。これらは實によい文字である。一字一句粗末にして無い。子を衛むといふから見牙の牙といふ喩が入れてある。無となせば善業の子を殺すといふ。之は玄奘三藏の譯ですが、天下の名譯である。

無我とは何か

かういふ工合でこゝに無我の呼吸がある。「牝虎の子を衛むが如し、」この一句でよい。吾々は我の強い人間でなければ駄目です。グニヤ〳〵した薬弱の化物か幽靈見たやうなものは道へ這入る値打は無い。さういふ我といふものをどういふ風に始末をするかといふと、牝虎の子を衛むが如し、この一句に妙味がある。無我といふこと、何であるかといふと牝虎の子を衛むが如し、我をなくするのでは無い。信仰へ這入るといふことは、我を醜すといふ事、つまり、俺が〳〵と固執してゐる「我」に衝つて、謙虚な寛裕な心に返るのである。即ち「我」の淨化、我の洗練である。昨日も御話致しましたが、羅漢が虎を制御して居る、羅漢は虎を猫のやうになづけて居る。虎を殺してしまつてはいけない。虎を猫のやうになづけて場合によつては虎に乘つて行く。千里を走る名馬は、馴らさぬ先は荒馬である。荒馬を自らこなして名馬になる。駄馬は名馬にならない。荒い馬をよくならして鞍上人なく鞍下馬なし、乘る人も乘ら

れる馬も一體になつて走る。その荒馬がうまく制御せられて居る。吾々は幾ら我が強いたつて悲しむに足らない。それをうまく制御すると大きな働きが出て來る。

それでは結局無我の狀態はどういふものかといふと、澤山の御經を讀んで見ると殆んど一樣に「分別を離れよ」或は「計度を離れよ」というてある。大體に於て一致して居りますのは分別計度を離れる、日本語でいへばはからひを離れることである。斯うでもあらうあゝでもあらうといふ色々のはからひをやる。そのはからひを離れる、無我といふ事ははからひを離れるといふことになる。

たゞこゝに注意を要するのは、一概に無我々々と申しまするけれども、我といふものは非常に深刻性を以て居つて、却々うまい工合にいかない。皆さん實際一寸やつて御覽になるとわかりますが、その試驗法は自分が何か過ちをした、惡かつたと氣が附いた場合に、本當に口に出さんでもよいが、心から自分が惡いですと懺悔し、あやまるやうな氣持になるかならんか調べて見ると一番よくわかる。實際難しい。殊に人から何かいはれる場合は尙更で、自分が間違つた場合に、人から攻められた場合は尙更我が色々の形をとつて來る。我といふものを段々研究して行きますと、表は斯やうに活動して居りますが、表でなしにもう一つ內面的の非常に深い吾々の意識のゞかない所に我が橫はつて居るといふ事を經驗せざるを得ない。少しく宗教の事に心を注がれるならば、卽ち自分の精神生活の事を少しく注意せられるならば、殆んど自分の力ではどうしても始末することは出來ないことが知られて來る、夫であるからはからひを離れるといふ事は、簡單に言へば何でも無いやうでありますけれども却々難しい。之はどういふ工合になつたものが無我であらうかといふ事に就いて、蓮如上人の『御一代聞書』の中に、

蓮如上人の說明

「總別人ニハヲトルマジキト思フ心アリ、此心ニテ世間ニハ物モシナラフナルコソ佛ノ御慈悲ナリト仰セラレ候上ハ、人ニマケテ信ヲトルヘキナリ理ヲミテ情ヲオリ。佛法ニハ無我ト候。」

誰でも世間には人に劣るまじきといふ心がある。人に負けてはならぬといふ心がある。それが我である。この心にて世間には物をしならふ。この心で世間の何事でもしならふのである。詰り人に負けたうないといふ一つの我があつて、その我によつてものをやつて行く。之は小學校でも競爭させる。人に負けたくないといふ心で行く。所か「佛教は無我と候上は人に負けて信をとる

べきなり」之は自分の先輩、善知識に師匠、人格者、さういふ人に負けて信仰を得るのがよい、といふのである。そしてその次が面白い、「理を見て情を折るこそ佛の御慈悲なり」と仰せられて、我慢我情を折るこそ佛の御慈悲である。こゝに蓮如上人の一つの信仰上に於ける無我の味がほんのり出て居る。誰でも世間では人に劣りたうない、この心でものをしならうて行く。之が世間の行き方であるが、佛教ではどうであるかといふと、無我であるから人に負けて信をとる。つまり佛を信ずるといふ事は何故信じられないかといふと俺が〳〵といふ我があつて、どうも私はさういふ風に思はれない、その氣になれない、そこに理窟は無い、一つの我情が起つてゐる。俺が〳〵といふ我がひつくりかへらない。それであるから、信ずるといふことは、やはり分別（はからひ）をすて即ち一つや二つのはからひをいふので無く、全體のはからひをすてる、世の中は斯ういふ、行く先は斯ういふ……さういふはからひをやめて、人にまけて信をとるべきである。釋尊であるとか又は其他の偉い人であるとか、さういふ人に自分といふものをなげ出して信仰を得るのである。併し何も矢鱈むしように盲目的にやるのでない。理を見て情を折る、斯ういふ道理は皆さん御存知の吾々の常識と違ふ、常識と全く反對に行く、常識では惑業苦は斯ういふ風に順觀して行く、それを吾々は斯ういふ風に逆觀して行く、それが道理を見て我情を折る、吾々の我情から見ると苦しみから又惑に行くけれども、あの我情をおつたならば、逆觀して、逆觀するのは理ですが物の道理がわかつたならば情を折る。俺が〳〵といふ我慢我情のはからひをやめて行く、やめるといふことは佛の御はからひである、それが佛の精神である。佛はどこにあるかと探し求めても佛は吾々の力でおさへる譯に行かない、斯ういふ活動さへおさへる譯に行かない。況して本當の精神がどうしておさへることが出來よう。おさへることにかゝることをやめてこちらで自分を投げ出さなければならぬ。人間同志でも本當の精神をおさへるにはこちらを投げ出してしまはなければ、人の精神はつかまへられるもので無い。母が何故子をおさへるかといへば、子の爲めに我を忘れ、子の爲めに自我を投げ出して、俺が〳〵といふことをやめて、子の爲めにはからふから、子の精神をとらへることが出來る。夫婦兄弟友達の間もみんなこの通りである。我をふりたてて居る人間は友達になれるものでない。少くとも自分といふものを投げ出して眞理のもと道理のもとで自分が行動するといふやうな、さういふものでなければ、人の心はおさへられるもので無い。だから佛の精神は何であるかといふと、佛の精神はこんなものと、か

たまつて居るのでない。私の心の我が折れて無我の狀態になる、つまり理を見て情を折る、それが佛の精神である。その場合には佛は平たく云へば、吾々自身乘りうつ〻て下さる。電氣が感ずるよりも早く吾々に感應してくる。佛が乘りうつ〻てその眼で道理が見えるのだ、卽ち法眼である。涅槃寂靜になつて居る。法の理を見て情を折る、本當の道理を見たならば自分の我慢我情が折れる。そこに信仰の天地が現れて來る。宗教の天地ははからひを離れるといふ所に現れる。無我の狀態になるとそれがほんのりと浮んで來る。

第五講　空（上）

丁度この頃「成實論」といふ本を讀んで居つて色々よい文句を見つけたのでそれを引用いたします。

つまり、空とは吾々がはからひをすてて、所謂無我の味を會得すると、自らその味が出て來るのである。つまり、無常と無我、空といふことは切つても切れない關係があるので、空の御話を致すのであるが、やはり、苦と無我との關係を昨晩に言ひ殘したやうな意味で、今夜の橋渡しのやうな工合でお話いたします。

苦と我との關係

（一）若人不レ見レ苦　是人則見レ我
　　若如實見レ苦　則不二復見レ我
（成實論　第五）

之は苦と我との關係を現した文字で大變興味の多い句である。倘そのに、經中に說くが如しとあるから、多分阿含經の中にある筈である。「若し苦を見ざればこの人は則ち我を見る」、といふはどういふことかといふと、苦しみといふものを見ない時に我を見る。之をひつくりかへして云へば、俺が〳〵といふ我に執着して自分の我を主張して居る人は、本當の人生の苦しみといふものに當面する事が出來ない。その反對に、實の如く苦しみを見れば、我を見ないのであります。苦しみが來たならば、その苦しみを誤魔化さず、實の如く見る。病氣といふ苦しみが來たならば、病氣を誤魔化さずに、眞面目に病氣といふ苦しみに當面して見る。その外不幸災難、色々の苦痛が襲うて來たならば、その苦痛を誤魔化さずよく味ふのである。之が吾々の本當の人生に對する態度である。大抵の人は之が出來ない、苦しみを見ますといふと直ぐうろたへてしまつて、なるべく苦しみを見まいと考へる。人生に於て樣々の緣起占ひがあつたり迷信があるのは皆それである。何か知らん不幸災難が來ると、直ぐにそこらで貰ふ、盜難、厄病よけの札をはる。殊に京都地方はそれが非常に盛んであります。京都ばかりでは無い、都會は皆さうである。都會といふ所は常に災に脅かされる。火事がありますと今迄積み立てたものが皆燒ける。その爲めに苦しみが來ると、それを恐れて、その苦しみを外の形で誤魔化さうとする、それが迷信の形になつて現れて來て、極めて不合理な樣式によつて宗教を立てようとする。それはみな苦しみを、實の如く見ないからして卽ち我を見るのである。若し實の如く苦しみを苦しみとして受ける、卽ち無我の狀態に這入る時に、苦しみを實の如く見る事が出來るのである。之は非常に面白いので、吾々が一度佛の精神にふれ、信仰狀態に這入ると、前に苦しみと感じた苦しみをもう一返、味ひなほす事が出來る。言ひ換へれば、今迄は苦しみをさけて居つたのが、今度は、喜んでその苦しみの中へ飛び込んで、さうしてその苦しみの中から新しい理想といふものを建設して行かうとする斯ういふ狀態に立ち至るのである。

こゝで特に面白いと感じるのは、苦しみを見ない人は我を見る、俺が〳〵といふ小さい自我、昨日御話致しました、樣々の煩惱が斯ういふ風に廻轉して居る、さうして俺が〳〵といふ小さい我の城へ人間が立てこもる、さうすると實の如く苦しみの味を見ることが出來ない。實に味ひの深い文字である。

それからして第二は之が又實に面白い。昨夜私は、この「我」といふものはあだかも煽風機の

プロペラに電氣がかゝつて廻る時には、一種の何か知らん生物のやうに見える、それが我であるといふ事を申しました。丁度『成實論』に私のいうたことと同じ事が書いてある。

我は卽ち是れ動處、若し實有ならば動處と名けず、乃至諸有は法聚たり。皆な空にして衆生なし。

又言はく、諸行和合相續の故にあり。卽ち是れ幻化凡夫を誑惑はす。乃至

若し人一心をもつて世間の空を觀ずれば則ち我見の根を抜き、復た死王を見ず。

『同　上』第五

「我」は卽ち是れ動處、若し實有ならば動處と名づけず、我は動くものである。丁度旋風器のやうなもので、特に我といふものがあるのでは無いが、始終煩惱が動いて居る。煩惱が一生懸命廻轉して動いて居る。あの煩惱からこの煩惱へコロコロ〳〵ころんで居る。ころんで居る狀態は、俺が〳〵といふ生物のやうなものが現れて來る、さういふ事を昨夜御話致しましたが、その最も有力なる根據である。

若し「實有ならば」とは本當にといふものが根底に實在して、最後迄俺がのぢやといふものが常一主宰で一貫して居るならば、それは動處と名づけない。動かなければ定形的に常住不斷に一貫して居るべき筈であるからして、動く必要はない。さういふ有力な一つの文章を發見したのでこゝに書いたのである。

我と空との關係

それからその次は今度初めてこの我と空との關係が出て居る。「諸有を法聚となす」、諸有といふのは、あらゆるもの萬有です。あらゆる事物は所詮物があつまつたのである「皆空にして衆生なし」、却々難しい所である。あらゆる萬物は、皆色々の法があつまつたものであつて、それはそのまゝ空であつて、斯うといふつかまへ所がない。斯うだといつてつかまへるといふ事は出來ないのである。それが卽ち空である。空であるからして衆生は無い。衆生が無いといふのは、吾々が人間といふものを考へます時に、やはり自分に我があるから、他人にも一つの我といふものを想像して居るのであります。自分といふもの、人格を感じる。けれども吾々が考へて居る所の人間、吾々が考へて居るやうな意味の人間といふものは無い。既に話しました、人間々々といつて居るが、人間といふものはやはり五蘊假和合のものであ

つて肉體と精神といふものが寄り合つて一つの斯ういふ狀態をたゞ形造つて居る丈である、決して定形的な、我といふものが始終一貫した動かないものがあるのでは無い。衆生なしといふ事は吾々が考へて居るやうな意味の人間あの人間は斯ういふものだ、この人間はどうだ、と吾々が人間に對して一つの概念を持つて居る、さういふ吾々が持つて居るやうな人間といふものは無いものである、それは一體何を意味するかといふと、すべての事物は皆んなこちらの心によつてその姿が見えて來るのであつて、精神が一つ變つて來ると物は隨つて變る。極めて鄙近な例を出しますと夜澤山の金を持つて山の中を旅する時に、若し御巡査さんに會へば地獄で佛さんに會ふと鬼と見えるであらう。何にも知らぬ御巡査さんといふ御役人が一方からは佛のやうに力になり、泥棒が會ふといふと鬼のやうに見る。それは何故であるか、一つの御巡査さんといふものが全く別のものに見えるといふことは、そこに一つの衆生が無いといふのである。吾々は御巡査さんは斯ういふものと定めて居る、概念が定まつて居る。所が事實は、こちらの狀態、境遇、精神狀態によつて一人の御巡査さんですら鬼になつたり佛になつたり色々になる。さうすると、吾々が概念で考へて居るやうな、あの人間は斯ういふもの、之は斯ういふものと定めて居る所の、固定的な生物といふものは無い。皆因緣和合によつて生まれて居るのであるからして、その時々の狀態で、それ〴〵皆變つて行く、ですから、子供の見た世界と大人の見た世界、男子の見た世界と女子の見た世界、教養ある人の見た世界と教養の無い人の見た世界、若い時の世界と年寄の世界、皆境遇々々によつて事物の價値といふものが全く違つて來て居る。少し考へると直ぐ分る。斯ういふものは無いのである。簡單にはつきり言ひ切つて斯ういふものだと考へて居る概念的事物といふものは無いのである。あらゆる事物は法の集まり因緣和合したものであつて、皆空にして衆生なし。又言く、諸行、之も同じ事で行は萬物です、「諸行和合して相續するが故にあり」。諸行は和合して居る衆因和合して、様々の要素が因緣によつて集まつて來て存在して居るのである、あらゆる事物は、和合して相續するからあるのである。即ち是れ幻化、幻のやうなものである。さうして凡夫を誑惑す、だますものである。そこへもう一つ續けていへば「若人」一心を以て諸の世間の空を觀ずれば、則ち我見の根を抜き、又死王を見ず。」死王は閻魔大王の事である。一體閻魔大王といふ事は、佛教以前にも、夜摩と申しまして、死王の意味である。佛教にて閻魔大王は地獄の王様になつて居

る。つまり死王閻魔は本當の意味からいふと死の王様、死は王の如く強い。いかなる地上の王者でも、死が來れば忽ちにやられてしまふ。だから、死王といふ名前を持つて居ります。若し人が一心を以て諸々の世間は空であるといふ事を觀ずるならば、卽ち我見の根を拔く又死王を見ない。我見といふものさへ拔けば俺が〳〵といふものさへ拔きますならば、死といふものに脅かされるといふ事は無い。

空とは無に非ず

それでこの空の問題であるが、我といふ主觀の我が、無我の狀態に這入ると、ものはどのやうに見るかといふと、この空に見えるといふのである。若し無我で無いならば、その我は何を見るかといふと、事物は皆我所（我がもの）となる。之は自分のものであると、事物にちやんと値打をつけて俺のものだ〳〵と定めて持つて居る。之が我所の感です。所がこの我が一つのはからひを離れて無我の狀態に這入ると、我所といふものは消えてしまふ。私共は金といふものは斯ういふもの、住宅といふものは斯ういふものである、といふ風に、吾々がものに値打をつけて見て居る。さういふ事物の相は、消えてしまふ。その消えて居る所が卽ち空である。併し空といふ言葉は無いといふのでは無い、無いといふならば「無」といふ言葉がある。空といふ言葉は動もすると無いといふ意味に誤られ易い。事物が無いといふ事ならばちやんと「無」といふ字がある。しかし又或る場合には有無と申しまして無を使つて居る場合もありますが、常識でいふ無いといふ事とは違ふ。

空といふ事はどういふ事かといふと、斯うぢやといつてつかまへ所が無い。之は斯ういふものだといつて、つかまへる事が無いのが空の字である。そのつかまへ所の無いといふ事を、少し說明して見ると、昨夜も一寸申したのであるが、例へばこの一杯の水である。この水は、吾々が人間世界に於てどれ程の値打ちあるであらうか。斯ういふと（コップに水をつぎつゝ）これ丈私のつぎました水は實際どれ位の値打があるであらう。一厘にも當らぬでせう。場合によつては、のどのかはいた日にこれ丈飮ませれば大いに感謝して禮をいふかも知れんが、吾々人間の世界で、之は正しく一厘にも當らぬか知れん。水道の費用を出すのを思つたら一文にも當らないと値打つけるのである。さういふこの水は一文の値打も無いものだといふ。又現に人間同志では一文の値打もない之を捨てた所で、誰も惜しいと思ふものは無い。腹を立てない。卽ち人間の世界でこの水と

いふものは殆んど一文の値打も無いものだといふ風に價値をつけて居る。併しさういふ風な意味で價値をつけてをる、その考へは空だといふ。卽ちこの水が無いといふのでは無い。一切萬物の空といふことはこの水が無いといふのではなくして水に間違つた値打をつけて居る、それが間違ひだ。さういふ考へは全く空な事を言つて居るのである。もつとわかり易い言葉でいへば馬鹿らしい間違ひの値打をつけて居るその考へが間違つて居るといふのである。その考へは卽ち同時に實在であつてその考へが水の一つの相である。であるから考へといふもの丈が獨立して居るもので無い。大變難しい事をいふやうであるが、この水は一文の値打だと思ふ、或は一文の値打も無いものだと思うて居る。その考へが空だといふ。然るに何故事物が空だといふかといふに、その考へといふものは生きて居るので、その考がこの水を支配して居る。皆さんが間違つた考へを持つ時分には、この水はその間違つた考へと一緒になつてしまふ。言ひ換へれば、皆さんが間違つた考へを持ちますと間違つた水が出て來る。間違つた考へとこの水一つになる。それですから、考へといふものは生きて居るものでありますから、考へといふものと事物は離れない。間違つた考へを持つ時に吾々は間違つた水をちやんとつくつて居る。だから世尊は考へが間違つて居ると云はれたこともある。けれどもさういふ考へが客觀の事物と一つになります時には、その考へが間違つて居るといふことは直ぐに水が間違つて居るといふことになる。だからその水は空である、御前等が今つくつて居るやうな、水そのものは空である。

それは一體何を意味するかといふとそれはどれ程の價値があるか知れない。これは庇理窟と思はれるかもしれぬが決してさうでない。それを實際に見て居る人がある。これまで、宗教の味ひに這入つて居ります人は皆この水を非常に尊敬して居る禪家の某大德は、小僧がそこらの手水鉢に水を入れかへる時に矢鱈にこぼすので非常に叱られた。勿體ないその水といふものは、吾々は何とも思はぬけれども、それは手近い所で草木の食物では無いか、やたらにこぼしては實に勿體ない事である。こぼすことがあつたら草木にやつたらよいでは無いか、草木は喜んで飲むぢやないかと云つたといふ話がある。

蓮如上人の御話を聞いて喜んだ信者の一人は、井戸の水を一つ飲むのも、如來上人の御用を勤めるのである。如來上人の御用を勤めるのであるから、この水は佛樣のものだ。佛樣のものを自分が飲む。佛の仕事をやつて居る、佛の仕事とは、限りない、値打の仕事をして居る。さうする

と吾々の常識は間違つて居るので、今日京都の水道にすれば一文にも當らぬ。斯ういふ考へは極めて實用的考へであつて本當の値打で無い。さういふ意味の水道といふものは空なんであつて、その空をさう見ないで極めて皆實用的に取扱はうとする。それが何から出て來るかといふと我から出て來る。吾々が俺が〳〵といふ極めて小さな自分に立籠る。卽ち、自分といふ小さい人間がたゞ飯を食べて面白い事をして、苦しいことはなるべく避けて都合よく享樂的生活をして行く、利己的な、自我といふ考へから割出したものでみんな値打をつけて居る。之は、今日根本的に改造しなければならぬ。さうして之が近代文明の墮落の最大原因であると思ふ。西洋にした所で、こんな考へになつて來たのは、最近二百年か、三百年以來の事である。日本であると特に五十年このかたものを物質的に見るやうになつて來た。

萬物の價値

一體日本民族は、佛教渡來以來どこの國の人達にも負けない、天地の事物にはかるべからざる値打を見る丈の素養を持つて居た。西行が無一物で野に立ちて

心なき身にも哀れは知られけり

しぎ立つ澤の秋の夕暮

とうたうた。そこに天地の間に波打つてゐる大きな値打を西行は味はつて居る。金で購ふことの出來ぬものを見出して居る。卽ち藝術家はみんなさうである。眞の藝術家は一本の花を畫きましても一つの山を畫きましても、山は何も變らないじつとして居る、じつとして居る山を見て勝手に畫く。けれども山を毀損しない。百萬人の人が、富士山を寫眞にとつたり、書いたりしても山は些つとも減りはしない。山をそのまゝにして山の精神を繪絹の上に躍らせる事が出來る。吾々は狩野法眼のはいくら、探幽、光琳のは幾ら、と高い値打をつけてゐるが、夫をつぶしにしたら何にもならぬ。このつぶしにしては一文にもならぬものに數萬圓拂ふのは藝術家の思想に拂ふのである。藝術家の思想とは何であるかといふと藝術家の思想丈では何にもならぬ、紙の上に富士山なら富士山を書くといふと、富士山といふものが參萬圓五萬圓の値打を出す。何が書いてあるか山が書いてある。山なら幾らも見て居る。然るに紙の上に書いてある山に何萬圓出すといふことは、何の爲めか。こゝに物の眞の値打があらはれて來る。吾々が山を見ても眞の値打を知らぬ。それで藝術家が代つて認めてくれる。卽ち彼等が物の空を

認め、その無盡の寶庫を開くのである。本當のものは空である。ものは空であるといふことは無限の値打を持つ。萬物といふものは無限に躍動して居る。決してじつとして居らない。所謂それが無常です。生物のやうに動いてゐる。何ともいへぬ神韻縹渺たる美の世界である。通常人はいて見せるので初めて、見て居る富士山はこんなよいものか、とわかつて來る。それまでえらい人が出て物の眞相を見て書窓を體得することが出來ぬから山を見てもわからない。それは幾らといふ値打をつけたからと對して、吾々は何百圓何千圓何萬圓といふ値打をつける。それは幾らといふ値打もないと考へていつて、本當は値打をつけることは出來ぬ、けれども兎も角水一杯を一文の値打もないと考へて居るものが、何とも云へぬ値打のあるものであるといふ尊敬を拂ふといふ事を知つて來る、之と同樣に山といふものも、その山を見てこゝへ寫生したものに値打があるならば實物の山にもやはり値打がある筈である。たゞ吾々はそれを見ることが出來ない。今日は科學が非常に發達致しまして、元素の研究や原子の研究や或は、エレクトロンの研究や樣々の微細な研究が出來て居る。出來て居りますが、さういふやうな研究をすればする程、この事物といふものが實に不思議なものであつて吾々人間の考へて居るやうな單純なもので無い。勿論科學の頭丈で外界がわかるものでは無い、わかるものは無いですけれどもあゝいふ研究をやればやる程外界といふものは實に不思議なものであつて殆んど　打をつけることが出來ない、斯うだといふことの出來ないものであることが知られてくる。一寸一例をあげますと、佛教ではこの物質といふものは。

萬物生成の要素

地……堅
水……濕
火……輭
風……動

の四大からなつて居るといふ。地は堅く水は濕し、火は輭く、風は動く、この地水火風は堅濕輭動を象徴した言葉で、萬物といふものは、堅さ、潤ひといふこと、輭いといふこと、動くといふことと、この四つの要素、今日の言葉でいへば、勢力である。その勢力を象徴して來ると堅さは大地が一番よくあらはして居る、水は潤し火はあたゝかい風は動くといふことをあらはす、地水火風即ち堅濕輭動の四大が萬物の要素です。之は吾々が考へて居るやうな、萬物といふ定形的なものは無いといふ事が、この物質の説明丈でも分る。例へばこの一つの白墨、之には堅さといふもの

がある、若し堅さがないならば、ドロ〳〵してしまつて私が持つて居られない譯である。堅さといふ性質があるから白墨は持つて居られる。その次にやはり潤ひがあるに違ひない、潤ひがないならばかたまらない。それからしてあたゝかい、之は別にあたゝかい譯では無いが、確かに温度がある。何となれば、これよりはもつと冷たいものがある。斯うやつても私は少しもあたゝかいと思うて居らぬが、肉體と同じ位な温度の輭かさをもつてる。之は別に動いては居らぬが、始終、微分子といふものは動いて居る。動いて居る證據に、百年か千年かするとどうかなつてしまふ。何でも斯ういふ堅濕輭動があるに違ひない。吾々人間は複雑であるが、私等が皆ドロ〳〵にならずに居るのは堅さがあるから、斯うして人格の尊嚴を以て崩れないで居る。潤がなければ燒石のやうになつて仕舞うであらう、餘りあり過ぎては、いかんかもしれないが、併しいくらカサ〳〵した人間でも、全く潤ひの無い人間は無い、皆あたゝかみのない人間はない、皆あたゝかさを持つて居る。どういふ人でも石地像さんのやうに、じつとしては居らぬ、皆動いて居る。斯ういふやうな意味で、すべてのものは皆堅濕輭動の四つの要素から出來て居るといふ事は、何をあらはすかといふと、吾々の考へて居るやうな意味のものは無いといふこと丈はわかる。斯ういふ一つの

白墨でも細かに考へて見ると、四つの要素に分解することが出來るのであります。

例へば一輪の花を見るにそれを描くに就いて、どういふ要素を書かうか、堅さを表はして見ようか、同じ椿の花を書くにしても堅さを多く出すことも出來れば潤ひを多く表はすことも出來る。又あたゝかみを出すことも、動いてゐる風趣を描き出すことも出來る。即ち天地自然の躍動してゐるなどの部面をも自由に表はしうるのである、それですからして客觀の事物といふものは、事物その物の狀態が既に固定的定形的なものでないのであつて、始終動いて居る、斯ういふ四つの要素に分解が出來るのである。

空と無我の境地

それでかやうに考へてくると心のゆらぎによつてこちらも動き向ふも動く全く萬物といふものはもう丁度彫刻家の前の粘土見たやうなもので自由になる。美人を作らうと獅子や虎を作らうと何でも勝手にいける。外界といふものは可型性を持つからこちらの心のやうにその姿を表はし姿を改める。故に吾々が考へて居るやうな萬物といふものは全く空である。その空の世界といふものは、吾々が本來のはからひを離れて、俺が〳〵といふこのはからひを離れて來ます時に、初めてさういふ一つの天地に這入る事が出來るのである。

それであるから、空といふ事は、無我の境地を打ち出した世界である。空といふ事は極めて消極的です。何故一體さういふ消極的な事をいふかと申しまするといふと、幾ら理窟を言うても、吾々人間の客觀といふものに對する執着は實に深いものです、客觀に對する吾々の間違つた考へは道理や理窟で一朝改まらない。今日の言葉で申しまするといふと、吾は始終概念を持つて居る。例へば水なら水といふ概念をどうしても改めといふものに對して一つ〳〵に概念を持つて居る。例へば水なら水といふ概念をどうしても改めない。吾々の持つて居る水といふ概念を一つ改めるのである。今申しましたやうに、どうも物を粗末にする、何といつても尊敬しない。そんなものは幾らでもある。どうも尊敬する心がない。この水一杯を尊敬しないといふ心は、萬物のすべてに對して尊敬しない心である。

私の友人で、外國文學に非常に精通して居つて、私の町の農學校の校長をして居りましたが、或る日、登校しようと致しました所が、町外れで、目の見えない人が頻りに太陽を拜んで居つた。そこで共の人は非常に感激し、直ぐに學校へ行つて五百數十人の學生を一同講堂へ集めまして、さうして言ふには「さて諸君、今日僕は實に非常な教訓に接した。私は四十何年この方非常に澤山の本を讀み、世界の事は解つたつもりで居つた。所が今日、目の見えん人が太陽を拜んで居つた。之は何を意味するか、太陽から吾々は熱と光を貰つて居る。目の見えない人は熱は貰つて居つても光の恩惠に浴して居らぬ。然るにその恩を感謝して拜んで居る。私は四十幾年間一返も心から太陽を拜んだ事が無い。諸君は私のやうなやくざな人間になつて呉れるな」と涙をふるつて言つた。又「現代の教育というても私見たやうなやくざなものをつくるなら意味をなさぬ、理窟を考へて見ると解るぢやないか。熱と光の恩惠は前からあるからどうでもよいと云ふ。さういふ事はいかぬ。之が無かつたらどうするか、一日も生きては居れぬ。斯ういふ恩惠に對して、感謝しない、何とも思はない、人間もそこへ來ると、どこ迄横着なものであらう。自分が努力しないであるものに對して眞に感謝をはらはない。それは何であるかといへばつまり我から來て居る、俺が〳〵といふ、目の前の自分の快樂的な小さな生活丈しか持つて居らぬ。大きな理想を持つて居らない。まことに貧弱な、物質的なつまらない考へを持つて居つた。自分は恵まれたるものに對して感謝することを知らない。何を與へられるにしてもさうである。こんな事ではいかん。どうか諸君、眞面目に太陽に對して私共眞から感謝を以て難有うございますと言つて生ける人間に對する如く頭が下がるやうな人間になつて呉れ」と云つた。

空と眞實

私は玆に非常に奥深い味ひがあると思ふ。人間だから頭が下がる、太陽だから、自然物だから頭が下がらぬ。今日幾ら天文學者が太陽は太陽系の中心であつて世界のラムブ見たやうなものであるといつた處で頭を下げないでもよいといふ事は決して出てこない。自分に對して恩惠を與へるものとなれば頭を下げて差支へない。又それに頭の下がるものにして初めて自分の生活の大きさといふものを味ひ得る。吾々は誰に對しても頭が上がるから誰にも感謝することが出來ない。從つて大きな宇宙に對して感謝が出來ない。淋しい小さな穴に閉ぢこもつてしまふ。太陽もさう、空氣に對して亦何とも思はない。

私の知つてゐる西藏の探險家はあの一萬八千尺の高原を二週間旅した時、空氣が足らんですから、夜、眠れない。その時小刀で舌の先を割き黑血をとる。さうすると頭がすうつとして眠れると十四日間恐しい旅をして、地上に居つて空氣をたらふく吸うて居るものは實に有難いものだ、と思うたといふ。

吾々は少しく考へなほさなければならぬ。よく商業で失敗して金が無くなつて首をくゝる人がある。しかし金が無くなつても空氣が吸へるなら有難いぢや無いか。幾ら金があつても空氣が無かつたら殆んど人間は生存出來ない。幾ら大きな顏をして吸うても稅金はとられはしない。一萬何千尺の山の上へ登ると今のやうな事になるが、山の上へ登りさへしなければ幾ら大きな口を開けて吸うても差支へない、差支へないから何とも思はない。

私は近來日本に流行りかけてゐるクロポトキンやマルクスの考へに對しては餘程注意しなければならぬと思ふ。あれに對する批評をやり出すと長くなるからやりませんが、富の平均分配位で人生の眞の目的や幸福が得られるといふならば大きな間違ひであると思ふ。それは物を空氣のやうにする事か知らぬが、若し夫ならば空氣と同じで生活價値はない。生活價値はなくなつて來る。尤もあれが、物質的でなければまだ面白いが……今日は金が澤山あつて困る人は困つて居る。金がなくても困つて居る。なるべく平均に行くといふ事はよい。空氣のやうに平均に行く事はよいけれども、そこの間に物を物質的に考へるといふ所に間違ひがある。所謂、食ふ飮む着るといふ事が人間生活の第一要素であるごとく考へる時に、宇宙天地が非常にせまくなる。ものがみんな死んでしまふ。殺してしまふ、さういふことになりますといふと、全く精神生活といふ事がなくなつて來る。その意味に於て、吾々は客觀の事物といふものに對しては始終主觀の頭の俺が

〳〵といふ、我を一つとり去らなければならぬ。天地宇宙に對して傲慢の頭を上げて、如何にも世界の王様だといふやうな俺がといふのをもつて居る。さういふ事をして居るものだから周圍に對す　謙虚な謙遜が頭に動いて來ない。ものだから世の中、宇宙を見てもわからぬ。藝術家の世界に這入りますと如何にも豐富な生活をして居ります。私はいつも注意して居る會合なんかに話すの　すが、人間といふものは、目を見ると大抵わかる。一種違つたよい目をもつて居るのは藝術家である。畫を御かきになつたり彫刻をする人は實にすゞしいよい目を持つて居る。あれは何故かといふと山を見ても動物を見ても決して物さない。鴨を見たら、あれを食つたら甘からうなぞと考へずにものそのものを描き出す。あの鴨が斯うやつて居る所に何ともいへぬ味があるといふ。然るにあれに葱でも入れて食つたらよからうなぞと考へる目とは當然光線の入る角度が違つてゐるに相違ない。掏摸の目とか探偵の目とか幾らでも悪い目があるが、すべてものを掠めてとらうとするもの、目は賤しい「我」が非常にたかまつて居るものであるからして、周圍に對して反抗して居る。さういふものに對してはすべてが戰場の如くなつて居るのである。さういふ目からは血煙や焔が出て居る。それが藝術家のやうなものになりますと自然、客觀の事物を壞さないで、

そこから味ひをとる。美しさをとる。何ともいふにいへない天地の間に動いて居る音樂をとる。花にしろ山にしろ、その形をとつて天地にあふれて居る所の命が躍動して居る有樣をとる。その命といふものは無限に複雜に變化して居るから幾らとつたつて無盡藏である。それが宗教の世界に這入ると更に廣いのでありまして、もう一歩進んで、宇宙人生といふものが、非常にあたゝかい光にみち〳〵た丁度子供が母にいだかれて居るやうな、天地宇宙が大いなる佛の御胸にいだかれて居る。さういふ暖かいものを見る目が出て來る。

それであるからこの意味に於て、空の味といふものは非常に深いので、吾々が事物に對して斯ういふもの、あゝいふものといふ概念をたゝきこはした時に自らあらはれる味が空の味ひである。何故空といふかといふと、この味といふものは、千樣萬樣であつて何ともいふ事が出來ない。いふ事が出來ないからしてたゞ吾々が考へて居るやうな、固定的概念がいかぬ、それが空である。そこからして無限の味が湧いて來る譯である。

第六講　空（下）

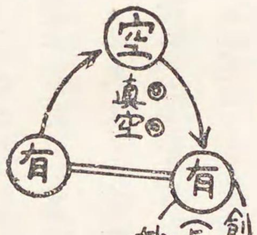
それでこの所謂空の味をいろ〳〵に申したので、大體に於て御わかりのことゝ思ふ。

龍樹の空觀

（四）淨化

八不中道
不（生滅去來
一異斷常）

空といふ事は無論釋尊が初めに御説きになつたのであります。けれども特に印度で八宗の祖師



といはれて居る龍樹菩薩が、徹底的にこの空を唱へられたのであります。有名な八不中道といふものをいはれまして、生滅去來一異斷常といふ八つの範疇をみんな壞してしまふ。事物は生でもない滅でもない、去るのでも無い、來るのでもない、吾々は死んでどこかへ行くものと考へて居るが去るのでもない、來るのでも無い。來るといふ事は新しいものが生まれたり事物が出來て來ることです。去るのはこゝを離れるのぢやといふ概念を持つて居る。それから一つでも異つたのでもない、物は同一のものである。斯ういふ一つとか若しくは異つたものだといふ概念を持つて居る。又ものはいつまでもある。物質不滅、勢力不滅、物質は決して滅するもので無い。勢力は決して失はれるものでないといふは、常の考へで、死んだらなくなる。息のあるうちは斯うやつて居るが、ある時にはあるが、無い時にはなくなつてしまふといふは斷の考へである。大凡吾々の頭の中に色々の範疇があるが、斯ういふものに大抵は攝つてしまふ。生滅去來一異斷常、斯ういふやうな八つの論理的形式で一々破つたのである。生といふことを考へて居るのも間違ひである。從つて滅といふ考へも間違ひである。物が皆去つて行くといふ事を考へて居るのも間違ひで、新しいものが段々出來て來るといふことの考へも間違ひである。あらゆるものは一つである

とか同一でありませんとか、無くなるとかいつまでもあるとか、斯ういふ考へは皆人間の我から來た考へであつて、みんないかぬ八不である。八つ全體に不生不滅不去不來不一不異不斷不常と皆「不」の字がつくのである。さうして斯ういふもので無い、こゝの間に中道がある。去でもない、來でもない、去るとも來るとも何ともいふ事の出來ぬ。こゝに一つの働きがある、同一である。違うて居るといふ事をいつて居る。けれども同じいとか違ふといふ差別を認めて居るといふ事は間違ひであつて、同じとも違ふとも何ともいふ事の出來ぬものでなければ、事物の本當の味といふものはわかつたもので無い。斷常も同じものである。それが卽ち空である。

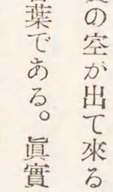
空の積極的意義

であるから空といふ言葉は、只一字であつて、極めて消極的であるが、そこに積極的な一きな意義がある。今迄は宇宙萬有に對してのみ申したのであるが、人間に對してもさうである。『法華經』に常不輕菩薩品といふものがあるが、昔常に何人をも輕んじない菩薩といふのがあつた。その人は誰を見てもいつも敬ふ。誰を見ても禮拜する。頭を下げてさうしていつも、あなたは偉いあなたは尊い佛になるでせう。」一體佛になるといふ事は、之も吾々は概念を修正してかゝらなければならないので、尤も下等なのでは死人のことを佛

が〳〵といつて居る。それから一歩進んで、佛といふも何だかピカツと光るものになるやうな妙な考へをもつて居る。所が佛といふ事は、覺者といふ事であつて限りない命と限りない慈悲と限りない能力をもつて居る。さういふものが佛である。それであるから佛といふ事は、あらゆる世の中に之より尊いものは無い。天上天下唯我獨尊。金持、學者、德者、偉いもの、英雄、豪傑とかいつて銅像を立てられたり神社に祭られたりする。そんなもの丈しか偉いと思うて居らぬのは間違ひであつて、そういふものよりはもつとえらい人間の理想の最後の窮極は佛である。今の常不輕菩薩が人間さへ見れば、あんたはえらい佛樣になるでせう。といつて頭を下げる、頭を下げては有難いと御禮をいふ、何でも一生涯人さへ見れば頭を下げて御禮をして居つたといふ。さういふ人間が歷史的にあつたといふのでは無いのです。けれども、つまり人間といふものに對する空の味である。

此の間親鸞聖人の御裏方「惠信禪尼の研究」といふ書物が出た。早速拜見しましたが、實に面白い。親鸞聖人は、晩年六十歲で京都へ御歸りになつて、それから九十歲まで、京都に御出でになつて、さうして末の娘さん、後に覺信といはれた彌女さんといふ人が御父さんの臨終に會ひ

まして（その時代惠信は越後に居られたが）親鸞聖人の尊とかつた事をずつと報告した。其返事として娘にあてた母親惠信尼の手紙に、實は今まで默つて居つたが、夫ではあるが、私は彌陀の化身と思うて居つた。夢に斯ういふ事があつた。確かに自分の夫は彌陀の化身であるといふ事を信じて居つたといふやうな事が手紙に書いてある。それがなくなられてから娘に宛てられたといふ事は、生きて居る時に自分の口から言つてはどうかと思ひましたが、今思うて見ると有難い佛樣の御生れがはりであるといふのです。親鸞聖人の偉大さは自分の最も弱點を知つて居る妻に本當の佛の生れがはりであるとまで信じさせた丈で充分だと思ふ。人間といふものは外に對しては隨分偉いものであるが、いつも袴羽織を着て居るもので無い。裸になつたりひつくりかへつたりして人間の弱點をあらはしてゐる。而もその人の中に何ともいへぬ尊とい所がある。それを始終一緒に居られた御裏方が信じて居つた。それで充分と思ふ。さうすると斯ういふことはいゝ加減に御め出たいのだと思ふかも知れんが、さうでは無い。極めて宗教的な勝れた目で見ますと、ふとそこに非常な人間の値打が出て來る。吾々は家族友人共の外多く集まつて居る、何十萬も何百萬もあるから些つとも珍しくない。太陽や空氣と同じ事で、同じやうに目が二つ鼻が顏の眞中に一つ口が其の下にある。顏は違つて居るけれども型はみんな同じ型をして居る珍しくない人間を、常不輕菩薩はえらい方ぢやゝゝといつて拜んで居つた。そこに價値つけることの出來ない價値がある。それが卽ち空の味である。俺が々々といふ小さな自我の念が洗ひ去られた所に初めて物の値打があらはれて來る。常識の價値をみんな忘れて仕舞つた時に空の味が出て來る。



圖（第四圖參照）の一番初めは「有」卽ち萬物が存在して居る。その存在は一つの素材であつて海のものとも山のものともわからない白い紙若しくは粘土、大理石のやうなもので、何にしようと、勝手である。そこで之を淨化して來て空といふ考へが浮んで來る。有が淨化されて來る。鐵を燒いて水の中へ入れてたゝいて又燒いて水の中へ入れてたゝく。さうすると錆がとれて來て鍛へられた鐵が出て來るやうに、吾々が常識で見て居る世界を空といふ考へで淨化すると、眞實の空が出て來る。さて又もう一返有の存在の世界に出て來る。それが、眞空妙有といふ有名な言葉である。眞實に空なる所に妙なる「有」が出て來る空のらんぴきにかけた時に妙有が出て來る。初の有は妙有でないあらつぽい汚ないもの、海のものか山のものかわからぬ素材である。それにらんぴきをかけると妙有の世界が出て來る。さうして

之が一念同時に出て來る。吾々の頭に一つ變化が來て謙虚な實に佛の心と一つになつて、さうして自分のはからひをやめて、天地に對して謙遜な頭になつて、隣人に對して頭を下げ家族に對して眞から常不輕菩薩のやうに頭が下がるとは尊とい有難い事である。斯ういふ風な人間の値打といふものが本當に湧いて參りますと拜む心が湧いて來る。

此頃日本人は拜むといふ事を忘れて居る、拜むといふことの社會的教養が無い。拜むといふ事を知らない。倫敦で平野丸が大戰の終る十日ばかり前に沈沒して、六百人の乘組のうち二十二人丈が助かつた。日本の領事館から葬式を出した。私は友人と二人で導師を勤めましたが、その御燒香の時に、みんなどんなことをするか知らんと三百人四百人の燒香の有樣を見て居つた。色々ある、頭を下げたか下げんかわからん位のが多い。眞面目に拜んだ人間は三百人の中四五人しか無い。妙な風に大抵は軍隊式にやつたけれども、之は人間にやることで。斯ういふ頭の下げ方は死者に對する最敬禮とはならぬ。之では面白くない。佛教でも基督でも印度教でも殆んど世界全體を通じて拜むといふことがある。殆んど人類たち始まつて、以來四五千年、いつ世界的になつたか知らんが合掌して拜むといふ事がある。之は二つのものが一つになるのを象徴したのだと思ふ。

卽ち吾々は二つのものが一つになる、本當の生活に這入つて來た時には二つの矛盾したものが一つになる、右と左が一つに統一した境地、恐らく人間の表彰としてはこの形は一番敬虔純粹な形ともいふべき合掌をする方が一番よい表彰だと思ふ。所が三百何十人各方面から集まつた紳士のうち、合掌して禮拜したのは五人位しか無い。何故それが出來ぬといふと頭の中が拜む心になつて居らぬ。無限絶對に對して頭を下げるといふ謙虚な教養がない。西洋の人はそこへ行きますと皆拜みます。日本の樣な斯ういふ荒れた無宗教の國は世界にありませぬ。外國の事をよくいふのではありませんが、斯ういふ淺間しい狀態になつたのは、何時頃からかといふと殆んど五十年前からで德川時代には斯ういふ事は無い。五十年この方、西洋の惡いものばかり來た。これは外國でも同じことで西洋人が日本のものをとるにしても、妙な嫌な、吾々が見ると嘔吐を催すやうな、日本人の色々現して居る一番嫌なものを向ふはとつて居る。之は己むを得ぬ。兎に角今頃からそろ〳〵日本人は自覺せなければならぬ。もつと〳〵宗教的無限を憧れるやうにし、物を物質的に見ないで、精神的に見る世界に眼を開かねばならぬ。華嚴經の中には一つの塵の中に萬の佛がまします。一つの塵の中に三千世界がおさまる。斯ういふ幽玄不可思議の世界があるとあるが、そ

れは何を意味するかといふと、吾々は牢屋に這入つても病氣にかつてもどんな不幸に出遭つても、その間に立つて何ともいへぬ味がある。苦しみを致して居りながら一つの樂しみがある、まことに斯ういふ世界が宗教の世界である。

親鸞の宗教と空

それであるからつまり吾々の存在といふものに對して我を一つたゝきつぶすと、眞空の晴れ渡つたそこから妙有が出て來る。そこで眞空は創造の世界、念々に創造して居り、念々に進みつゝある世界である。宇宙人生は念々に進歩し廻轉しつゝある。それに吾々の頭丈は動かないで頑迷固陋小さい穴に這入つて、自分で困つた〳〵と言つて居る。それであるから有に執着する事を離れなければならぬ。眞實の世界といふものは、どうしても空を通さなければいかぬ。それであるから之を壞す爲めに斯ういふ風に之でもない之でもないと概念をたゝき壞す。之は容易でない、その容易でないといふこと少し御やりになればわかるのですが實に難しい。

それと聯關して親鸞聖人が——親鸞聖人の宗教はたゞ念佛して佛に助けられるといふ風にあらはされて居るが、併し親鸞聖人の信仰といふものには、やはり斯うした空の味がある。それはその著『教行信證』の中にある四不十四非の文によつてうかゞはれます。すべてこれでもない、あれでも無いと、あらゆる概念をたゝき壞した痛快なものです。決してお目出たいもので無い。人間の思想といふものを徹底的に打ち壞す、それは何であるかといふと四不

四不の意義

凡按二大信海一者　不レ簡二貴賤緇素一　不レ謂二男女老少一
不レ論二修行久近一

一人の信仰は萬人の信仰である、この信仰は實に偉大なるものであつて、本當の人生永遠不朽の人生といふものは一念の信から生まれて來る。故に大信海、それを考へて見れば、貴賤緇素を簡ばず、貴とい賤しい又は出家の人在家の人をえらばない——緇は黒い着物で出家、素は白い着物で在家。印度人は白地、出家の人はそこらに捨てゝあるものを洗濯して着るからカーキ色に染まつて居る。在家の人は染めない着物を白いまゝで着て居る。——それからして男女老少を謂はず、男、女、年寄、若いものをいはぬ、實に親鸞聖人といふ人には男女といふ區別はない。たゞ第三十五の願を女人成佛の願と云つてあるが、殆んど御本書の中には、セックスに關する區別は無い。徹底的にない。たゞ女人成佛の願といふものが昔からのこつて居るのは三十五願で特に女

人の爲めに設けた、それ丈がいはれてある。それ程御本典に於ては男女の區別を絶對的に見て居られない。之が特色です。あゝいふ徹底的な方であるから性の區別を見られる譯が無い。ちやんといつてある。世間の吾々の問題になるのは老人と若いもの。併し信仰の天地に於ては、少しも斯ういふ事は問題にならぬ。それからして、造罪の多少を問はず、罪の多い人と少ない人は、人生世間に於ては一番大問題、であるが之も少しも、さはりにならぬ。修行の久近を論ぜず、修行といふのは自分の教養、吾々人間からいへば、大學を出て書物を讀まぬと博士になれぬ。精神修養を何年間が長い間やつて悟を開くさういふ修行、或は修行の長短といふやうなことを論じない。之が四つの不でありまず次で十四非とは、

十四非の意義

非レ行非レ善非レ頓非レ漸非レ定非レ散非二正觀一非二邪觀一非二有念一非二無念一非二尋常一非二臨終一非二多念一非二一念一唯是不可思議不可稱不可說不可稱信樂也。

行に非ず善に非ずといふのは、修行をして行く譯では無い。他の爲めに善いことをして行くといふ善根功德で行くのでも無い。頓に非ず漸に非ずといふのは之はおかしい。頓に非ず漸に非ずといふのは、人間の傾向として心を非常に靜めて一つの境界にずつと進んで行ける人がある。夫を定の機といふ。散の機といふのは心がチラバラ散つて行くのをいふ。必ずしも信仰の天地に這入るには心を一つに集中するそれが條件でない。といつて、それでは矢鱈に氣が散るのがよいか、さうでも無い。正觀に非ず邪觀に非ず、正觀といふものは正しく見る條件としては大事な事です。正しく見るといふこと、それによつて條件として信仰に來るのも、間違つて見るのもよくない。それでもない。有念に非ず無念に非ず、有念といふのは大變之は難しいのであるが、吾々が信仰へ這入る場合に、斯うだといふ意識的に認識する、こんな具合にして信仰に入る、斯ういふ工合に信ずるのだといふそれは有念です。といつて無念無想になつて信仰に這入る、さうでも無い尋常に非ず、臨終に非ず之もおかしい事で、平生業成で平生の時に信仰の一念を得ると云つた、それにかたよるといけないといつて平生にあらず、臨終でも無い、どちらの型にも嵌らぬ。多念に非ず

ではない頓極頓速圓融圓滿で、信仰の一念にすべての迷を超越するのであるといつて居る。そのくせ頓に非ずといつてあるのは一寸おかしい。漸といふのは、歷劫迂廻、何千年何萬年と修行をして段々〳〵行く。頓に行くのでも無い、漸に行くのでもない、定に非ず散に非ず、定といふのは、人間の傾向として心を非常に靜めて一つの境界にずつと進んで行ける人がある。夫を定の機といふ。散の機といふのは心がチラバラ散つて行くのをいふ。必ずしも信仰の天地に這入るには心を一つに集中するそれが條件でない。といつて、それでは矢鱈に氣が散るのがよいか、さうでも無い。正觀に非ず邪觀に非ず、正觀といふものは正しく見る條件としては大事な事です。正しく見るといふこと、それによつて條件として信仰に來るのも、間違つて見るのもよくない。それでもない。有念に非ず無念に非ず、有念といふのは大變之は難しいのであるが、吾々が信仰へ這入る場合に、斯うだといふ意識的に認識する、こんな具合にして信仰に入る、斯ういふ工合に信ずるのだといふそれは有念です。といつて無念無想になつて信仰に這入る、さうでも無い尋常に非ず、臨終に非ず之もおかしい事で、平生業成で平生の時に信仰の一念を得ると云つた、それにかたよるといけないといつて平生にあらず、臨終でも無い、どちらの型にも嵌らぬ。多念に非ず

一念にあらず、やかましく信の一念で宜しいといつて居るがそれに又ひつかゝるといけないので一念にあらず。多念といふのは、佛を信ずるのに十分間或は一時間信じなければならぬとかいふ條件があるので無い。

斯ういふ風に行に非ずから一念にあらずまで十四非ある。みんな之は大事なものです。惡いやつもあるが所謂善頓正觀、尋常だ一念だといふものはみな大事なものです。大事なものでも直ぐ其に人間といふものはひつかゝる。信仰へ這入るにはどんな惡人でも差支へはない、惡人になつてといふのでは無い。たゞ要するに心を一つ廻轉する。俺が〳〵といふ我のはからひをやめてたゞ佛の仰せを信ずるといふ即ち空の天地に出て來る。即ちはからひをやめる時に空の世界が來る、空の世界が來る時に佛の相が拜まれる。佛の御慈悲が戴かれる。

空と信仰

親鸞聖人は殊に御年寄りになられてからの御手紙の中を見ますとはからひをやめるといふ文句が多い。

「自然といふは、自はをのづからといふ、行者のはからひにあらず。然といふはしからしむるといふことばなり、しからしむるといふは行者のはからひにあらず　……。」

私共がはからふのでない、はからふのがいかん。すべてはからはぬを信仰といふ。みんなはあでもあらう斯うでもあらうとはからうて居るといふ事はおかしい事である。殆んど御手紙の中に一貫してはからひをやめよといふことが出て居る。はからひをやめよといふことはつまり、我を捨てよといふ事である。

親鸞にをきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別に仔細なきなり。

法然聖人の言ふ事を聞いてはからひをすてゝ信ずるほかに別に仔細なきなり。すてた所に空の世界が出て來る。あゝでもあらう、斯うでもあらうといふ計度分別を打ち壞す四不十四非で人間の大事な概念を壞してしまふ。そんな概念に腰掛けるからいかん。斯ういふものだと信仰をつかみ、佛樣を握らうとする、所が握つた時には死んでしまつて居る。私共につかまへられるものではいかん。私がつかまへられるのだ。私がつかむものなら駄目、人はこんなに御念佛が稱へられるから、信仰が有難いから、等とどこかに腰かける。鳥が翔けて行くやうなもので、何でもおさへてはいかん、おさへて居つては鳥は動かない。併し人間といふものは妙にものを自分でおさへて見やう〳〵とする。おさへて居つ

てはいつまでたつても上らぬ。離したら直ぐ上の方へ上がる。それに氣が附かぬ。自分は得心した、私は承知した、今度は動かぬ、今度こそは安心だといふ、そこからグル〳〵動いて居る。

法然上人は、人一日の中に八億四千の思ひあり、念々の爲す所三塗の業と云はれた。誰が計算したか知らんが、斯ういふ心でものをつかまへやうとする。いつまで經つても駄目である。其爲めに概念を四不十四非を以て打ち壞した。さうして唯是れ不可思議はかることが出來ない、不可稱、口で稱へ、不可說いふ事が出來ない。不可思議不可稱、不可說の信樂なり、何んともかんとも人間の口が概念でおさへることの出來ぬものです。電燈線が切れて漏電して居る、知らずに觸れるあツ困つたと思ふうちに感電して死んでしまふ。電氣は物質ですが、吾々の頭の神經中樞が末端機關に命令するよりは電氣の方が速い。電氣でさへ感じ方が左樣に速い。だから佛の御慈悲の精神は決しておさへる事の出來るもので無い。私がおさへられるものである。たゞ不可思議、不可稱不可說、頭で考へる事も出來ない口で稱へることも出來ないその信心である。

つまり要するに吾々があゝだ斯うだといふはからひといふものを打ちすてゝしまふ。

喩、如下阿伽陀藥ノ能滅中一切ノ毒ヲ如來誓願ノ藥ハ能ク滅スルニ智愚ノ毒ヲ也。

阿伽陀藥はその時分の名藥であつたと見える。如來誓願の藥は、佛の誓願の藥は能く智愚の毒を滅する也。」之が振つて居る。賢い智も愚かなのも毒である、智愚の毒を滅するとは要するに、親鸞聖人の頭は徹底的なものですから、賢うてもいかぬ。愚かでもいかぬ、智も毒だし愚も毒だ。智愚の毒を滅する也とは要するに、徹底的に望みがつきるより仕方が無い。望みがつきるより仕樣がないから、地獄は一定すみかぞかし。人間といふものは何かにぶらさがらうとする。慈善事業とか學問とか名譽とか何か知らん、どこかにぶら下る手がゝりを求める。どこにも手がゝりが無い智も愚も毒で、行も善も駄目、何にもかも皆ないかん、無念もいかん、一念もいかん、何にもかも皆んないかんものだから、望みがつきるより仕方が無い。仕樣がないから、地獄は一定すみかぞかし、とたゝき落ちた所で救はれる。そこに空の世界が出て來る。身を投げ込まければならぬ

華嚴經と法華經の所說

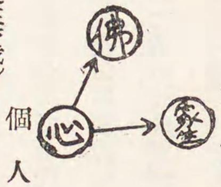
華嚴經の中に、善財童子が五十三人の善智識を尋ねて道を求めることがあります。之は釋尊の修道生活を象徵したのでありますが、ある婆羅門の所に行きますと　大きな火を燃やして言ふには、本當に悟りを得たいならばこの山の絕頂から火の中

へ飛び込め、飛びこめば大丈夫だ、師匠の言ふ事ならば何でも聞かうと思ひ切つて、恐ろしい火の中へ飛び込んだ。するとすつと火はなくなつてしまつて一つの清涼な靜かな世界が出て來た。そこなんです。その飛びこむ所に、苦を見ない人は我を見る。苦を見るものは我を見ない。一ばい火の燃えて居ります焔の中に飛び込んでしまふ。身をあげて飛びこんだ時にそこに本當の世界が出て來るのである。

それから最後は『華嚴經』の文でありまして、この御話をすると大變長くなります、けれども、この空の世界が積極的に出て來たありさまであります。

六心如二工畫師一　畫二種々五蘊一
一切世界中　無二法而不レ造
如レ心佛亦爾　如レ佛衆生然
心佛及衆生　是三無二差別一

「心は畫印の如く様々の五蘊を畫く、」人間のこんな様々の世界、様々の人物を畫く、「一切法として一切の物として造らないものは無い、心は何でも造る。」心の如く佛亦爾り、佛の如く衆生然り、心と佛と衆生とこの三差別なし、」有名な華嚴經の文である。之を圓で書いて見るとよくわかる。



佛といふものは何であるか理想、卽ち、哲學的にいへば軌範法です。大理想、心は一個人、吾々個人、この衆生は何であるかといふと生物、生物全體であるから社會、要するにこれ丈でせう。吾々の世界といふものは一個人と社會と理想との三つに攝る。理想が無い時は文化が無い、猫の世界や猿の世界に文化が無いのは彼等は理想を持つて居ないからである。社會は持つて居るが理想が無いから、文化が發展することは無い。人間が進歩するのは何であるかといふと理想を持つて居るからである。佛といふものは最上完全の理想です。それが卽ち吾々の心、吾々一個人の

心は社會と佛を統一したものといふ。こんな大きな思想は世界にも類る罕なることと思ふ。心と衆生佛とが一切を造る。心佛及衆生是三無差別、社會と自己と理想が一つだ、斯ういふ一つの提唱である。

佛凡一體の心境

この個人に空無我の頭が働いてくると、この佛といふものが自分のものになつてしまふ。さうして本當の社會（衆生）といふものもが生まれて來る。之を考へて來ると色々に考へられる。この人間といふものは斯ういふ工合であるから、今日の問題は個人といふものと社會といふものはどういふものか、どういふものが人間であるかといふ事を、世界の學者が非常に今研究して居る。歐洲大戰迄は國家主義といふものが非常に盛んであつたが、國家主義の最後の結果は大戰爭を惹き起して倒れてしまつた。先づやかましい國家主立の典型であつた所の獨逸が倒れた。土耳古がやられる、バルカン半島がやられてしまふ。勝つた英吉利、佛蘭西も一寸輕濟がもてない。國家主義といふものは歐洲大戰に於て或る意味に於て壞れました。その次は社會である。新聞に國家といふことはそれ程出て居らんが反對に社會といふ事は非常に出て來た。雜誌を見ても戰爭の前は社會といふと社會主義かといふので警察や官憲につけられた。所が戰爭が終つてからはこゝにも社會あそこにも社會、蟻の社會、蜂の社會、何でもかんでも社會……戰爭前までは國家が虐待して居つたものが、今は社會人類といふものを考へ出して來た。社會人類といふものと一個人の關係は抑も何かといふ事です。社會學者、人類學者、文明批評家は、個人と社會の關係をどう考へるかといふことに浮身をやつして居る。然るに其根底は釋尊既に說破して居る。個人的社會と絕對理想といふものと根抵を一つにしてゐる。私一人が目を覺ます卽ち自分一人が目を覺ますといふこと一切の人が目を覺ますといふことである。

彌陀五劫五惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。

佛の大精神を親鸞一人がためと、自分一人でひきうける。先づ自分一人が生きかへる。人を助ける前には先づ自分が泳ぎを知らなければ共に土左衞門になるより仕方が無い。本當の慈善といふことは自分が先づよく泳ぐことで、個人を完成するといふことが何よりの急務である。この意味に於て宗教といふものゝ第一步は絕對的個人主義である。大體人間といふものは生へ抜きの個人主義であると思ふ。誰でも自分といふものを考へて居る、特別の人に限つて生れながら利他主義のものがあるかも知らんが大體人間といふものは個人主義である。たゞその個人主義なるもの

は利己的な小さなものでなくして、大理想を孕んだ個人主義でなければならぬ。それは卽ち眞の利他主義である。

さういふ意味に於きまして吾々は空無我といふ事をよく味ひますとそこに絶對の理想の佛が自ら吾々の心の中にあらはれて來るのである。（完）

佛教概說

終

索引

	頁數
ア行	
惡見	63
有空の關係	110
閻魔大王	93
カ行	
峨山和尙の母	35
我と我所	69
我と空	91
合掌の意義	116
我の調御	81
價値の轉換	95
我は動處	90
疑	60
空氣の價値	106
俱舍論（阿毘達磨俱舍論）	77
愚痴	56
苦と我の關係	87
空と無	94
鳩摩羅迦葉（Kumārakāśyapa）	37
藝術家の心境	99
華嚴經の心佛及衆生の文	126
計度	82

源信和尙の母 35
御一代聞書 83
五蘊 15
子を殺す母 23
五蘊 15, 17
五濁 19
金光明經 43
五欲 24
惛沈 39

サ 行

自我の有無 76
自我と人生 51
四教 12
四大 101
「自然」の宗教味 123
四不の意義 119
十四非の意義 120
瞋恚 54
眞我と俗我 77
眞空妙有 118, 115
眞實の個人主義 129
信者の生活味 97
親鸞聖人と惠信尼 113
親鸞聖人の空觀 118
正見正思惟 31

成實論 87, 90
社會の誕生 128
正理と我情 83
隨相論 69
井中の人の喩 23
善財童子の求道 125

タ 行

太陽の恩惠 104
智愚の毒 124
掉擧 39
貪欲 51

ナ 行

仁王の夢 41

ハ 行

八苦（實ハ七苦、二十頁參照） 12, 19
八不中道 110
彼岸 31
佛說箭喩經 10
分別 82
法華經の常不輕菩薩 112
法の意義 70

マ 行

慢 58

教團の人々

釋尊研究叢書　第二編

無我の境地　104
無盡の寶庫　100
無　　常 (Anitya)　4
眼と人格　108

ラ　行

禮拜の意義　116
流水を渡る喩　30
楞伽經　74
龍樹の空觀　110
蓮如上人の母　35
六大煩惱　51
六　　道　19

ワ　行

惑業苦の三道　44

目次

第一　緒言

一　表白……一

二　教團の裏面……一三

利欲――鬪諍――無智――放逸、惡戯――病――外難

第二　五比丘……三五

憍陳如――阿濕婆特――跋提――摩訶男――婆沙婆

第三　耶舍（附、離垢、善實、具足、牛王）……四二

第四　摩訶迦旃延……五〇

第五　三迦葉……六二

優婁頻螺迦葉――伽耶迦葉――那提迦葉

目次

第六　大目犍連　附蓮華色比丘尼……七〇

第一章　出生より歸佛まで……七〇

第二章　修　道……七三

一、耆闍崛山の修道……七三

二、睡　眠……七五

三、目連と惡覺……七六

第三章　目連の特長……八〇

第四章　目連と在俗者……八四

一、給孤獨長者の子……八五

二、商人の崇拜……八六

三、東園精舍の建立……八八

四、蓮華色女……九三

第五章　目連と舍利弗……九九

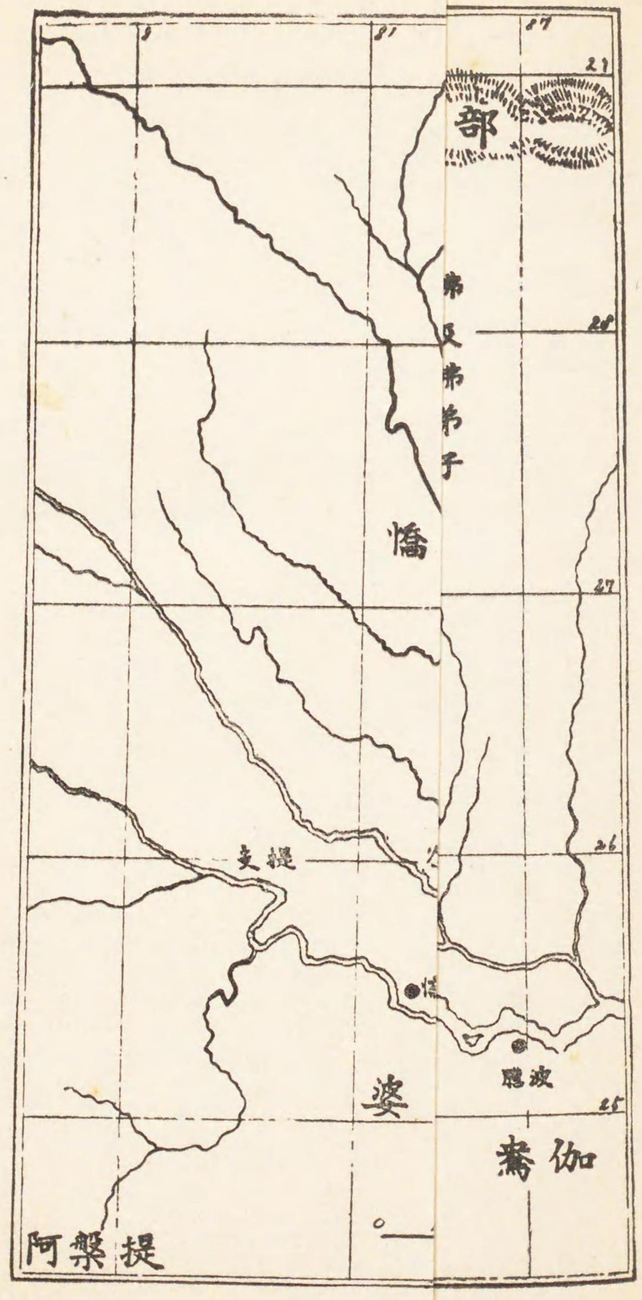
第六章　目連と釋尊……一〇六

第七章　目連と天上界……一一三

第八章　目連と餓鬼……一二一

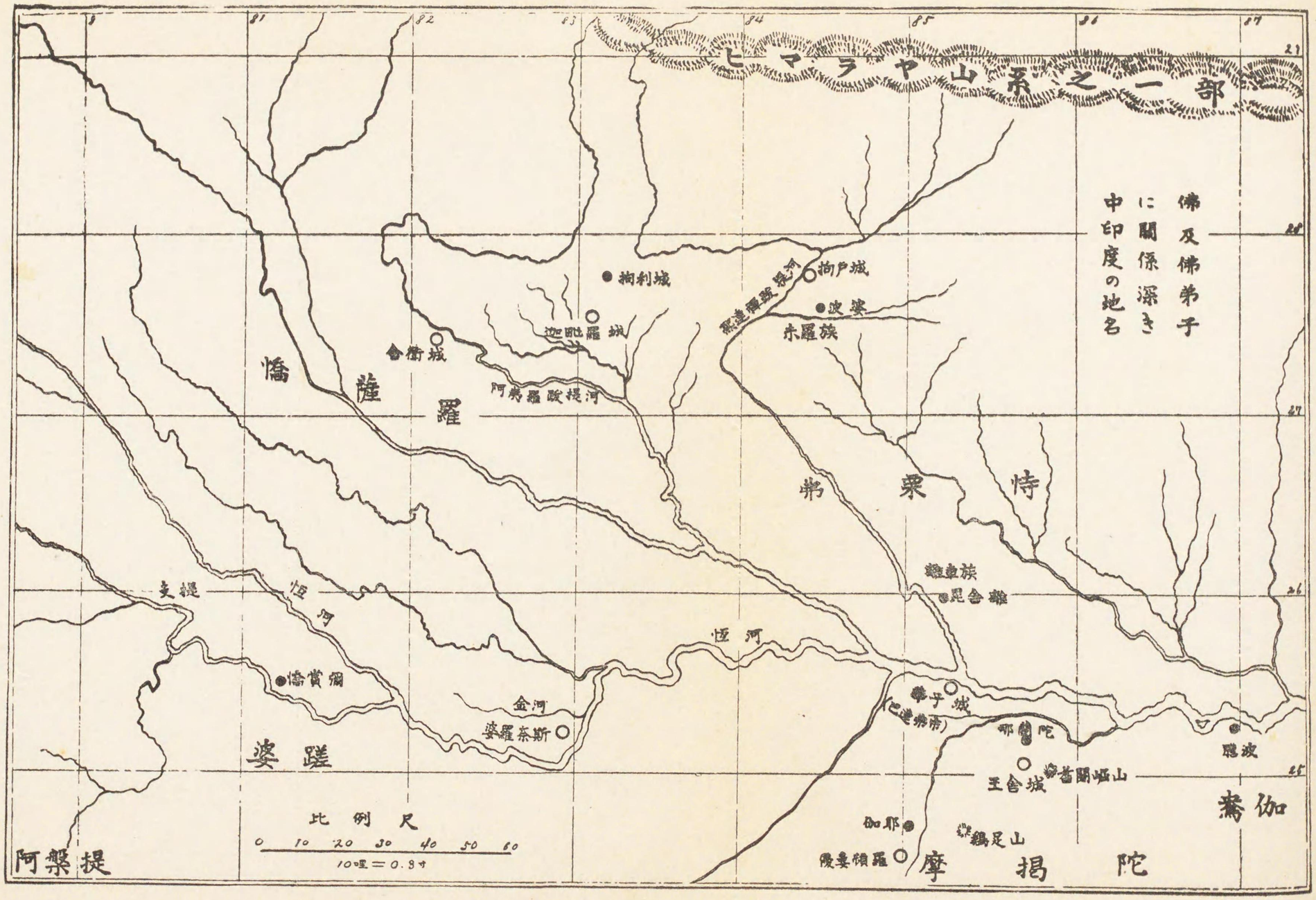
第九章　目連の母……一二四

第十章　目連の殉教……一二七



部
弗及弗弟子
憍
支提
婆
伽
阿槃提

佛及佛弟子に關係深き中印度の地名



第一緒言

一　表白

一

數年以前から私は釋尊の人格を中心として、漢譯の諸經典や外人の手に譯出せられた南方の經典傳記等を拜讀してゐる中に、知らず〳〵佛弟子傳の材料が蒐集されて來た。それと同時に釋尊を知るには、どうしても其周圍との交涉を見ねばならぬ要求を生じた爲め、今迄釋尊にのみ注いでゐた私の眼は自とその周圍に轉ずるやうになり、そして其結果は佛弟子傳の起草となつたのである。

云ふまでもなく釋尊の周圍はあの大な佛教々團である。初め五比丘を度して三寶具足せられてから、數年の間に千餘人の弟子を有する僧伽となつたあの教團である。　その教團を知るには、その中の中心人物たる大弟子の事蹟人格を見ねばならぬ。卽ち是等の大弟子の事蹟を繹ぬ

れば、あの大な教團は彷彿として私共の眼前に表はれ來り、そして又先に眼を離したと思うた大聖釋尊の人格は、この教團を腹中に呑んで、燦然として輝き給ふことである。

讀者は下の傳記を繙いて隨分失敗や、非行を演じた弟子達に接するであらう。是は教團に於いては決して珍しい事ではなく、若し試みに數ある律部の經典を一覽せらるゝならば、凄い程激烈なる人性の惡毒に驚かれるであらうと思ふ。けれども釋尊は左樣な汚い出來事に關しても、溢れるやうな慈心をもつて、之に臨み、或時は勸り、或時は教呵し、寛嚴宜しきを得、四十五年一日の如く教養せられた。私は最初是等の事實に接して、何處ともなく納得が出來なくして奥齒にものが挾まるやうに感ぜられたが、或時不圖釋尊修道の歷程といふ事に想ひ到るや、この疑問は釋然として解けて來た。卽ち教團に於ける數千人の弟子達の修道は、その儘釋尊修道の内容である。釋尊が王宮の中に人世の快樂に耽つてをられた時から、勤苦六年の修道生活、及びその證語の具體的の發現は、その儘大いなる教團である。釋尊は如何に諸比丘が犯戒の行爲をなしても、御自身の長い間の思想の動亂を思はれては、實に尤ものことであると同情せられ、進んでは煩惱の惡魔に苦められる諸比丘を憐ませられたに相違ない。卽ち慈母が愛子に對する態度を以て、諸弟子を教養し、又或時は嚴父のやうに烈しくその不心得を教呵せられたのである。

この消息は提婆の反抗に於いて著しく見ることが出來る。提婆は實行の勝れた人であるが、中心我主の念を含んでをつた爲め遂に釋尊に反抗するに至つた。之に對して釋尊は彼の暴橫を教呵しながらも、或時は提婆を見ることは羅睺羅のやうであると云ひ、又は母后摩耶夫人のやうにも思うと感謝してゐらせられる。釋尊は中心から子の如く慈心を濺ぎ、母の如く敬愛せられたのである。そして提婆の反抗の根本たる我念は、又釋尊の深く實驗せられた處であつた。

かくの如く私は諸弟子の事蹟を繹ねゆくとゝもに、釋尊の人格が一步々々明るく、一步々々細に拜することが出來るやうに感ぜらるる。この意味に於いて大聖釋尊の人格は、絲の珠玉を貫くやうに、是等弟子達の各中心を貫いて、一連の美はしい僧伽といふ念珠をなしてをられることを感じます。

二

表白

大乘の諸經典を繙くと、一樣に聲聞緣覺の二乘を貶しめてゐる。彼等は佛種の腐つたもので ある。自利一方で利他といふことを知らない者である。その說く所は迷の存在を絕滅し業の鎖 を斷つことを敎へるに過ぎない。隨つて其證りも身を灰にし智を滅し、只苦みを脫れる丈の極 めて消極的の者であるといふてある。そして舍利弗、目犍連、大迦葉のやうな大弟子は、まる で融通の利かぬ村夫子のやうに馬鹿にされ切つてゐる。是に反して大乘の敎理の高遠と幽玄と を誇り、諸佛の大悟界を廣說し、觀音、勢至、普賢、文珠等の諸菩薩の威力を記載してゐる。 こゝにも解し難い謎があるのである。

大小乘の關係は、古今の學者によりて考究せられた大問題である。この精密なる研究は後日 に讓り、私はこゝに大體の私見を述べて見やうと思ふ。

宗敎は單なる思辨でない。哲理でもなければ詩歌でもない。それは不思議の證悟である。純 一なる精神の最高調である。死を恐れず、名利に迷はず、反對に是等生死の一切を超越し、一 切を驅馳する主觀の力である。この大いなる力、大いなる智慧の體得が宗敎である。諸弟子は この力を得る爲めに道を修めた。彼等は高遠なる哲理を思索せずして、近く自分の胸中に湧き

返へる下劣の煩惱を征伏した。これが爲に慘ましい苦鬪を續け、自己の內心を堀つて〳〵堀り 續けた。かくて汚い欲念我想の泥をすて〳〵天眞獨朗の爽やかな心境に達した。そこには生死を 自在に支配する力がある。叩けば鏘然として清凉の響きがでる。卽ち內に對する靈の勝利であ る。彼等はこの主觀の大心海、天地を包んでも尙ほ餘りある深い證悟味を味うて、表面には清 素簡淨の生活を續けたのである。

この心境は實に高價なものである。世の一切を以てしても購ひ難いものである。彼等は自己 の一切を堵してこの單一なる證悟を得た。この證りは深くして廣遠である。苟も實修實證を外 にしては如何なる知者も貴人もこの天地に參與することは出來ない不可思議境である。この靈 の呼吸、靈界の光景、靈力の活動は、到底凡夫の測りしることは出來ぬ。私は諸弟子の心境を かやうに觀ずるのである。

然るに當時一般の人々を初め機根の劣つてゐる修道者等は、聖者の廣大なる心境を知らずし て、只管に彼等の淸素簡淨なる外相を眞似、小さな自己の杯をあけて僅かの滴りを呑んだ。是 が後世に至れば益眞の修道は衰へ、靈の呼吸は絕えて、ほんの四諦十二因緣といふやうな形體

丈が殘り、彼等の目に映じた釋尊及び教團の大弟子は、融通の利かぬ仙人位にしか思はれなかつた。かやうにして聖者の證悟は、俗衆の爲めに散々に汚され、小さくせられて仕舞ふたのである。

是の凡俗の見解を打破して、聖者の眞面目を發揮し、釋尊を初め、大弟子の證悟を闡明したる者は大乘教である。釋尊の證悟は、悠遠涯大なる圓融不可思議境となり、諸弟子の證悟は亦大菩薩を以て表象せらるゝに至つた。されどこの復古革新を實行するには說明や訓誡の姑息手段では駄目であると知つて、その靈の空氣に觸れた人士は、凡俗の考へてゐる釋尊觀、弟子觀をその儘にしておき、而も一括して小乘の名を冠らしめ、直ちに之を粉碎し去つて、眞の證悟たる大乘教を宣言した。かくて四諦十二因緣の教義も、因果法も、實修には左まで役立ぬものとして省みられなかつた仆素的宇宙觀も、その滔々たる大自覺の上から、圓融頓速、無碍、廣大の大教說となり、さながら天馬空を行くの趣きをなすに至つたのである。

かやうな有樣であるから、人間の歷史をもつてゐる釋尊も大弟子も、一樣に見る影もなく葬られ終つた。そして不可思議の佛菩薩が燦然として人々の上に輝き、大哲理となり、大藝術となりて、人心を支配するやうになつて來た。否、眞の佛弟子は、少くも是等の時代の變化に煩はさるゝことなく、雲に研かれ嵐に磨がるゝ明月のやうに、春は溫き光、秋は澄みたる光を放つて、千古その體を動さず、こゝに大法王大菩薩の威力を示して、この濁つた空氣の中へ靈の空氣を送つたことである。而も人々はいふ小乘の羅漢は死んだ、大乘の菩薩は生きてゐると。

三

私はこの見解に立ちて尙ほ觀察を進める。諸弟子の隱れたる眞證を打ち出したのが、大乘菩薩の悟境であると申したが、さて折角左樣に表現せられたる大悟界も、一般人は更に又芝居を眺める眼を以て之を眺め、床の間の掛物のやうに、徒に賞讚するか、鑑定するか、但しは他の教と比べて非難する位に止り、進んでその中に沒頭して眞の色讀を試みる人は極めて罕であつた。眞の表現は眞の開鑿に俟たねばならぬ。眞に自身を開鑿するには、高遠なる哲理も用をなさぬ。唯主觀を精鍊するのである。自己を如實に觀照して、眞智を叩き出すのである。そして最後に自己の眞に徹底した時に、蕩々たる大表現は自と生れ、天地を孕んでも餘りある大宇宙

は、その心境に生れてくるのである。之が中々容易なことではない。この大小乘一枚、天地の眞に參し、自己の眞に參し、如來の眞に參する大自覺は、どうしても憁澹たる修道に俟たねばならぬ。然るにかやうな宗教的人格は漸次に衰へ、只その自覺の發表たる大乘の教理丈は修道者の行手を照せども、智ありて行を缺いたる修道者は、その智光の燦然たるに眩惑せられて、唯徒にその形體を手探りして、ヨボ〳〵と調べ出した。誠に證りは偉大である。その表現は蕩々として捕捉し難い。而も彼等の多くは、その表現の根元を自己に求めることを知らずして、只文字に拘泥した。こゝに至つては、富麗深遠なる大乘教も、ほんの床間の置物に過ないやうになり、果ては文殊普賢の諸菩薩は單なる智慧と慈悲との表象となり觀音、勢至も亦、徒に現世祈禱の對象となるに至り、折角の革新も久しい以前から水泡に歸しつゝあるのである。

『華嚴經』に「心佛及衆生、是三無差別」といふ言葉がある。よく修道の要を道破してゐると思ふ。佛界(絕對)は高くして觀じ難く、衆生界(宇宙人生)は廣くして觀じ難い。只この一心を觀ぜよと勸めてゐる。一心を觀ずるとは自己開鑿である。眞如を觀ぜずしてこの汚れた陰妄の心を觀じて絕對を感得し宇宙を拈出するのである。大乘といはず、小乘といはず、眞の宗教は是より外はない。こゝに絕對獨眞の宗教がある。靈の勝利がある。この意味に於いて教團の佛弟子は、千古の宗教的人格と云はねばならぬ。私は現代のやうな肉の要求に勞れきつてゐる共中へ、內省のない煮え返るやうな利己心の渦中へ、そして私の汚濁の胸中へ、この聖者の一群を勸請せんことを欣ふて已まぬものである。

讀者は下の傳記に於いて各の聖者が異る閱歷と、異る性格と、異なる修道の歷程の下に、各自獨特の人格を發揮してゐることに注意せらるゝであらう。名は忘れたが泰西の某佛教學者は佛弟子初め佛教の聖者は皆な一樣の人格をもつてゐると申したやうに記憶してゐるが、この評語は外から漠然と眺めた內容のない言葉であると思ふ。舍利弗、目犍連、大迦葉、阿難等の特長の異れる、殊に周利槃特、迦留陀夷、薄拘羅等に至つては、その獨特の性格が證悟の上に鮮に表はれたることは注目すべきことである。故に釋尊は常に是等の諸大弟子の特長を讃へて諸比丘を勵まされた。增一阿含經第三卷には大比丘百人、大比丘尼五十人をあげて各その特長を讃め、更に同經第四十六卷には、舍利弗、目連、大迦葉、阿那律、離越(離波迦)迦旃延、滿願子(富樓那)優波離、須菩提、羅云、阿難の十一人を賞讃し、『五分律』第十七卷には、以上の中、離

越と須菩提を除きて、摩訶倶絺羅、難陀を加へ、矢張り十一人を教團の頭目に數へてゐる。吾等は是等聖者の各の特色に接することによりて、同一の宗教が眞實に各人に感孚せらるゝ時に、必ず異なる色彩を呈することを會得せねばならぬ。そして是等の聖者が各自の特長を發揮しながら敬愛の情を以て和合僧の理想を實現せることを深く身に引き付けて味はなければならぬと思ふ。

因に翻譯名義集には、大迦葉、阿難、舍利弗、須菩提、富樓那、目犍連、迦旃延、阿那律、優波離、羅睺羅を十大弟子の名目の下に擧げてあるが、依憑すべき經典の何處にもこの十大弟子の名目は見當らぬ。そして又教團の實狀から考へても殊に上にあげた十弟子が、特別に十大弟子として指定さる理由はないと思はれる。卽ちこの十大弟子の外に、少くとも倶稀羅、難陀、賓頭盧、薄拘羅の如きは逸することが出來ぬ大弟子である。依憑すべき經典の何處にもこの十大弟子の名目のないのは尤もの次第と云はねばならぬ。是等は後の人が單に十といふ數字の下に大弟子を選んだに過ぎないのであらう。吾等はかやうな無意義な型に捕へられてはならぬ。

私は上來述べ來つた見解に立ちて、本傳を起草した。出來る限り史料を蒐集し、大乘經典の誇張的な記載を避け、讀者をして面前是等の聖者に接せしむるやうに努力した。讀者が先づ人間として彼等に逢ひ、次に其心境に頷け入りて充分に偉大なる靈格に接せられんことを望む。そして又それに接觸する唯一の方法を感得せられんことを望む。されどそこには何の顧慮も要らぬ。只色讀にある。體達にある。實行にある。卽ち苟も眞面目なる努力さへあらば、私はそこに凡ての人類が歸向すべき眞宗教が其人を待つてをると信ずる。私の如きは其自力のドン底に衝當りて他力の大威神力を感得するに至つた次第である。私はこゝに自力他力一枚の不可思議境があると信じてゐます。

本書は多くの先輩の直接間接の提撕に俟つことが多かつた。殊に南條先生がその貴重の藏書を多く貸與せられたことは謝するに言葉はない。而も省みて本傳脫稿までの自分の淺間しい思想と生活を思へば、何の顏あつて、是等の聖者と對面することを得やうぞ。誠に慚愧の術も知

らぬ。若し夫れさゝやかなる私の努力によりて、諸聖の面目の幾分を表現する事を得るならば、望外の仕合である。

二　教團の裏面

釋尊の教團と云へば、數百千人の比丘衆が、師釋尊の人格の下に統一せられて、一様に眞面目な、嚴烈なる修道を續けて、皆んな阿羅漢の證りを開いた僧伽と思はれる。從つて、比丘衆相互の間も頗る圓滑に、平和に纏つてゆき、各自の修道生活も徹頭徹尾立派に營まれたやうに考へられることであるが、さて一度その裏面に立ち入つて見ると、唯もう驚くの外はない。放逸な生活をやる人、嫉妬や憎愛の渦中に沈淪する者、中には教團を逃げ出すものもあれば、性欲の虜となつて、幾度も〳〵誤ちを重ぬるものもある。殊に比丘尼の如きは、生理的に禁欲生活の器には不適當であるが爲めに、隨分慘澹たる狀態であつた。かやうに人性のあらゆる缺陷が、釋尊といふ完成した清淨の人格と反映して一層の闇黒と汚穢とを感ぜしめる。殊に是等の人爲的修道難の外に、印度といふ熱い國柄から來る種々の外界上の困難があつて、是が爲めに修道者をして層一層の困難を感ぜしめたやうである。

教團の裏面は、かやうに闇黒と汚穢とを示してゐるが、私は是によりて、今迄錦の雲でも眺めてゐるやうに思はれた二千何百年といふ昔の教團が、近く私の傍に、否私の身にヒシ〳〵と見る事が出來るやうになつて來た。吾々は多くの場合に於いて、外觀の美に加へて其對象の暗面を見るに及んで、初めて一種の親密を感ずるやうである。釋尊の教團もさうである。その全體の弟子達が皆な同時に大阿羅漢となつた譯でない。故に教團の暗面を見るに及んで始めて教團の眞相が會得せらるゝことゝ思ふ。更に他の方面から考へれば、教團は一の學校である。其裏の英傑は、逸早く規定の學科を卒へて教團の長老となつたが、機根が拙いとか、修道に不適當の性格なぞを先天的に有つて居る者は、長い年月を費さねばならぬ。卽幾分の禁戒を犯したことである。既定の禁戒を犯すとゝもに、新なる修道の妨をやつた。舍利弗、目犍連、大迦葉、憍陳如、大迦旃延、阿那律、富留那等の大弟子、尼には、憍曇彌、蓮華色、妙賢等の比丘尼の如きは、短日なる思惟と修道によりて證りを開いたが、所謂六群の比丘と稱せられた闡陀(Chanda)、麤黑(Udāyī)、難陀(Nanda)、跋難陀(Upananda)、馬師(Aśvaka)、滿宿(Punarvasu)や、長老迦留陀夷（優陀夷）の如き、尼には倫羅難陀比丘尼等の六群の比丘尼は、常に誤ちを繰り返して一面には自己の修道を妨げ、教團の和合を亂し、他方には教團の戒律を增定せしむるに至つた。併しこの闇黑面は人間共通のものである。それが適釋尊といふ明月の出現の爲めに、人性といふ下界に明闇の二つが判然となつて來たのである。闇によりて光が表はれ、光りに依つて闇を知る。この意味に於て、教團の暗黑面は、釋尊の人格、及び法の威力の裏書であるといひうる。進んで云へばこの闇黑面を知らなければ、三寶そのものが適切に解つたと云はれぬと思ふ。

更に之を內容から云へば、釋尊といふ完成的人格によりて、諸比丘は一つの目的と標準とを得たがさて愈之に進うとする時には、從來の經驗の隋力、本能等の猛烈なる妨害に逢ふ。こゝに强猛なる靈と肉との鬪諍を見るのである。その戰爭が教團の暗黑面である。その戰爭の記載が律部の諸經典である。そして其靈の勝利の部分的、階級的の規定が、比丘の二百五十戒と比丘尼の三百四十八戒である。だから之を釋尊に取つて云へば、教團の暗黑面は、釋尊御自身の六年間の修道の歷程そのものであると云つてよいと思ふ。私はこの教團の暗黑面に接して、あの清淨高潔なる釋尊が、よくもかやうな汚い人間事を丁寧に御世話されたことであらうと不審に

思ふた程であつたが、この考へが起るにつれて人性の闇黒面に對する釋尊の御親切がさぞと了解されるやうになつた。

佛及び佛弟子の修道は、云ふ迄もなく基礎生活の破壞であつた。人間の欲望、感情、智識を否定し、性的の要求を斷滅して、清淨高潔な無我の生活を得るにあつた。かやうにヒシ〳〵と人性の牙城に迫つたことであるから、其犯戒は、本能的衝動的の反抗が多い。卽ち巧なる手段によりて犯罪するよりも、本能の力に制せられて、爆發的か又は隋勢かによりて單純に犯戒するものが多いのであつた。

聞く處によれば、古來律部を講述する際に、苟も聽講者の中に、笑聲を發するやうなことがあれば、直ちに退場を命じたとの事である。先人が法の尊嚴を重んじたことはこの様であつた。私もなに出來る丈謹嚴な態度をもつて、教團の裡面を紹介しやうと思ふ。

一　利　欲

衣食住の三つは、最も原始的な基礎生活である。然るに教團の規定によれば、彼等は糞掃衣を纏ひ、一坐一食して十二頭陀の行（増阿第五）を修めねばならぬ。行乞の際にも、次第乞食といふて、貧富を擇ばず、家の次第に從つて行乞せねばならぬ。されば食の精粗の如きは省みる處でない。釋尊は、このことに關して、痛切なる譬喩によりて、恥味を誡められた。夫婦が一人の子を連れて曠野に飢ゑて、どうすることも出來ぬ。彼等は子の肉を喰はざれば、聚落には達せられぬ。夫婦は飢の結果、死に頻してゐる子の肉を喰つた。汝等、その時夫婦は肉味を賞する心ありと思ふか。汝等、摶食（だんじき）をとる時、この夫婦の心掛けがなくてはならぬ（雜阿第十五）。かやうな敬虔な寡欲の態度から釋尊は自ら一坐一食の身心に大利あることを實驗せられ、或時祇園精舍にあつて、この一食制を說かれた。すると跋陀和利（又は拔提婆羅）は、自分は到底一食では、心懊惱として堪へることは出來ないと申して遂に或時期の間教團を去るに至つた。（中阿五十一。増阿四十七）。彼は生理上堪へ忍ぶことが出來ないのであると思つたらしい。或時に衆比丘は竹林精舍に集つて、盛んに施食の精麁を語り合うた。某檀越は麁食を施した。吾々は食ふたけれども、少しも味がなくて力とならなかつたなぞと云うて、釋尊の教呵を受けたことがある（雜阿第十六）。この簡單なる記事は、その當時の光景を我々の眼前に髣髴たらしめる。

金銀、器物も亦蓄へることが出來ない制であつた。然るに跋難陀比丘は、或時王舍城の大臣から肉の供養を受けんとしたが、或機會から肉の代りとして五錢を貰うた。彼はその錢を以て都合のよい場合に口腹の欲を滿さうとしたのである（四分律第八）。其他、鐵鉢泥鉢を多く蓄へてまるで自分の房（へや）を陶器店のやうにしたり（四分律第九、十誦律第七）、或は房舍を建てると云つて貰うて來た金を衣に費して、今度は眞實に建てるから金をくれなどゝ甘いことを云つて、教呵されたものもある（四分律第廿四）。

殊に甚しいのは、六群の比丘が、石蜜を以て小兒を誘ひ、之を人買ひに賣らんとして兩親の發見する處となつて逃げ去つたことである（四分律第五十五）。釋尊は之を波羅夷（Pārājikā）罪であるとせられた。波羅夷は無餘又は極惡と譯し、卽ち教團に於ける極刑である。卽ち殺生、偷盜、邪婬、妄語の四罪を指す。この罪は偷盜である。

房舍に對する利欲の適例は、輸連國の四比丘、阿濕輸、不那娑婆、般陀、樓醯那が、釋尊が五百の弟子とゝもに迦尸國から其地に巡行し給ふを聞き、舍利弗、目連の兩人の爲めに、この房舍を取られてはならぬと思うて、その中の上房を擇んで世尊に奉り、其他は四分して四人の有とした。

一、伽藍、伽藍物、房舍、房舍物。
二、瓶、瓮、釜鑊、燈臺、諸雜物。
三、繩、牀、木牀、大褥、小褥、臥具、雜物。
四、材木、竹、草花果葉。

舍利弗、目連の兩人は、行軍の時の先發隊のやうに、釋尊の仰せを受けて、其處に行き四比丘に諸比丘の臥具の準備をするやうにというたが、四比丘は上の私有を申し立てゝ臥具の準備を拒んだ。釋尊はこの事件から諸比丘を集めて、四方の僧物を私してはならぬ。犯すものは偷蘭遮（Sthūlāyayas 卽ち極惡罪に至るべき方便で、善根を斷ち、惡趣に墮する罪である）と仰せられた（四分律第五十）。

其他、大迦葉が曠野城を行乞した際に、城民は迦葉の一行を見るや否や姿を隱して仕舞ふ。怪しんで其故を問へば、この國の比丘が各々競うて分に過ぎた大房舍を建てんが爲めに、人さへ見れば、工匠を施せ、木材、車、繩等を施せと强請するが爲めに、諸人は比丘の姿を見れば、

姿を隱すのであるといふことが解つた。釋尊はこの時も多くの譬喩をとき、賴吒婆羅の如きは父母の家にすら求めなかつた。父が何故に我に乞はぬかといふた時に、賴吒婆羅比丘は

多求人不愛　不得懷怨恨
是故我不乞　恐生增減故

といふた。汝等癡人私に大房を造らんとして多く人に求むるは非法であると申れた（四分律第三）。その他、達尼迦比丘は陶師の子であつた爲に、自分の庵舍を泥を以て土藏のやうに塗り上げ、之を赤色にした。彼の比丘の留守の間に釋尊之を見て驚かれ、阿難に命じて壞たしめた（四分律第一、十誦律第一）。

尙ほ、六群の比丘が金銅珠肆、象馬牛羊等の肆をいだし、賊の贓品を買うて教呵せられた（十誦律第七）ことや、飢饉の際に富家に至りて、同行の比丘が互に讃め合うて、この比丘に供養せば大福德を獲るとて、丁寧の供養を受けたこと等（十誦律第二、第十）數ふるに遑あらずである。

以上は著しい例をあげたのであるが、斯樣の事柄が、始終教團の中に波打つて、多くの比丘はいつもその利欲の渦中に浮沈したやうに思はれる。

二　鬪　諍

成道第九年に、釋尊拘睒彌國（拘深、拘舍彌）瞿師羅園に在せし時、この國の諸比丘互に黨を立てゝ諍ふた。釋尊は長壽王の喩を以て、諍は諍を以て止むる事は出來ないと教誡せられたけれども、和合せしむる事が出來なかつた。是非なく諸比丘をすてゝ跋耆國へ赴かれたことがある（中阿第十七、增阿第十六、四分律第四十三、哩氏佛教第三章）

教團の諍ひの中で、これが尤も大きかつたやうである。其他、祇園精舍に於いて六群の比丘は、常に他の僧侶間を中傷したり、十七群の比丘を撲つたり、誹謗したりして教團に動搖を來さしめた事は一再ではなかつた（四分律第十一、十八、十誦第九、第十四等）。又六群の比丘尼同志は、些細のことから爭つて、「墮三惡道中、不生佛法中」（地獄蟲め）と毒舌を吐き合うた（四分律第廿六）。迦羅比丘尼の如きは、前に喧嘩したことを想ひ出して口惜しまぎれに、僧房の中で自分の胃を撲つて哭き出し、爲めに釋尊の教誡を受けたことがある（同上）。智に暗い、意志の弱い、感情に脆い數百の女が一所にゐることであるから、相互のいがみ合ひは、隨分激迅であつ

たらしい。是等の例も擧げるに遑あらずである。

尊者陀驃子は嚴正な人で、常に衆比丘の席次を定むるに就いて、少しも偏頗がなかつた。慮が慈地比丘はその席次の爲めに三度不味い食を得た。彼は大に腹を立てた。之はあの陀驃子比丘が乃公を憎んでこんなことをするに違ひないと思ひ込んで、比丘尼になつてゐる妹蜜多羅に迫り、今から釋尊のおん前へ出でゝ、陀驃子比丘が妾を犯したと申し立てよと言ひつけた。妹の比丘尼は兄の威勢を恐れて、この無根のことを申立てた。けれども兩比丘の平生を知れる諸比丘は遂に慈地比丘をしてことの眞相を自白せしめた（雜阿第三十八、十誦律第四）。慈地比丘は腹を癒すことが出來なかつた爲め、其後も度々陀比丘を陷れやうと企てた（十誦律第三十七）。

釋尊の晩年に及んで、提婆の獨立は、教團に對して非常の動搖を與へたことであるが、この眞相の研究は、他日別の題目の下に、讀者に見ゆることとする。

破和合僧の罪は五逆罪の一つであるが、是は單に提婆一人の罪ではなかつた。それも其筈で、五百人より二千五百人以上の比丘が一所に生活し、その大部分は未離欲の人であるから、紛諍の起ることは寧ろ當然のことと思はれる。

三　無　智

無智の故を以て大騷ぎをしでかしたのは、釋尊が毘舍離にあつて不淨觀を說かれた時、諸比丘は一樣に痛切なる不淨觀を感じた。之によりて道を體得した人も多かつたが、不淨を觀じて身を患ひ、刀繩毒藥を以て自殺し、又は斷巖より身を投じて死んだ比丘も少くなかつた。一比丘ありて婆裘園に入りて死を願うてゐる處へ魔林梵志の子、勿力伽難提比丘が來たのを見てどうか自分を殺して呉れ、汝にこの衣鉢を授けてやると賴んだ。勿力伽難提比丘は願を容れてかの比丘を殺し跋求摩河邊に立つて血刀を洗つてゐると、惡魔が來て耳元に囁くには、汝は無量の功德を獲る行爲をやつた。そのやうな度せざる者は度し、未涅槃の者を涅槃に入れよ。汝は無量の福祉といふもにその人々の衣鉢を獲ることが出來ると讃め且つ誘惑した。かの比丘は之を聞いて大に喜び、再び刀を提げて園中に入り、諸比丘を呼んで死を勸めた。未離欲の比丘は之を恐れたが、欲を解脫した比丘は喜んで殺して貰つた。之が爲めに勿力伽比丘は日毎に二三人より六十人を殺し、伏屍累々として園中に横つた。釋尊は十五日布薩の時比丘の數の減つたのを御

覽になつて、阿難から上の事柄を聞かれ、勿力伽比丘を御叱りになつた。こゝに於いて阿那般那三昧（Ana-apāna・安那は出息、般那は入息、出の息を觀じて心の動亂を離るゝこと。禪定の初門である。略して安般といふ）を御說きになつた（雜阿第廿九、四分律第二、十誦律第二）。

この一事は無智も亦甚しいやうであるが、凡て一事に沒頭する時は、往々に極端に奔るものである。之は佛教々團でないが、有名な鷲崛摩が師匠の妻女に戀慕せられ、夫を拒んだ爲めに師に讒せられ師匠から百人を殺しその指を切つて首に掛くれば證りに至るを申し渡されて人命を損うた事などは矢張この轍である。釋尊の力說せられたのは、心的解脫であつた。肉體はその解脫を妨ける爲めに不淨と貶せられた迄である。未だ心の開拓の充分出來ない先に肉體を殺すことは、明に邪路に奔つたのである。こゝに於いて釋尊は、肉體に向けた修道の刀を心靈に轉じて、「寂然快樂」の悠々たる安般法を說かれたのである。

以上は無智の特例であるが、實はこの無智の爲めに諍ひを惹起し、色欲に奔り、常に修道の障害の根抵をなしたことであるが、今は著しい例を擧げたことである。

四　放逸、惡戲

威儀嚴正にして、生活に秩序あることが佛教々團の誇りであつた。當時外道の風規亂れて民衆の標的となることが出來なかつたに引き替へて、釋尊を初め諸大弟子の庠序たる風姿は、實に民衆をして歸依渴仰せしめた大なる原因であつた。

然るに六群の比丘は、行乞するに跳ね上りながら歩いたり、或は左右を見、大聲を發して戲笑し家に請ぜらるゝ際にも、羹の未だ至らざるに早く既に飯を食ひ、飯の未だ至らざるに羹を食したり又は飯の至らざるに大口を開けたり、或は大搏食して口に入らぬ程にほうばつたり、或は飯を圓めて遙に前方から口へ投け込んだり（四分律第二十）、或は舌を出してペロ〳〵口元を舐つたり、大小便を草葉の上にやつたり、水中にやつたり、立小便したり又は手を取りて道を狹しと歩いたり（同上二十一）、して教呵せられた。

跋難陀比丘の如きは、舍衞城を行乞するに、囊中に鉢を入れて、杖に貫きて肩上に擔ふて歩いた。（四分律第二十八）威儀の亂雜も、こゝに至つては極れりといふべしである。

憍薩羅國の黑山邑に馬宿、滿宿の二比丘あつて、女に戯れ、酒を飲み、琴を彈じ、瓔珞を着け、香を塗り、處々に遊歩し、女を連れて水上に浮び、あらゆる放逸の限りを盡した（十誦律第四、第四十、四分律第五）。

衆比丘、祇園精舍に集つて、衣裳、飲食、戰闘、飲酒、淫泆、歌舞伎樂なぞの評判をし合ひ（増阿四十三、十誦第三十一）或は波斯匿王と頻婆沙羅王と何れが強いなぞと修道のことはそつちのけにして世尊の教誡を受けた（雑阿第十四）。

殊に甚しいのは、六群の比丘尼が、夜明くるや、大小便を、器中より墻外に棄てると、運悪くも王舍城の大臣にかゝつた。彼女に怒りて官に向つて事を談ぜんとしたが、諫める人があつて、そのまゝとなつた（十誦律第四十四、四分律第二十五）。

其他、六群の比丘は、波斯匿王が境土の叛民を征せんが爲めに出征する時に、尋常人のやうに觀軍にいつた（四分律十五）。中には戰を見にいつて弓に射られた者もある（同上第十六）。六群の比丘尼は亦祇園精舍にあつて、妻が夫に侍き、又炊事のことをする眞似して、米を舂いたり、臥具を敷いたり、紡績をやつたり、まるで家婦のやうなことをして修道を忘つた（四分律第二十七、十誦律第四十五）。是等は實に女らしい犯戒であると思ふ。

難陀、跋難陀の兩人は、王舍城の節會にゆき、伎樂を見て、美貌の爲めに大に衆人に愛（モ）て、様々に歓樂を盡して暮に精舍に還り、この事を優陀夷に自慢話すると、悪戯者の優陀夷は、よし乃公もこれから出掛けやうと、日暮もかまはず出でゝゆくと、折り悪しく雷鳴電光の烈しい爲めに、或家に食を乞うた。姙婦が食をもつて出ると、電光に照されて優陀夷の顔は鬼のやうに見えた爲めに、女は恐怖の餘り墮胎して鬼々と叫んだ。優陀夷は驚いて逃げ歸つた（増阿第四十七、四分律第四十、十誦律第十三）。

當時、波斯匿王の夫人、未利釋尊に歸依して比丘をして自由に宮中に入らしめた。優陀夷は一日宮中に入ると、恰も未利夫人が晝寢してをつたが、遽に起きて優陀夷を迎へると、此衣が辷り落ちて夫人は裸體になり、恥ぢて蹲んだ。彼は急いで精舍に歸りて衆多の比丘に、今日こそは波王の第一寶を盡く見たりといつて自慢した（四分律第十八、十誦律第十八等）。

彼は亦祇園精舍に烏が多く集つて啼いてゐるのを悪んで竹弓を以て之を射、澤山射殺した（四分律第十六）。

殊に放逸の狀態を目前に髣髴せしめる出來事は、釋尊が衆比丘を連れて舍衞城へ入り給ふ時、人民は多く屋上樓閣なぞへ上つて、威儀嚴然たる教團の一行を眺め、神通もあらばと待ち構へた。そして初めて觀る人の爲めに既知が說明の勞をとり、あれは世尊、あれは舍利弗、目連、阿那律、これは六群の比丘というてあばれ者であるなぞといふと、六群の比丘は腹を立てゝ上を仰ぎ、其女は盲目だ、それは赤眼だ、やれ鼻が低いとか、腰が曲つてると惡口すると、女も負けずに、我々は汝等の妻でない、いらぬ御世話などゝ云ひ返す。是が爲めに釋尊の教呵を受けた（十誦律第十九）。

尤も小供らしい惡戲ば、那迦波羅比丘が世尊に御給仕申してをつた時、雨の夜、釋尊は雨衣をつけて戶外を逍遙してゐらせられた。初夜、中夜を過ぎ後夜に及び、遂に衆鳥啼けども世尊は尙ほ逍遙してをられる。比丘は眠くてたまらぬ。卽ち最後の智慧を絞りて、衣を被り「鬼だぞ」と叫んだ。世尊は只「愚人」と仰せられた。帝釋世尊を讃じて曰く

聖獨步不ニ放逸一　若毀譽不ニ移動一
聞ニ獅子吼一不レ驚　如ニ風過レ草無レ礙

引ニ導一切諸衆一　決ニ定一切人天一（四分律第十六）

之を要するに、上述の事實は、青年時代の放縱と、少年時代の腕白が、嚴格なる家長の目を偸んで、我儘をやると同じことであつて、是等の諸比丘は、初めは眞面目に出家しても、當今のある學生のやうに、いつしか大勢の元氣に任せて、眞面目な教誡に耳を傾けず、五欲樂は靑春の時に限るといふ考へで、放逸なことを行つたことであらう。若い比丘、比丘尼は教團以外の人々からも「樂は若い時だ」と誘惑されたことが多かつたらしい（四分律第二十六）。

五　病

病も亦教團の裡面に橫へた障碍であつた。祇園精舍に諸比丘が秋月風病に罹り熱の爲めに、身體乾燥し、又惡瘡を生じた。釋尊は之を憂ひて、酥、油、生酥、蜜、石蜜を服せしめた（四分律第十）。比丘亦胞を患ふ。人の脂を用ゐしめた。又比丘あり吐を患へた。細軟の髮を燒いて水に和し漉して呑ましめた。或比丘は塚間へゆきて死人の髮と脂を取つて衆人の謗る所となつた（同上第四十二）。

世尊も亦屢々輕い病に罹られたが、名醫耆婆は容易に治し奉つた（同上第四十）。舍利弗も時々病んだ（四分律第四十二、十誦律第五十六）。併し何も輕い風邪位に過ぎなかつた。

然るに婆迦梨比丘は祇園精舍に重病に罹り、大小便を床上に洩すに至り、自ら刀を執りて思へらく、自分は信解脫には第一と云はれたけれども、未だ有漏心を解脫することは出來ない。自分は到底この命を以ては彼岸に達することは出來ないことであるから證りを得ずして命終せねばならぬ。かく斷めながら双をとつて自ら刺し、遂に五蘊空を觀じて無餘涅槃に入つた。彼は病の緣によつて證りに達したのである（增阿第十九）。

沙彌均頭も病んで起つことが出來ないやうになつた。釋尊は親しく彼を見舞ひ、汝七覺支を說くことをうるや、說き得たら我が爲めに之を說けと仰せられた。均頭は世尊の爲めに七覺支を說いた。之を說く中に法德、心に滿ちて彼の病は治つた（增阿第三十三）。

竹林精舍に一比丘が重病に罹つた時も、釋尊は懇に彼比丘を慰め、御手づから不淨を除き、敷坐を代へ、手に掃箒を取りて室內を淸め、衣裳を洗濯し病比丘を扶けて淨水に沐浴せしめ、手づから食を授け給ひ、懇切に生死流轉の痛苦を說き、解脫の要法をお說きになると、病比丘は「尊顏を熟視して座上に於いて有漏心を解脫した」。（增阿第四十）

陀婆比丘、病み、上座の比丘と問答して法益を得て病治し（雜阿第五）。婆耆舍比丘も病んで釋尊の慰問を受けて正念に住し、起つて長偈を唱へて涅槃に入つた（同上第三十六）。

叵求那比丘も病んで釋尊の慰問を受けて安らかに命終し（雜阿第三十六）、阿濕波誓比丘も東園講堂に病みて三味に入ることの出來ないのを苦にしたが、釋尊の臨床によりて有漏心解脫して病癒えた（同上第三十七）。

以上は經典に表はれた病比丘の狀態であるが、この他尙ほ多くの比丘が病の爲めに修道を退墮したことであらうと思ふ。されど多くの比丘は規律正しき少欲知足の生活を續けたことであるから、人數の割合に病氣は少く、且つ烈しくはなかつたやうである。

六外難

夏安居三ヶ月の外は、比丘は一樣に遊行に日を送り、時には山路を辿り、樹下に眠ることも珍しくないことであるから、樣々の外難に接したことである。

祇園精舍に夏安居を濟した諸比丘は、空閑處にあつて頭陀の行をやつたが、多くの盜賊の脅す所となり、衣鉢、坐具、什物を奪はれ、散々に打ち据ゑられて、再び祇園精舍に集つたことがある（四分律第十）。かやうなことは隨分あつたらしい。殊に比丘尼などは盜賊や浮浪人の凌辱を受けたこと少くはなかつた（四分律第四十八、第四十九）。

熱い國であるから、蛇の害も少くなかつたらしい房の中へ時々蛇が入つたり、上から落ちたりして、未離欲の比丘を畏れしめた（四分律第四十二、第四十九）。かやうな場合には、筒に盛るか、繩に縛つて殺さぬやうに棄てよ、鼠の出る場合にも追ひやるか、鼠檻に入れて殺さぬやうに逃せとのことであつた。或時比丘が湯を沸かさうとして朽木を斫ると、中から蛇が出で比丘を噛み殺した。釋尊は慈心を以て向へと仰せられた（四分律第四十二）。或比丘は蛇に噛まれた時毒が身體に入るのを恐れて、噛まれた指を斫つた。釋尊は斫つては宜しくない。繩で指を縛つて刀を以て毒を出せと仰せられた（十誦律第三十七）。或比丘尼が安陀林中に大座してゐると、蛇が女根へ入つた。世尊は比丘尼の大座を禁ぜられた。これ等は罕なことであらうが、悲慘である（十誦律第四十）。又ある比丘は蛇のゐるのを知らずに牀上に座つて螫し殺されたが、四五日經てその房から青繩がでたので漸く他の比丘の知る處となつた。

優波先那比丘は、王舍城の寒林中の巖崛内に座禪してゐると、一尺許の毒蛇の爲めに螫された。彼は大聲をあげて、蛇に螫されたから崛内から出して呉れと云つた。舍利弗は恰ど附近に座禪してをつたから早速行つて見ると、威儀嚴然として顏色も變ぜず寂然として跌座してゐる。賞讃しながら故を問ふと、五蘊を空觀して有漏心がないから、蛇に螫されても顏色は變らないといつた。崛内から出せば、そのまゝ毒が滿身にまはつて涅槃に入つた。壯烈な死に舍利弗も非常に感動せられて長傷を造つて賞めた（雜阿第九）。

かやうな外難があつたにも係らず、彼等は矢張り樹下石上の頭陀生活を廢めることはなかつた。

教團全體が行乞を以て唯一の生活的方便としたことであるから、五穀の實りの惡い時なぞは、隨分困難を感じたらしい。斯様の際には、出來る丈比丘の知人とか、親族とかに乞食するやうにと仰せられた（四分律第一、第二、第十、等）。殊に釋尊の晩年に及んで、提婆の獨立の爲めに摩竭國の方は提婆の手に歸し、當時恰も舍衞城は米穀高價の爲め、乞食困難の

狀態であつた爲め、諸比丘は寄り〳〵五に行乞の困難を語り合つたが、釋尊は之に對しても、衣食のことに苦心するよりも、逸早く道を修め證りに至ることを勤めよと仰せられた（増阿第四十三）。かやうな困難に遭遇する毎に偉畧の面目は益發揮せらるゝことである。

第二五比丘

憍陳如、阿濕婆恃、跋提、摩訶男、婆沙波

（一）五比丘は、もと釋尊出家の後、父淨飯王が釋尊の身を案じ、つけられた侍者であつた。彼等は釋尊に仕へながら釋尊と等しく苦行を修してゐたが、勤苦六年の後、釋尊は苦行の甲斐なきを知りて菩提樹下に赴かれた時、彼等は釋尊が苦行に堪へ兼ねて道を捨てられたものと思うて、遂に五人手を携へて伽耶の苦行林より北西六十里（直徑）許なる波羅奈斯（Vārāṇasī）の鹿野園に赴いて苦行を續けた。

（二）五比丘の名は憍陳如（Kauṇḍinya 了本際）阿濕婆恃又は阿說示（Aśvajit 馬勝、馬星、馬師、正願？）、跋提（Bhadrika 仁賢）摩訶男（Mahānāmā 大號）婆沙波（Vāspa正語？）である。この中阿濕婆恃は威儀第一として知られ、威儀によりて舍利弗を感化したことを以て有名である。婆沙波は後に多くの釋種と〳〵もに出家せる婆沙波とは同名異人で、摩訶男も阿那律の兄として

迦毘羅城主となつた摩訶男とは同名異人である。(三)尚他説には摩訶男、婆沙波の代りに摩訶男拘利太子、十力迦葉とする。今は初めの説に従ふ。

(五)波羅捺斯市は、河の左岸に位し、金河（Varna Nadi）は市の北東を流れて恒河に注ぎ、アシ（Asi）河の小流は市の南西を流れてをる。この地はもと迦尸（Kāś）と呼ばれたが、後今の名となつた。この地のある王の名なるバナーラス（Banāras）から來たのであらうと云はれてゐる。そしてこの名はヴラ（金河）とナサ（アシ河）の二河の名から取つたといふのである。鹿野園は金河を越えて市の北方大凡一里半の處にあり、林樹綠に花木匂ひ、禽獸むれ遊ぶ閑雅な林である。五人はこゝに住して一心に苦行を修めた。彼等がこの地に來つてから月餘にして釋尊はこの地に最初の法輪を轉ぜられた。釋尊成道の際、大悲の注ぐ處はこの五比丘であつた。彼等は六年の間釋尊の友となり從者となつて道を修めたのである。この間思ひを共にし、行を一にして進んだ。釋尊から云へばいま自分はこの大覺を獲てゐるのに、彼等は未だ迷妄に陷りて邪道を修めてをる。かくて大悲は水のやうに彼等に注がれた。(六)「一萬一千五百の流れが五大河に注ぐやうに、釋尊の大慈悲は五比丘に向つて注がれた」といふは某傳記者の妙なる

言葉である。

(七)されど彼等は釋尊の御姿を見るや、云ひ合はしたやうに輕蔑の眼を以て眺め、「そこへ修行を退墮した瞿曇が來た。言葉を交へたり禮をしたり、することは要らぬ」といつた。とは云へ何んというても今迄敬を捧げてをつた主人であるから、殊に威容の凡ならざるに撲れて、彼等は覺えず起つて禮を施し、或者は座具を敷き、或者は衣鉢を受けとり、他の或者は水を捧げた。かやうに彼等は強ひられたやうに、我にもあらず敬禮を捧げたけれども、まだ輕侮の念を去ることは出來ない。彼等ば釋尊を呼ぶに前の通りに瞿曇々々といつた。瞿曇は釋尊の姓でまた通稱であつた。この時釋尊は「汝等、我を呼ぶに友を以てしてはならぬ。我はいま無上安穩の證りを開いて、憂なく恐れなく、生死の迷を斷つて、聖智見を獲てをる。汝等いまより我教を受けて證りを開くがよい」と仰せられたけれども彼等は尚ほ瞿曇と云ひ友と呼んだ。「瞿曇よ、卿は先に苦行を修めてゐる時でさへ、勝れた德はなかつた。今や道を棄てゝをりながら、何ぞ人に勝れた智德があらう」といふ。釋尊は再び前の御言葉を繰り返されたが、彼等も亦前言を以て答へた。かくすること三度、釋尊は最後に「あゝ汝等は愚痴の者である。汝等はいま面前我相

好の清らかに澄みわたつてゐるのを見ないのであるか。五比丘よ、如來に對して毀呰をなすならば、大なる苦惱を受けるであらう。

「五比丘よ、出家の人として、二種の近いてはならぬものがある。一は世欲に執著する者、他は邪道を修むるものである。瑕欲の凡夫は、下劣な欲樂に心を奪はれて長く輪廻の暗に沈み、邪の苦行を修むる者は、愚痴の爲めに、徒らに身を苦めて心の光を覆ひ、暗より暗に入る。比丘よ、我はいまこの二邊を離れて中道に憩うてをる。心は諸の穢を除き、暗を拂うて安穩である。

「汝等、苦集滅道の四諦により迷悟の因果を知り、正見、正業、正悟、正行、正命、正方便、正念、正定の八正見によりて正しい思惟修道に進むがよい。」と落葉を吹きまくる烈風のやうに、五比丘の心の塵を拂はれた。御顏は澄み、御言葉は冴え、一脉の靈氣は及のやうに五比丘の胸を抉るの趣があつた。憍陳如は說法の終る前に心の垢を去りて法眼を獲た。釋尊は之を御知りになつて、「阿若、憍陳如」と仰せられた。阿若はアーヂユニヤータ（Ajñāta）にして既知の意である。之より後阿若憍陳如（アーヂユニヤータカウンデヤ）と呼ばれた。次に阿濕婆特、摩訶男の二比丘が開悟し、其次に跋提、婆沙波も道に入つた。實に成道第一年の阿沙荼月（四月）十四日であつた。

かくて五比丘は釋尊に師事して法を聞き、道を修め、二人が奉侍すれば二人は行乞し、三人奉侍すれば二人は行乞した。こゝに三寶具足し、佛教々團の基礎は成立した。佛は釋尊、法はその說き給ふ教、僧は三人以上和合して道を修むる團體の稱である。誠に鹿園の說法は佛教誕生の呱々の聲であつた。憍陳如が開悟するや、地神歡き喜びて天界に傳へ、諸天は諸天へ傳へて鹿野園の轉法輪を讃じ合うたといふことは多くの經典の記載する處であるが、こゝに深遠な意味がある。實に驚天動地の大宣言であつた。草木もこの聲を聞いて勇み、土石もこの聲によりて蘇つたであらう。無量の有情はこの聲により永劫の生命を獲るに至つた。そしてその正しき代表者は憍陳如等の五比丘であつた。

爾來、彼等は教團の耆宿として諸比丘の間に重きをなした。[八]殊に憍陳如は寬仁博識にして威儀を失はぬ大長老であつた。[九]佛滅後の第一結集の際、阿難が鹿野園に說かれたる轉法輪經を誦出すると、憍陳如は結集の上首たる大迦葉に云ふやう「尊者大迦葉よ私は嘗つてこの教說を聞いた。この教は實に私の爲めに說かれたものであつた。夫は私の迷の血を乾かし、私の涙の海